高知県埋蔵文化財調査報告書第31集

高知県

岡豊城跡

―第1～5次発掘調査報告書―

1990年3月

高知県教育委員会

岡豊城跡発掘調査報告書

－第１～５次調査－

1990年３月

高知県教育委員会

序

岡豊城跡は、長宗我部氏の居城として県外にも広く知られている中世城跡であり、高知県における代表的な城跡です。その存在は、古くから地元の方々をはじめとし、多くの人々の知るところであり、近年には公園としても親しまれていました。

高知県では、このたび岡豊山に県立歴史民俗資料館の建設を進めており、同時に岡豊城跡を資料館と一体となった史跡公園として整備することにより、城跡の保護を図るとともに、歴史教育の場として活用していただけるものと考えております。しかし、岡豊城跡の姿を表わす具体的な資料はほとんどなく、多くの謎につつまれていました。今回、発掘調査を実施することにより、岡豊城跡の当時の姿を解明し、整備に役立つ基礎資料を得ることとなりました。

発掘調査は、昭和60年度から国庫補助事業として平成元年度までの５ヶ年間にわたり実施されました。その結果、当初の予想以上の遺構、遺物が発見され、中世城跡の研究を進める上では欠くことのできない資料として注目されています。

昭和62年度には、第１～３次調査の結果を概報としてまとめておりますが、さらに、第４・５次調査の結果を加えた本書が、広く各分野の研究資料として役立ち、また、調査結果を基に整備の行われた岡豊城跡が活用されることにより、埋蔵文化財へのより一層の理解を深め、その保護、保存を進めることができれば幸いと考えております。

最後になりましたが、多くの方々の御理解と御協力により調査を進めることができました。関係各位の皆様には、心からの感謝の意を記して表します。

1990年３月

高知県教育委員会

教育長　西　森　久米太郎

例　　言

1　本書は、高知県教育委員会が国庫補助を受けて実施した「岡豊(おこう)城跡」の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、昭和60年度から平成元年度までの５ヶ年にわたり実施された。第１～３次調査については、昭和62年度に概報を刊行している。

3　岡豊城跡の各曲輪の名称については、従来通称として使用されていた詰・二ノ段・三ノ段・四ノ段を使用し、詰東側に付属する小曲輪については、詰下段と呼称することとした。

4　調査にあたっては、岡本健児氏（高松短期大学教授・高知県文化財保護審議会会長）に調査顧問をお願いし、御指導をいただいた。記して感謝する。

5　本書の執筆は次のとおりである。Ⅰ～Ⅳ　森田　Ⅴ　松田・岡本　Ⅵ　松田・岡本・森田

　また、編集は松田・岡本・森田の協議により、森田がまとめた。

6　調査区は調査年度によって、詰より順次Ａ～Ｓ区とした。検出遺構は各調査区をまとめ通し番号とし、出土遺物は器種別によりまとめた。

7　水準高は、詰に存在する三角点の水準高97.00ｍを基準として用いた。また、図中の方位は公共座標の第Ⅳ系の北である。

8　西堅堀群については、南国市教育委員会の原図を使用させていただいた。

9　調査にあたっては、地元八幡区をはじめとし、多くの方々の御協力をいただいた。また、次の方々には御教示をいただいたので記して感謝する次第である。

　千田嘉博　前川要　中井均　村田修三　小島道雄

10　出土遺物等の資料は、高知県教育委員会において保管している。なお、出土遺物の注記は、第１～５次調査をＯＫ１～５により表示している。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　位置と歴史的環境……2
1　位置……2
2　歴史的環境……3

Ⅲ　調査の概要……6
1　岡豊城跡の概要……6
2　第１～５次調査……15

Ⅳ　遺構……21
1　詰……21
2　詰下段……27
3　二ノ段……33
4　井戸・堀切……37
5　三ノ段……40
6　四ノ段……44

Ⅴ　遺物……51
1　土師質土器……51
2　輸入陶磁器……52
3　国内産陶器……55
4　瓦質土器……55
5　土製品……56
6　石製品……56
7　瓦類……56
8　金属製品……60
9　宗教具……61
10　古銭……61

Ⅵ　総括……63
1　遺構について……63
2　遺物について……67

挿　図　目　次

第１図　岡豊城跡位置図
第２図　周辺遺跡分布図
第３図　岡豊城跡地形図
第４図　主郭部地形平面図
第５図　主郭部地形断面図
第６図　西斜面竪堀平面図
第７図　西斜面竪堀断面図
第８図　グリッド設定図
第９図　調査区設定図
第10図　詰Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区
第11図　詰Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区ＳＢ１・２
第12図　詰Ａ区古銭埋納ピット（Ｐ１）
第13図　詰Ａ・Ｈ・Ｊ区セクション
第14図　詰Ｈ・Ｉ区
第15図　詰下段Ｇ区段状遺構セクション
第16図　詰下段Ｇ区ＳＢ３
第17図　詰下段Ｇ区ＳＫ２
第18図　二ノ段セクション
第19図　二ノ段Ｃ・Ｎ区
第20図　井戸・堀切Ｍ区
第21図　井戸・堀切Ｍ区ＳＥ１
第22図　井戸・堀切Ｍ区北トレンチ北壁セクション
第23図　三ノ段Ｋ区
第24図　三ノ段Ｌ区
第25図　四ノ段Ｐ区
第26図　三ノ段Ｏ・Ｑ・Ｒ・Ｓ区
第27図　三ノ段Ｏ・Ｑ・Ｒ・Ｓ区セクション
第28図　三ノ段Ｏ・Ｑ・Ｒ区ＳＢ４
第29図　岡豊城跡縄張図
第30図　土師質土器(1)
第31図　土師質土器(2)
第32図　土師質土器(3)
第33図　土師質土器（４），青磁(1)
第34図　青磁(2)，染付(1)
第35図　染付(2)
第36図　白磁，瀬戸・美濃系，褐釉陶器，備前
第37図　備前，産地不明陶器，瓦質土器
第38図　瓦質土器，土師質土器
第39図　瓦質土器，土師質土器，石製品(1)
第40図　石製品(2)
第41図　土製品（土錘・羽口）
第42図　瓦(1)
第43図　瓦(2)
第44図　瓦(3)
第45図　瓦(4)
第46図　瓦(5)
第47図　鉄製品(1)
第48図　鉄製品(2)，青銅製品
第49図　詰 pit 1 出土銭(1)
第50図　詰 pit 1 出土銭(2)
第51図　詰 pit 1 出土銭(3)
第52図　詰 pit 1 出土銭(4)〔426～444〕
　　詰遺構外出土銭〔445～449〕
第53図　詰遺構外出土銭〔450～461〕
　　二ノ段出土銭〔462～473〕
第54図　二ノ段出土銭〔474～475〕
　　三ノ段出土銭〔476～481〕
　　表採〔482・483〕

表　目　次

第１表　周辺遺跡表
第２表　土師質土器法量表
第３表　〃　皿法量表
第４表　〃　杯法量表
第５表　出土土器法量表１～14
第６表　軒丸瓦計測表
第７表　軒平瓦計測表
第８表　丸瓦・平瓦計測表
第９表　出土銭計測表１～３
第10表　出土銭一覧表

写真図版目次

図版１　遠　景（東より）
〃　（南より）
図版２　詰からの眺望（東方）
北部掘切
図版３　詰西斜面竪堀
〃
図版４　詰Ａ区調査前
詰Ａ区ＳＢ１．２・ＳＸ１（北東より）
図版５　〃　ＳＢ２・ＳＸ１・Ｐ１
〃　ＳＸ１検出状態
図版６　〃　Ｐ１検出状態
〃　Ｐ１古銭出土状態
図版７　〃　ＳＸ１茶臼出土状態
〃　刻銘瓦出土状態
図版８　詰Ｄ区ＳＢ１（南西より）
〃　ＳＢ１礎石
図版９　詰Ｈ区全景（北西より）
〃　ＳＫ１
図版10　詰下段Ｇ区ＳＢ３・土塁検出状態
〃　ＳＢ３・土塁（南西より）
図版11　詰下段Ｇ区ＳＫ２検出状態
〃　ＳＫ２（南西より）
図版12　二ノ段Ｎ区（南西より）
〃　（北東より）
図版13　〃　南土塁検出状態（北西より）
〃　土塁確認トレンチ
図版14　堀切全景（北西より）
〃　（南東より）
図版15　Ｍ区井戸南側石積み
〃　井戸全景
図版16　三ノ段Ｋ区割石出土状態
〃　ピット検出状態
図版17　三ノ段Ｑ区ＳＢ４・土塁石垣（南より）
〃　ＳＢ４・土塁石垣（東より）
図版18　三ノ段Ｏ区ＳＢ４・土塁石垣（東より）
〃　ＳＢ４・土塁石垣（南より）
図版19　〃　ＳＢ４検出状態（南より）
〃　ＳＢ４石臼出土状態
図版20　三ノ段Ｒ区土塁検出状態（北より）
〃　全景（北より）

図版21　三ノ段Ｒ区ＳＢ４・ＳＤ３（西より）
〃　ＳＢ４・ＳＤ３・ＳＸ３
図版22　〃　全景（北より）
〃　ＳＤ３小柄出土状態
図版23　土師質土器(1)
図版24　〃　(2)
図版25　〃　(3)
図版26　〃　(4)
図版27　〃　(5)
図版28　〃　(6)・青磁・染付・白磁
図版29　青　磁・白　磁（外面）
〃　（内面）
図版30　染　付(1)（外面）
〃　（内面）
図版31　染　付(2)（外面）
〃　（内面）
図版32　染　付(3)（外面）
〃　（内面）
図版33　青　磁・白　磁（外面）
〃　（内面）
図版34　天目茶碗・瓦質土器
白磁・備前・瓦質土器
図版35　備　前（外面）
〃　（内面）
図版36　備前・瓦質土器
図版37　備前・土師質土器
土師質土器
図版38　土　錘
硯・臼・羽口
図版39　瓦(1)
図版40　〃(2)
図版41　〃(3)
図版42　鉄製品(1)
図版43　〃　(2)
図版44　〃　(3)・青銅製品
図版45　金銅仏
詰ｐｉｔ出土銭(1)
図版46　〃　(2)
図版47　〃　(3)
図版48　〃　(4)
図版49　詰遺構外出土銭・表採銭
二ノ段・三ノ段出土銭

Ⅰ　調査に至る経過

岡豊城跡は長宗我部氏の居城として知られている中世城跡であり、その規模、構造からみても高知県を代表する城跡であるところから、昭和30年２月15日付けで県指定史跡となっている。城跡は、標高97ｍを測る岡豊山に立地しており、山頂からの展望は、東から西へと広く高知平野全体に開けている。

岡豊城跡の調査前の状況をみれば、山頂部に位置する詰を中心とした主郭部は、楠、杉等の植林や公園化に伴い行われた植栽による樹林におおわれており、全体には笹竹が繁植している。中心部の土塁、堀切等の遺構は現況においても確認されたが、周辺部の遺構の確認は容易ではなかった。植林、植栽は過去２回の公園化に伴い行われており、それ以前はほとんど樹木のない笹山であったようである。最初の公園化は、昭和11年に岡豊山の所有者によって「長宗我部岡豊城跡西田公園」としておこなわれており、楠、杉等の大部分はこの時植林されていたが、昭和42年には再度所有者が変わり、２回目の本格的な公園化が行われ、遊歩道やベンチの設置、植栽等により整備されている。また、主郭部の西方に位置する副郭である「伝庶跡曲輪」は、明治28年に日清戦争凱旋記念碑、明治38年には日露戦争戦死者墓地などが造られ、公園の一部として使用されていたが、昭和45年12月16日に「岡豊城跡伝庶跡曲輪」として南国市指定史跡となっている。

岡豊城跡の発掘調査は、昭和60年度まで行われたことがなく、詰などの各曲輪、土塁、堀切等の現地形による観察を中心とした調査が行われていたのみであり、文献、古絵図等の資料もなく、具体的な城跡の構造についてはほとんど不明であった。今回、岡豊山に県立歴史民俗資料館建設が進められることになり、これに伴い岡豊城跡を整備し、保存、活用を図ることとなった。そして、整備のための基礎資料を得るために発掘調査が実施される運びとなった。

発掘調査は、昭和60年度から国庫補助事業として開始され、平成元年をもって５ヶ年間の調査を終了した。調査は詰より順次二ノ段、三ノ段と進められ、予想以上の良好な遺構、遺物を検出しており、大きな成果を得ることができた。また、報告書については、第３次調査が終了した昭和62年度に「岡豊城跡発掘調査概報」として第１～３次調査の概要が報告されている。

なお、各年度の発掘調査の担当者は次のとおりである。

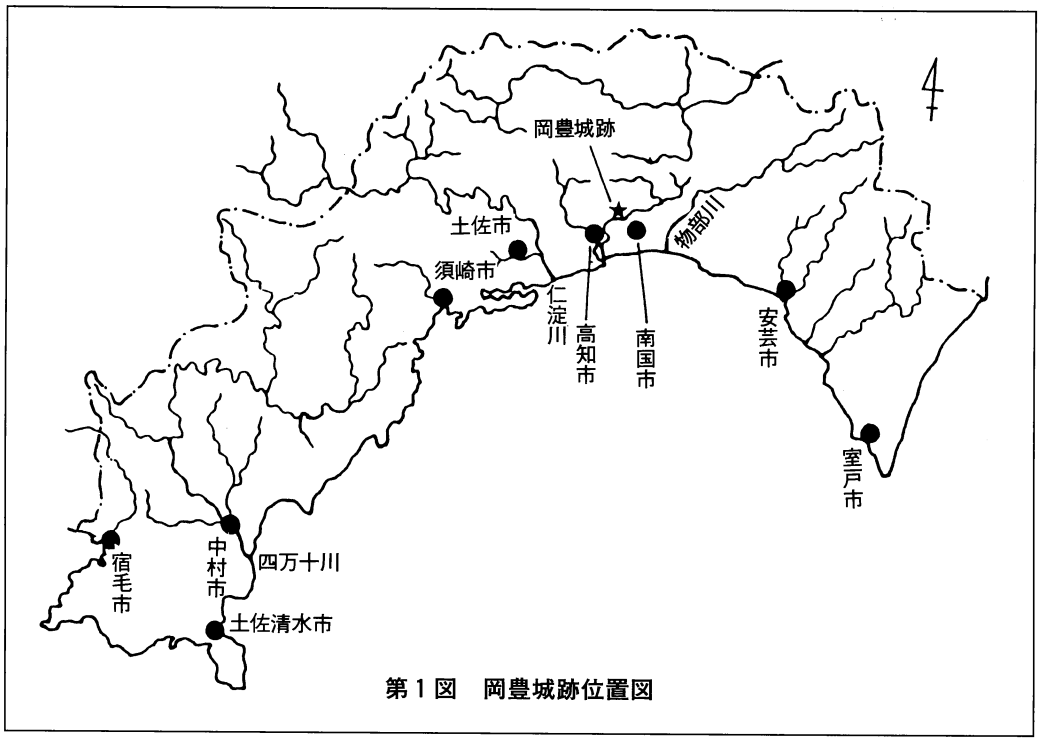
昭和60年度（第１次調査）　松田直則　高橋敬明　角谷和男
昭和61年度（第２次調査）　高橋敬明　森田尚宏
昭和62年度（第３次調査）　森田尚宏
昭和63年度（第４次調査）　森田尚宏　岡本桂典
平成元年度（第５次調査）　〃　〃

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　位　置

岡豊城跡は、高知県の中央部である南国市岡豊町八幡岡豊山に位置する。南国市は県都である高知市の東に隣接しており、市域の北部は四国山地の南端部にあたり、南部は県下最大の平野である高知平野の大半を占めている。高知平野は、太平洋に注ぐ物部川と浦戸湾へ流入する国分川等の河川による扇状地と三角州により形成されているが、中でも物部川を中心とする東部は香長平野と呼ばれており、現在も田園地帯が広がっている。香長平野には、陣山、三畠山、坂折山、吾岡山等の標高100ｍ前後の孤立丘陵が点在しており、岡豊城跡の所在する岡豊山もこれらの丘陵の内に含まれている。また、岡豊山の南には、やはり孤立丘陵に大津城跡が築かれている。

岡豊山は、蛇紋岩からなる標高97ｍの丘陵である。その山容は、東から南斜面にかけては急傾斜であるが、北傾面はやや緩傾斜であり、西部には標高49ｍの小丘陵がつづき、平野部に没している。南斜面下には東から西へと国分川が流れており、西方から南方にかけては、現在も湿田が残されており、当時は広範囲な湿地帯が存在したと考えられ、自然の要害となっている。北方は低い尾根により四国山地へとつづいていたようだが、現在では国道により分断されており、さらに公園化による山頂部への道路の建設により現況は一変している。



第１図　岡豊城跡位置図

2　歴史的環境

岡豊城跡周辺の歴史的環境をみれば、南国市、香長平野が中世までの土佐の最も重要な地域であったことを知ることができる。現在のところ旧石器時代の遺跡はこの地域で発見されていないが、高知市介良に所在する高間原古墳群の１号墳の玄室敷石面からチャート製の細石核が出土している。

縄文時代の遺跡は四万十川流域に比べ少ないが、最近では中央部においても良好な遺跡が発見されている。時期的には後期が中心であり、中期以前の遺跡は現在のところ未確認である。田村遺跡群では、後期後半の包含層が検出されており、磨消縄文を中心とする土器群とともに多量の打鏃が出土しており、低地における縄文遺跡の立地を考える上で注目される。また、北部の山麓部では、栄工田、奥谷北、奥谷南、天神の前等の後期の遺跡が所在しているところから、縄文遺跡の分布の中心となっている。晩期の遺跡は現在のところ発見されていないが、断片的資料が認められるので、近い将来確認されると考えられる。

弥生時代の遺跡は南国市の平野部で集中的に発見されており、特に前期の遺跡はそのほとんどが南国市に所在している。田村遺跡群では前期初頭の集落跡が検出され、高知県中央部における弥生文化伝幡の姿をみることができる。また、北方300ｍでは前期前半の環境集落である西見当遺跡が所在しており、前期における集落の移動を知ることができる。さらに、田村遺跡群では前期の水田跡も発見されており、集落と生産の場が検出されている。前期後半以後になると、集落が拡散し、平野部ばかりではなく山間部にも遺跡の立地をみるようになる。田村遺跡群においては、中期から後期前半にかけても集落が引き続き形成されており、香長平野における拠点的集落としての位置を占めていたと考えられる。後期後半になると、遺跡の立地は北部の長岡台地上に移り、南国市の東崎遺跡や土佐山田町のひびのき遺跡のような大規模な集落が出現してくる。

古墳時代においても香長平野がやはり中心であり、南国市から土佐山田町の山麓部や孤立丘陵上には多くの後期古墳が立地している。中でも小蓮古墳は大形の石室をもつ円墳であり、香長平野北部を中心とする有力者の墳墓と考えられる。また、22基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群もこの地域に造築されている。古墳時代の集落は現在のところ明確には確認されていないが、土佐国府跡の調査等で竪穴住居跡が検出されており、今後発見されると考えられる。なお、岡豊城跡にも古墳が存在しており、須恵器、鉄製品等が出土しているようである。

古代の遺跡としては、土佐国府跡、比江廃寺跡、土佐国分寺跡等が所在しており、古代土佐国の中心地であることを示している。土佐国府跡は昭和54年度より確認調査が行われており、掘立柱建物跡、溝、土壙等が検出されているが、政庁とみられる遺構は現在のところ未確認である。土佐国分寺跡では東側に寺域を示すとみられる土塁が残されており、現状変更に伴う調査及び伽藍配置確認のための調査が行われており、礎石建物跡、掘立柱建物跡等が検出されて

第２図　周辺遺跡分布図

いる。比江廃寺跡は白鳳時代の寺院跡であり、塔心礎は残されているが、他の礎石等はなく、現在のところ伽藍配置、寺域については不明である。南国市域の古代の遺跡としては、他に田村遺跡群において平安時代前半の掘立柱建物跡群が検出されており、「田村庄」関係の遺構ではないかと考えられている。

中世になると遺跡数も増加するが、調査されたものとしては田村遺跡群をあげなければならない。発掘調査より、溝に囲まれた建物群が31ヶ所検出されており、守護代細川氏が入国し、居館である田村城跡を築いた時期とそれ以前、そして戦国時代となるそれ以後の3時期に分離される。溝は1辺30～50mの規模をもち、約半数では石組み等の井戸を伴っている。掘立柱建物跡は主屋とみられる大型のものが数回の建替えをもち検出されており、周辺には小規模な掘立柱建物跡が付属している。他の中世の遺跡は各地の調査で検出されているが、規模の大きな遺構はあまりみられない。中世城跡では、北部の山陵上と南部の孤立丘陵上に久礼田城跡、新城城跡、亀岩城跡、三ッ城城跡、蛸の森城跡、栗山城跡等の各城跡が所在しており、平野部には有力国人等の城館跡として廣井土居城跡、千屋城跡、野田土居城跡、岩村土居城跡等が数多く残されている。現況では、これらの城館跡で土塁等が残されているものは少ないが、水田、畑等の地割には、土塁、堀等の痕跡をみることができる。また、南国市以外では、中村城跡・栗本城跡・塩塚城跡（中村市）、和田城跡（椙原町）、久礼城跡（中土佐町）、波川城跡（伊野町）、芳原城跡・吉良城跡（春野町）、後藤家屋敷跡（安芸市）などが調査されており、戦国時代を中心とする城跡の資料が蓄積されている。

第1表　周辺遺跡表

番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
1	岡豊城跡	中世		38	蚊居田土居城跡	中世	消滅
2	亀ヶ森城跡	〃	消滅	39	里改田土居城跡	〃	
3	坂本城跡	〃		40	三ツ城跡	〃	
4	亀岩城跡	〃		41	下田土居城跡	〃	
5	久礼田城跡	〃		42	鮹森城跡	〃	
6	中ノ土居城跡	〃	消滅	43	中ノ城跡	〃	消滅
7	沖ノ土居城跡	〃	〃	44	栗山城跡	〃	
8	植田土居城跡	〃		45	細川土居城跡	〃	
9	久次土居城跡	〃		46	池城跡	〃	
10	改田城跡	〃	消滅	47	花態城跡	〃	
11	物見の城跡	〃		48	鎌島城跡	〃	消滅
12	三畠城跡	〃	消滅	49	大津城跡	〃	
13	比江山城跡	〃		50	八頭城跡	〃	
14	新城城跡	〃		51	金山城跡	〃	
15	豊永土居城跡	〃		52	田辺島城跡	〃	消滅
16	池尻古城跡	〃		53	一宮城跡	〃	〃
17	西村土居城跡	〃		54	久礼野城跡	〃	
18	谷土居城跡	〃	消滅	55	一宮別城跡	〃	消滅
19	石谷土居城跡	〃		56	薊野城跡	〃	
20	小野土居城跡	〃	消滅	57	秦泉寺城跡	〃	
21	小野古城城跡	〃		58	前里城跡	〃	消滅
22	中内土居城跡	〃		59	三谷城跡	〃	〃
23	中島土居城跡	〃	消滅	60	秦泉寺別城跡	〃	
24	吉田土居城跡	〃		61	大高坂城跡(高知城跡)	〃	国史跡
25	小篭土居城跡	〃	消滅	62	国沢城跡	〃	消滅
26	廣井土居城跡	〃	〃	63	潮江城跡	〃	
27	上野田土居城跡	〃		64	横浜城跡	〃	
28	包末土居城跡	〃		65	長浜城跡	〃	
29	包地土居城跡	〃	消滅	66	浦戸城跡	〃	消滅
30	岩村土居城跡	〃		67	種崎城跡	〃	〃
31	立田土居城跡	〃	消滅	68	土佐国分寺跡	奈良・平安	国史跡
32	徳弘土居城跡	〃	〃	69	土佐国府跡	奈良・平安	県史跡
33	野田土居城跡	〃	〃	70	比江廃寺跡	白鳳・奈良	国史跡
34	田村城跡	〃		71	東崎遺跡	弥生～中世	
35	千屋城跡	〃		72	田村遺跡群	縄文～近世	
36	八木土居城跡	〃	消滅	73	舟岩古墳群	古墳	
37	片山土居城跡	〃	〃	74	小蓮古墳	〃	県史跡

Ⅲ　調査の概要

1　岡豊城跡の概要

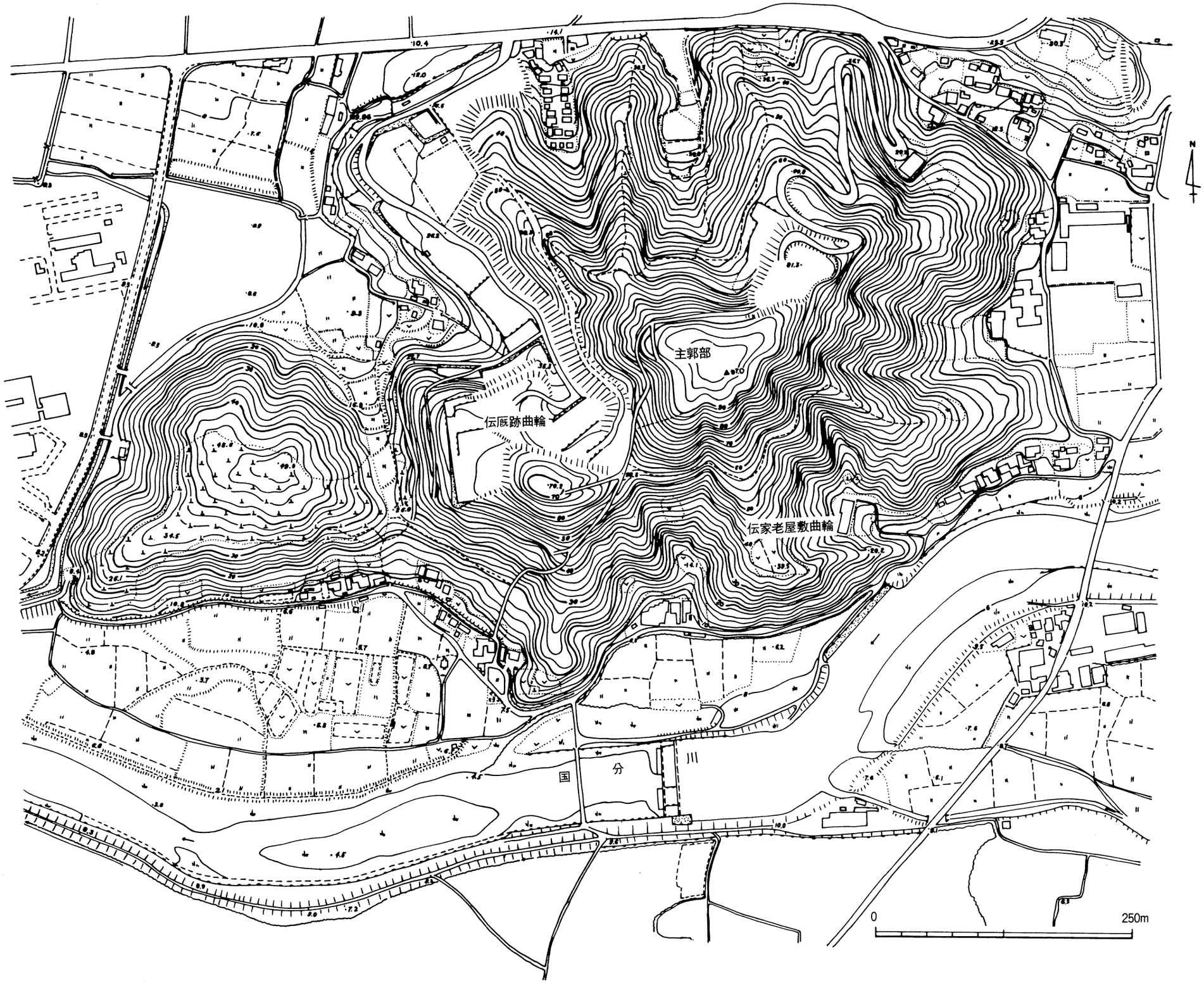
岡豊城跡は、先に述べたように標高97ｍを測る岡豊山に築城されている。築城された時期については、文献等もなく不明であるが、永正５～６（1508～1509）年に落城しており、歴史上に現われている。岡豊山はやや東西に長い孤立丘陵であるが、城跡はその山頂部を主郭部として、伝庶跡曲輪と伝家老屋敷曲輪の２ヶ所の副郭部からなる連立式の構造をもった山城である。主郭部からは、北東、北西、南西の３方向に尾根が延びており、北東部の尾根は低い鞍部（現国道部分）を経て北方の山麓部へと続いている。北西部の尾根は緩やかに下がり終わっているが、南西部の尾根はやはり鞍部を経て、副郭部の伝庶跡曲輪へと延びている。全体的にみると南斜面及び東斜面は急峻な斜面であり、土塁、堅堀等の防御施設としての遺構は、西斜面と北斜面を中心として残されている。

主郭部は、詰、二ノ段、三ノ段、四ノ段と呼ばれる曲輪からなるが、二ノ段は詰の東に位置し、三ノ段及び四ノ段は詰の南西面から西面を囲むように構築されており、半円形状を呈している。また、詰の北面には狭長な曲輪が存在しており、さらに北東の尾根上には２段の連なる曲輪と堅堀が存在していたようだが、公園化の時点で道路及び駐車場の造成により削られており不明である。四ノ段の外面、下方には西面から北西部の尾根斜面にかけて横堀と土塁が存在し、尾根の小鞍部には２条の堀切を、そして南面から北西面には連続する堅堀群をみることができる。南東部の尾根の鞍部にも、一部遊園路により埋められてはいるが２条の堀切が残されている。伝庶跡曲輪では、西部にやはり２条の堀切と南斜面には方射状に延びた連続する堅堀群をみることができる。

詰は南北40ｍ、東西35ｍの三角形を呈しており、東へと細くなっている。調査前の状況では西南部に高さ50㎝前後を測る土塁が存在していたが、他に明確な遺構は認められず、東部がやや高い平担面をなしていた。

詰と二ノ段の間には１条の堀切が存在するが、詰の東端部、堀切に面して小郭が付属しており、これを便宜上、詰下段と呼称した。詰下段は７×12ｍの方形を呈しており、詰との比高差は約３ｍを測る。堀切側には高さ70～80㎝、幅約１ｍの土塁が11ｍにわたり残されている。堀切底部からの比高差は約４ｍである。

二ノ段は南北20ｍ、東西45ｍの長三角形を呈し、現況の遺構としては南辺の西半部に高さ40～50㎝、幅70～80㎝の土塁が存在するのみである。高低差は東が40㎝ほど低く、緩やかな傾斜面となっており、標高は92ｍ前後と詰めより５ｍほど低い。堀切は、上部で幅５ｍ前後、底部では幅１ｍを測り、二ノ段からの深さは約１ｍである。北端部は現況の通路となり終わっており、南部は自然地形に添って延びるが、標高88ｍラインで堀切を塞ぐような若干の土塁状の隆起がみられる。

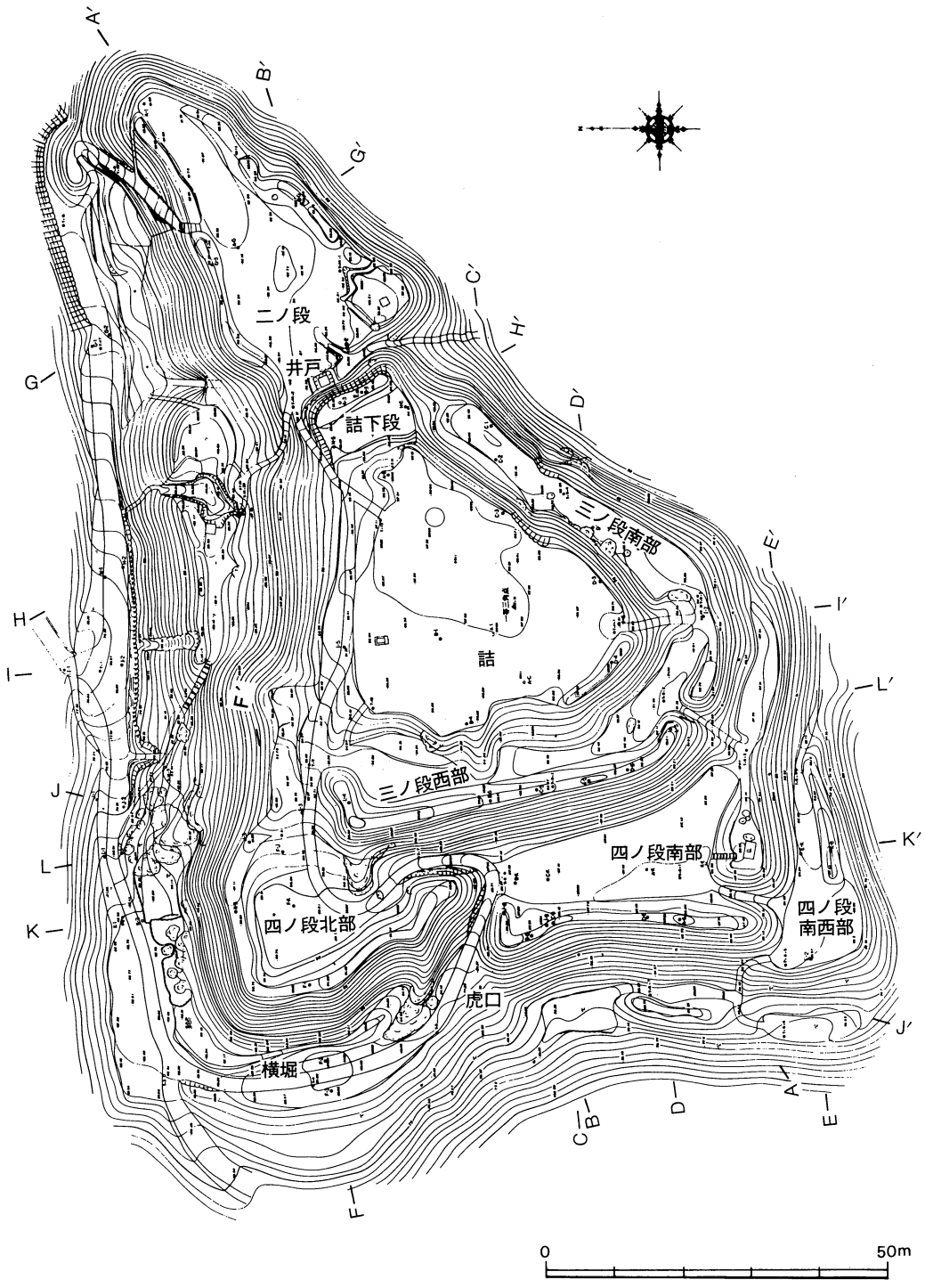


第3図　岡豊城跡地形図

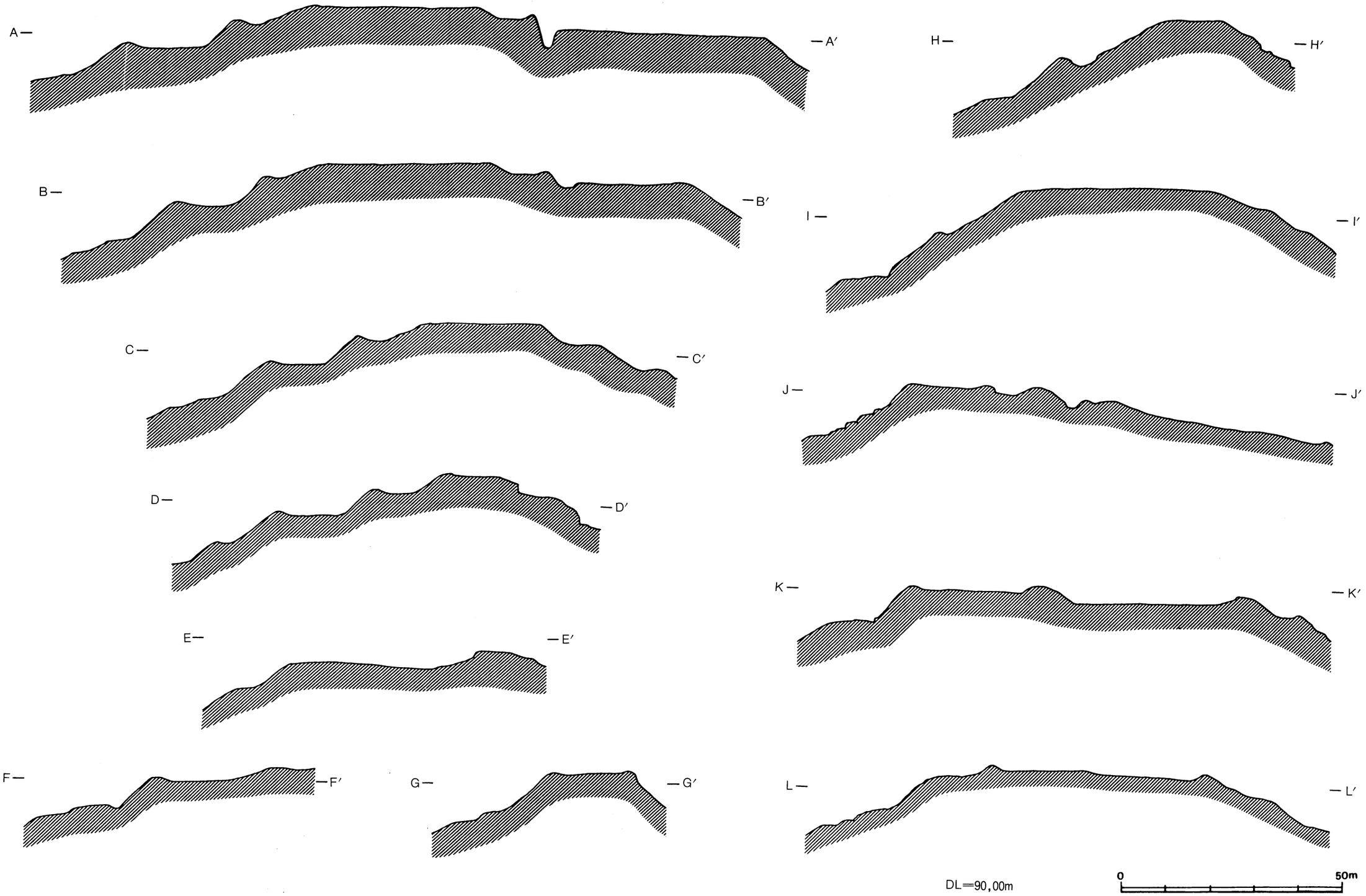
三ノ段は詰の南面から西面にかけて廻る狭長な曲輪であり、南部は幅５ｍ前後、長さ45ｍ、西部は幅４～６ｍ、長さ50ｍを測る。西部の中央部北よりには詰より突出した土塁状の隆起がみられ、南北に二分している。北半部は幅がやや広く10ｍ前後である。標高は西部北半が93.8ｍと高く、南半及び南部は92～92.5ｍと低く、ほぼ平担である。詰との比高差は３～５ｍであり、その斜面の傾斜は約70°ときわめて急斜面をなしている。また、南西のコーナー部には詰への通路が存在しており、西部と南部を分離している。北西部にも詰への通路があるが、広く緩やかなところから公園の遊園路として造られたものとみられる。南部には土塁はなく、自然地形の斜面となっているが、西部には明瞭な土塁が残されており、高さ約１ｍ、上面幅１～1.5ｍを測る。北端部は10ｍほど直角に折れ曲がり、三ノ段への北方からの入口を形成している。また、南端部にも幅1.5ｍの通路が存在しており、土塁が切られている。

四ノ段は、三ノ段の西部を囲むように築造された曲輪であり、小さく南部にも平担面が続いている。西部の中央部には虎口が存在しており、四ノ段北部と南部に二分される。北部は方形に張り出した曲輪であり、15×12ｍを測る。標高は89.8ｍ前後であり、三ノ段との比高差は約４ｍとなる。北辺から西辺にかけては、高さ1.5ｍ～２ｍ、上面幅約1.5ｍの土塁が存在しており、東部は緩やかに三ノ段北端部へと続いている。北部から西部の土塁斜面裾部には、幅２～３ｍ、深さ１ｍ前後の横堀が虎口まで存在しており、その外側には幅６～７ｍの平担面がみられる。虎口は西方から入り、北へ鋭角に折れ曲がる。南北の土塁端部を屈曲することにより造り出されており、幅２ｍ前後を測る。正面には三ノ段斜面から突出した土塁が存在し、再度屈曲し北部へと続き、三段構えとなっている。四ノ段南部は南北32ｍ、東西16ｍを測る三角形を呈し、標高は87ｍと北部に比して2.8ｍほど低い。土塁は高さ約１ｍ、上面幅約１ｍであり、南西コーナー部はさらに下部の小曲輪（四ノ段南西部）への通路により切断されている。この曲輪は一辺12ｍを測る方形を呈しており、四ノ段南部との比高差は約３ｍである。周囲には土塁はみられないが、東山麓から登ってくる通路の南辺には長さ20ｍ、幅２～３ｍ、高さ50㎝前後の土塁が残されている。南西部曲輪の下方には、北部に長さ14ｍ、幅２ｍ、高さ50㎝の土塁がみられ、南部には長さ14ｍ、幅４ｍの平担面が付属しており、比高差は土塁で約３ｍ、平担面で約５ｍを測る。詰及び二ノ段の北斜面約10ｍ下方には、かなり崩れているが全長38ｍ、幅２～３ｍの帯状の曲輪が存在しており、幅１ｍ前後、高さ50㎝前後の土塁が残されている。

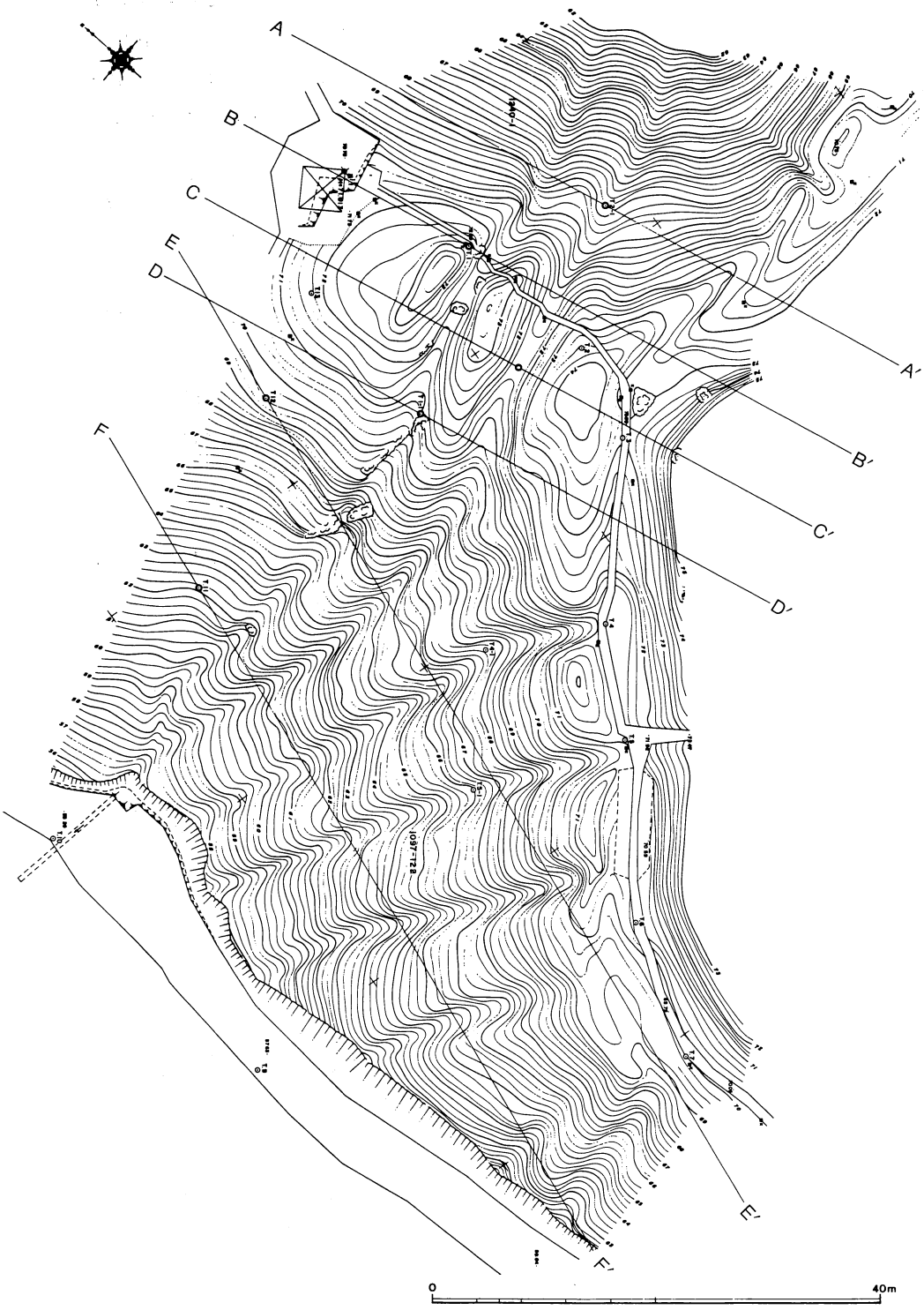
以上が詰を中心とする主郭部の状況であるが、さらに北西斜面の下方標高70ｍ前後の位置には、全長90ｍの土塁と横堀がみられ、尾根上には幅２ｍ、深さ３ｍ前後の二重の堀切が存在する。また、西斜面を中心として幅２ｍ前後、深さ１ｍの竪堀16本が連続的に存在するが、遊園路等によりかなり崩されている。伝廐跡曲輪に至る鞍部には幅80㎝、深さ60㎝、長さ20～30ｍの二重の堀切が存在し、伝廐跡曲輪の西にも幅２ｍ、深さ３ｍ前後の二重の堀切がみられ、内１本は竪堀となって南斜面を約80ｍほど延びている。南斜面には、他に４本の幅２～３ｍ、深さ１ｍ前後の竪堀が放射状に約50ｍ延びている。



第４図　主郭部地形平面図（Ｓ＝1/1,000）



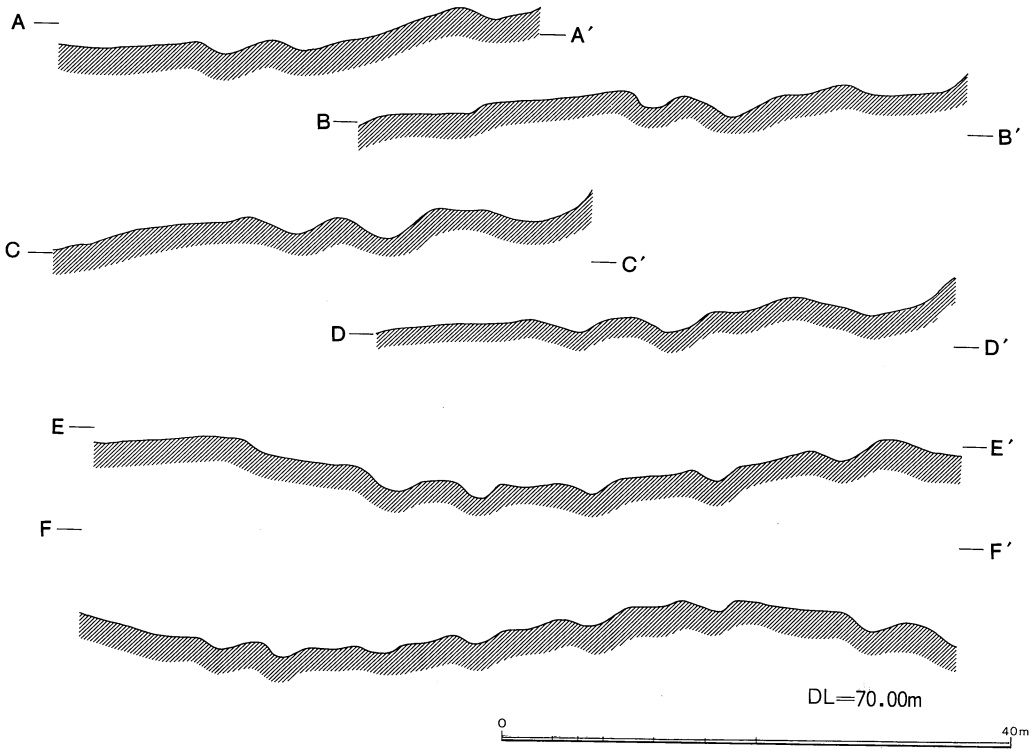
第５図　主郭部地形断面図



第 6 図　西斜面竪堀平面図

長宗我部氏は秦氏の系譜と言われており、長宗我部氏初代の秦能俊が平安末から鎌倉初頭に信濃より土佐へ移ったのが起源とされている。入国後、長岡郡宗部郷に定住したようであり、以後も宗部郷解体の後にその大半をもって成立した廿枝郷、江村郷を根拠地として中世を通じて活動している。長宗我部氏の名称自体は、香美郡下の宗部郷に地頭として建久4（1193）年に入部した中原氏が香宗我部氏として存在したところから、これと区別するため長岡郡の宗我部氏として長宗我部を名乗ったと言われている。

南北朝から室町時代にかけての長宗我部氏の活動を知る文献等の資料は少なく、その動向は明確ではないが、守護代として土佐に入国した細川頼益が守護領国制を進める中で、その被官となり、それ以後、夢窓疎石の創建になる吸江庵の寺奉行になるなど、勢力を拡大していったとみられる。しかし、応仁、文明の乱を契機に細川氏の支配力が後退し、長宗我部氏の勢力も衰退し、土佐も戦国時代に突入する。19代兼序の代には、細川氏の退去に伴い周辺の本山、山田、吉良、大平氏等の有力国人の攻撃を受け落城する。しかし、その子国親は幡多の一条氏のもとに逃れ、その後一条氏の救済もあり、永正13（1516）年前後には岡豊城は再興される。以後、次代元親によって土佐の統一が天正3（1575）年に、四国制覇が天正13（1585）年になるが、同年豊臣秀吉による四国征討が行われ、土佐一国を安堵される。天正16（1588）年には、近世城郭と城下町の形成のために大高坂城（現高知城跡）に移転しており、岡豊城はその役目を終えている。なお、天正19（1591）年には再度大高坂城から浦戸城へと移転している。

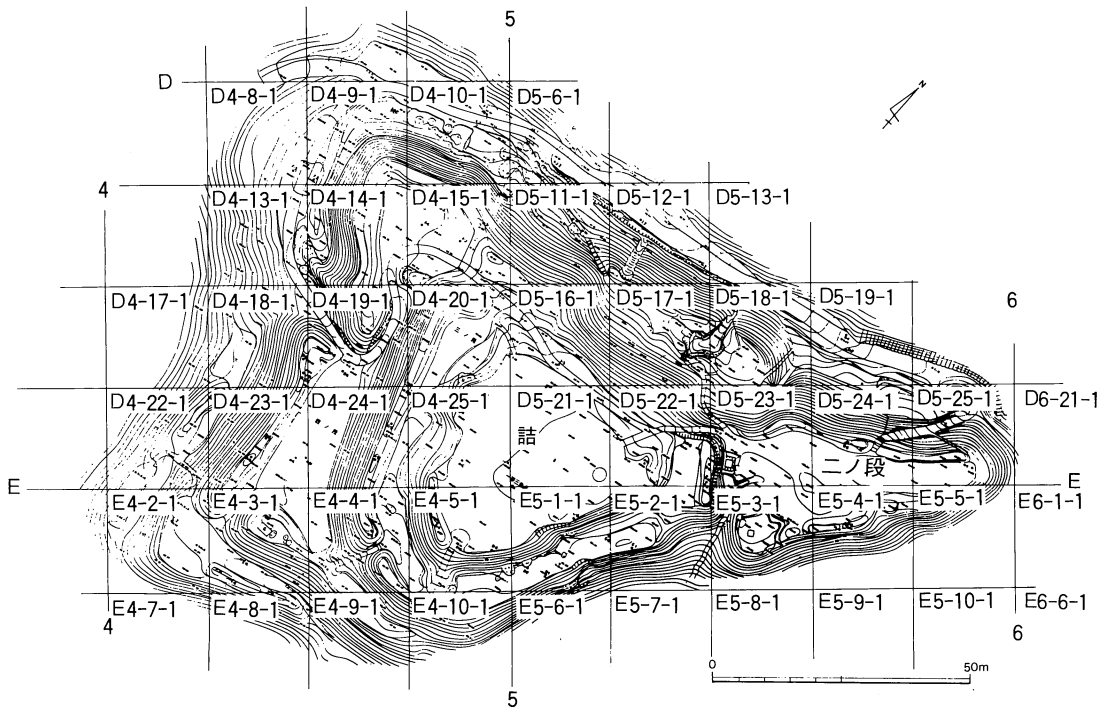


第7図　西斜面竪堀断面図

2　第１～５次調査

岡豊城跡の発掘調査にあたっては、遺構の遺存状態と城跡の構造解明の手掛りとなる遺構検出を目的として、グリッドを基準とするトレンチによる調査を行うこととし、必要に応じて拡張していった。グリッドは、現地の伐採後主郭部の地形に合わせ設定した。山頂部詰の中央部に存在する三角点を原点とし、詰から二ノ段の東先端部を通るラインを基準線としてグリッドを展開した。この基準線は真北から東へ50°振っている。グリッドは、100ｍ、20ｍ、４ｍの大、中、小の３種類により、100ｍグリッドは南北をＡ…とアルファベットにより、東西を１…とアラビア数字により、北西コーナーを基準として表示した。20ｍと４ｍグリッドは、各々北西から南東へ１～25の番号により表示し、三角点をＥ５－１－１として、各々グリッドの呼称を決定した。

発掘調査は、第１次調査において詰西部及び二ノ段、第２次調査では詰西部と詰下段、第３次調査では詰東部、三ノ段南部及び井戸・堀切、第４次調査では二ノ段、三ノ段西部及び四ノ段北部、第５次調査では三ノ段西部を対象として実施した。第１・２・４次調査においては、詰、詰下段、二ノ段にグリッドを基準として調査区を設定したが、第３・４・５次調査では、井戸・堀切、三ノ段、四ノ段の地形及び土塁等の遺構に合わせ任意のトレンチを設定し調査を行った。なお、現地の測量はトラバースにより第Ⅳ系の座標上に合致するように実施した。



第８図　グリッド設定図

第１次調査

第１次調査は初年度でもあり、遺構の残存状態を探るために詰と二ノ段に調査区を決定した。詰の地形は北東に延びる尾根上に広がる三角形を呈しており、西半部が広いことから遺構の存在する可能性が高く、三角点の南西部及び北部に４ｍ幅のトレンチを設定し、調査を開始した。

北部のトレンチ（Ｂ区）では、表土直下に蛇紋岩の岩盤が表われており、岩盤上には礎石ではないかとみられる扁平礫が検出されたので西へ２ｍのトレンチで拡張したが、続く礎石は発見されず、移動しているものと考えられた。南西部のトレンチ（Ａ区）は、西端部の土塁にかけてＬ字状に設定し、調査を進めた。表土下には遺物包含層である茶褐色粘質土がみられ、多量の土師質土器を出土した。さらに、トレンチの中央部では石敷、土塁上に切石が検出され、良好な遺構の存在が確実となったので、石敷を追求するために調査区を拡張した。その結果、真北に対しほぼ東西方向に延びる石敷遺構の全貌を確認し、その西端部には切石がみられ、土塁上の切石と同じ高さでもあり関連性をもつものと考えられた。石敷遺構の北西部には土師質土器と多量の渡来銭を埋納したピット（Ｐ１）が検出されており注目された。出土遺物としては多量の土師質土器とともに輸入陶磁器・瓦等がみられ、中でも石敷遺構西端部の切石脇からは天正３年在銘の瓦が出土した。

二ノ段は詰と堀切で隔された尾根上に延びる細長い三角形を呈しており、長軸方向の基準ラインにそって２×20ｍのトレンチ（Ｃ区）を設定した。調査の結果、遺構は検出されなかったが、堆積土は厚く、地表面から地山まで1.0～1.4ｍを測った。さらに、層序中には、焼土と多量の炭化物及び土師質土器、瓦片等を含む土層が認められ、19代兼序の時期における落城に関連するのではないかと推測された。また、詰の東には、３ｍほど低く堀切に面した平担部（詰下段）が存在しており、その南端部にトレンチを設定した結果、礎石を確認したが、調査期間等もあり、次年度以降への調査課題として残された。なお、Ａ区の南西部において明確な遺構としては把握できなかったが、シミ状の落ち込みが存在しており、弥生中期の土器片を出土するところから、岡豊山には岡豊城跡に先行する弥生時代中期の高地性集落遺跡の存在が考えられる。

調査期間は昭和60年11月14日から昭和61年１月９日であり、調査面積は270㎡である。

第２次調査

第２次調査は、第１次調査で検出された石敷遺構の北に位置する建物跡の全貌を明らかにすべく北を拡張する調査区（Ｄ区）と土塁の残存状態を確認するために西（Ｅ区）と南（Ｆ区）を拡張する調査区を詰において設定した。また、詰下段では、礎石による建物跡を確認するために全面を調査区（Ｇ区）として調査を開始した。

詰のＤ区では、石敷遺構の北に広がる礎石群が検出され、４×５間の礎石建物跡を確認した。また、Ｐ２・３では土師質土器の杯が数枚集中して出土した。Ｅ区では、土塁の残存状態を確

第9図　調査区設定図(S＝1/1,000)

認するとともに根石とみられる石列を検出した。F区においても、やはり土塁の残存状態を確認した。F区のセクションからみると、岩盤までは80cmと深く、その間に粘質土による版築状の堆積土が存在しており、岩盤の低くなる南半部には盛土を行っているようである。出土遺物は土師質土器が大半を占めており、包含層の厚い南半部から出土している。

詰下段では、全面に広がる礎石群を検出しており、2×5間の礎石建物跡を確認した。建物の北に接しては、周囲に礎石をもつ土壙が検出された。また、堀切側の土塁には根石とみられる石列が確認され、さらに多数の礫が崩れた状態で礎石に堆積していた。詰側の斜面は岩盤を垂直に削り、壁を造り出しており、下部には段状の遺構が検出された。詰下段と三ノ段の間には公園化による遊歩道が存在していたが、この部分についてもトレンチによって確認したところ、崩れてはいるが階段状の地形がみられ、詰下段と三ノ段の間には通路の存在が考えられた。詰下段における出土遺物はやはり土師質土器が大半を占めるが、量的には詰に比べ少ない。

調査期間は昭和61年7月28日から9月6日であり、調査面積は332㎡である。

第3次調査

第3次調査では、詰の東半部及び北部、三ノ段、堀切・井戸を調査対象地として調査区を設定した。詰の東半部は二ノ段からの遊歩道や貯水槽が設置されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは思われなかったが、詰下段及び二ノ段との関連性をつかむために、3m幅のトレンチ（H区）を設定し、東端部を拡張した。H区の大部分では表土直下に岩盤がみられ、礎石と考えられる扁平礫、柱穴を検出したが建物としてはまとまらなかった。西端部では岩盤を掘り込んだ土壙を確認し、埋土中からは多量の土師質土器が出土した。東端部では岩盤を掘り込んだ溝が検出され、さらに詰下段に至る端部には土塁状に集石がみられた。この集石の裾部からは金銅仏及び鉄釘がまとまりをもって出土した。詰北部の調査区（I区）では、やはり表土直下に岩盤がみられ、ここでも岩盤を掘り込む小規模な溝を検出した。なお、最終段階において詰の南端にそって土塁に関連する柵列等の遺構確認のために幅1m、長さ15mのトレンチ（J区）を設定したが、遺構は確認できなかった。

三ノ段は詰の南から西を囲む標高92mを測る曲輪であり、今回は南部を調査対象地として、2ヶ所のトレンチ（K区・L区）を設定した。両トレンチともに表土下において敷石、石列を検出したが、これは公園化による新しい時期のものであった。東部のトレンチK区をさらに掘り下げた結果、堆積は厚く地表下1～1.2mで地山がみられた。遺構としては地山面に2個の柱穴を検出したのみであるが、堆積土の中層下には多量の大礫が含まれていた。出土遺物はやはり土師質土器が大半を占めるが、地山面の直上において青磁の碗・盤等が出土している。

堀切・井戸については、堀切を南斜面へ追求する調査区（M区）及び井戸の北の現在通路として使用されている部分にトレンチを設定した。堀切は岩盤を深く掘り込んでおり、南斜面では堀切に対し直角に岩盤を削っているが、埋土、出土遺物等からみると新しい時期と考えられ

た。また、井戸は堀切の中央部に岩盤を掘り込んで造られているが、公園化によってすでに掘られていた。北の通路部分については、岩盤を掘り込んでおり、当初は北へも掘り切っていたものではないかと考えられた。出土遺物は近・現代のものと混在していたが、堀切の南下部からは第１次調査に続き２点目の刻銘瓦が出土している。

調査期間は昭和62年５月28日から７月25日であり、調査面積は230㎡である。

第４次調査

第４次調査は、第１次調査でトレンチを設定した二ノ段と、これまで手をつけていなかった三ノ段西部及び四ノ段を調査対象地として調査区を設定した。

二ノ段は第１次調査の結果から、東半部に厚く堆積土が存在することが判明していたが、土塁等の遺構の状態を確認するためにＣ区の南にＴ字形のグリッドに合わせたトレンチ（Ｎ区）を設定した。調査の結果、建物跡は検出されなかったが、岩盤を掘り込んだピットと土塁を確認することができた。調査区の西部では表土下20㎝ほどで岩盤が出ており、中央部から東部へと急激に落ち込んでいる。中央部では、地表下1.5ｍで岩盤を確認したが、東端部では２ｍ掘り下げたが岩盤はみられず、すべて盛土であることが判明した。南辺部の土塁確認のためのトレンチでは土塁の基部を検出し、二ノ段に現存する土塁は当時のものであることが確認された。北部においても、東部と同じく岩盤が急激に落ち込んでおり、北端部では地表下２ｍまで盛土により築造されている。この盛土中には多量の礫が存在しており、盛土の強度を増すために入れられたものと考えられる。また、南部には岩盤を掘り込んだ幅60㎝、深さ1.5㎝の溝が検出されたが、太平洋戦争中の高射砲陣地の塹壕跡であった。

二ノ段の層序中で、中央部から東部にかけて表土下にみられる黒褐色粘質土には炭化物と焼土がやはり認められ、多量の瓦類及び土師質土器が出土しており、二ノ段には建物跡等の遺構が確認されないところから、詰からの盛土によって整地されたものとみられる。

三ノ段西部の調査区は北端より約５ｍ南に設定した６×12ｍのＯ区であり、土塁上から平垣部に位置している。調査前の状態ではほとんど礫もなく、土塁のみの確認で終了するのではないかと考えられたが、調査の結果、土塁内側の石垣と排水溝、さらには大形の礎石による礎石建物跡の一部が確認された。土塁の石垣はきわめて良好な状態で残されており、30～50㎝の蛇紋岩の割石を中心に５～６段に積まれており、高さは約１ｍを測る。石垣の内側基部には幅50㎝の溝が存在しており、底部は岩盤となっている。土塁内部の平垣面の礎石建物跡は、50～60㎝の大形の扁平な割石を使用しており、半間の間隔をもっている。中央部には２個の礎石が並び接しており、さらに内部にも大形の礫が並んでいる。礎石ラインの外側50㎝の位置には、建物の基礎となる盛土の端部に20～30㎝の割石が列石として並べられており、溝の肩を形成している。溝底部の岩盤上にはやはり岩盤を掘り込んだピットがみられ、トレンチの北端部のサブトレにおいても地表下約1.2ｍに岩盤が存在し、ピットが検出されている。出土遺物はあまり多

くなかったが、土師質土器、白磁、染付等がみられ、また、石臼の下臼完形品が２点まとまって出土している。

四ノ段では、北部の北西コーナー部近くに２×８ｍのトレンチ（Ｐ区）を設定し、遺構の遺存状態の確認を行った。この結果、地表下30㎝の面に礎石とみられる扁平な割石を確認した。西端部のサブトレでは、地表下60㎝で岩盤の一部が検出されており、やはり四ノ段北部も盛土によって築造されている。出土遺物は土師質土器が中心であるがかなり多く、盛土中に含まれている。

調査期間は昭和63年６月20日から８月10日であり、調査面積は233㎡である。

第５次調査

第５次調査は、第４次調査で確認された三ノ段西部の土塁石垣、礎石建物跡の全体を検出するために、土塁の北端部に４×10ｍの調査区（Ｑ区）と前年度のＯ区の南に４×37ｍの土塁にそった調査区（Ｒ区）、さらに通路を隔てた南の土塁部分に４×５ｍの調査区（Ｓ区）の３ヶ所の調査区を設定した。

Ｑ区では、Ｏ区に続く土塁石垣と溝、礎石建物跡を検出した。石垣は土塁内側に良く残されていたが、端部ではそのまま終っており、土塁端面は盛土のままの状態であった。北辺の礎石は４間で終っており、やはり半間間隔である。北部を拡張したところ、土塁端部に並び礎石とみられる割石が検出されており、三ノ段北の入口にも建物が存在していた可能性が考えられる。

Ｏ区の南のＲ区でも土塁石垣は続いていたが、礎石建物跡は三ノ段中央部の土塁状の突出部で終っていた。礎石は半間間隔であり、南辺は３間、東辺は２間半が確認された。土塁状の突出部を拡張したところ、南北両側面に石積みが検出され、かなり崩れてはいるが、三ノ段から詰への階段による通路が存在していたことが判明した。この通路と礎石建物跡の間には溝がやはり検出され、土塁基部の溝に続くものであった。階段による通路から南では、土塁石垣はほとんど崩壊しており、若干の割石が土塁の基部に残されているのみであるが、南端部では２～３段の石積みが存在していた。また、通路から南部分の平垣部は地表直下に岩盤がみられる。

南の土塁部分Ｓ区では、Ｒ区の南部と同様に土塁石垣は崩壊しており、やはり基部に少量の割石が残るのみであった。

出土遺物はＱ区とＲ区の北半に多く、土師質土器、青磁、白磁、染付、備前等の他に鉄鍋、羽口、釘、さらに小柄も出土している。

調査期間は平成元年６月19日から８月18日であり、調査面積は276㎡である。

Ⅳ 遺 構

1 詰

第１・２次調査では、Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区において礎石建物であるＳＢ１・２及び石敷遺構のＳＸ１が検出されており、他に土塁跡と柱穴も確認された。

ＳＢ１は詰の中央部西南寄りに位置しており、ＳＸ１の東半部に接続している。規模は、東西４間、南北５間と南北に長く、7.2×10.4ｍを測る。礎石間の距離は1.8ｍ前後を測り、よく揃っていることから原位置を保っていると考えられる。礎石の多くは岩盤である蛇紋岩の割石を使用しており、30～40㎝前後の大きさを測る。南辺の礎石はＳＸ１の石敷中に存在しており、他の礎石に比べると大形である。ＳＢ１の内部にも礎石が存在しているが欠落している部分もあり、建物の構成を推定するためには資料不足である。また、ＳＢ１の占める面積は約75㎡を測り、極めて規模の大きい建物と言える。

ＳＸ１の西端部には１間四方の礎石建物であるＳＢ２が検出された。ＳＢ２の礎石間の距離は東西が約2.0ｍ、南北は約1.4ｍとやや長い建物であり、北西の礎石は欠落している。また、ＳＢ１との間にも礎石とみられる割石が存在しており、さらにＳＸ１の北に沿うように約２ｍの幅を測る浅い掘り込みが検出されていることから、ＳＸ１に沿ってＳＢ１に接続する何らかの施設の存在が考えられる。

石敷遺構であるＳＸ１は、詰の西部に位置する。規模は、全長16ｍ、幅1.0～1.5ｍを測り、方向は真北に対し東へ81°振っており、ほぼ東西方向を示す。石敷は蛇紋岩を主体とする30～60㎝の割石により構成されるが、若干の砂岩等の礫も混在している。また、東端部が最も広く、西へと次第に細くなっている。石敷上面の高さは標高96.20～96.30ｍを測り、全体的にみればほぼ水平である。また、石敷の基面は、北側が岩盤であり96.30～96.40ｍを測るのに対し、南側では岩盤はみられず、高さも96.10ｍ前後と一段と低い。

ＳＸ１の西端部には石敷に接続し、西へ延びる切石が検出された。切石は20×40㎝から40×80㎝、厚さ10㎝を測る大形の方形であり、西端部に５個を２列に配し、東へやや小形の切石を１列に並べている。切石のレベルはＳＸ１に比べ30㎝ほど高いが、ＳＸ１と一体となり、遺構を形成するものである。また、1.2ｍの間隔をおいて土塁上にも同様の切石12個が同じ高さをもち検出されており、関連性をみることができる。さらに、ＳＢ２の礎石が切石に接する位置に確認され、やはり高さも同レベルであることから、ＳＢ２に付属する施設の存在を考えることができる。

土塁跡は、Ａ区及びＥ・Ｆ区において確認された。西の土塁跡は調査前の現況においても観察することができたが、調査の結果、幅1.0～1.5ｍ、高さ40㎝を測り、上部はかなり崩れているのではないかと思われるが、先に述べた切石とそれに続く土塁内側の根石とみられる20～30㎝の割石による石列を検出した。また、南の土塁跡は残存状態が悪く、かなり崩れているが、

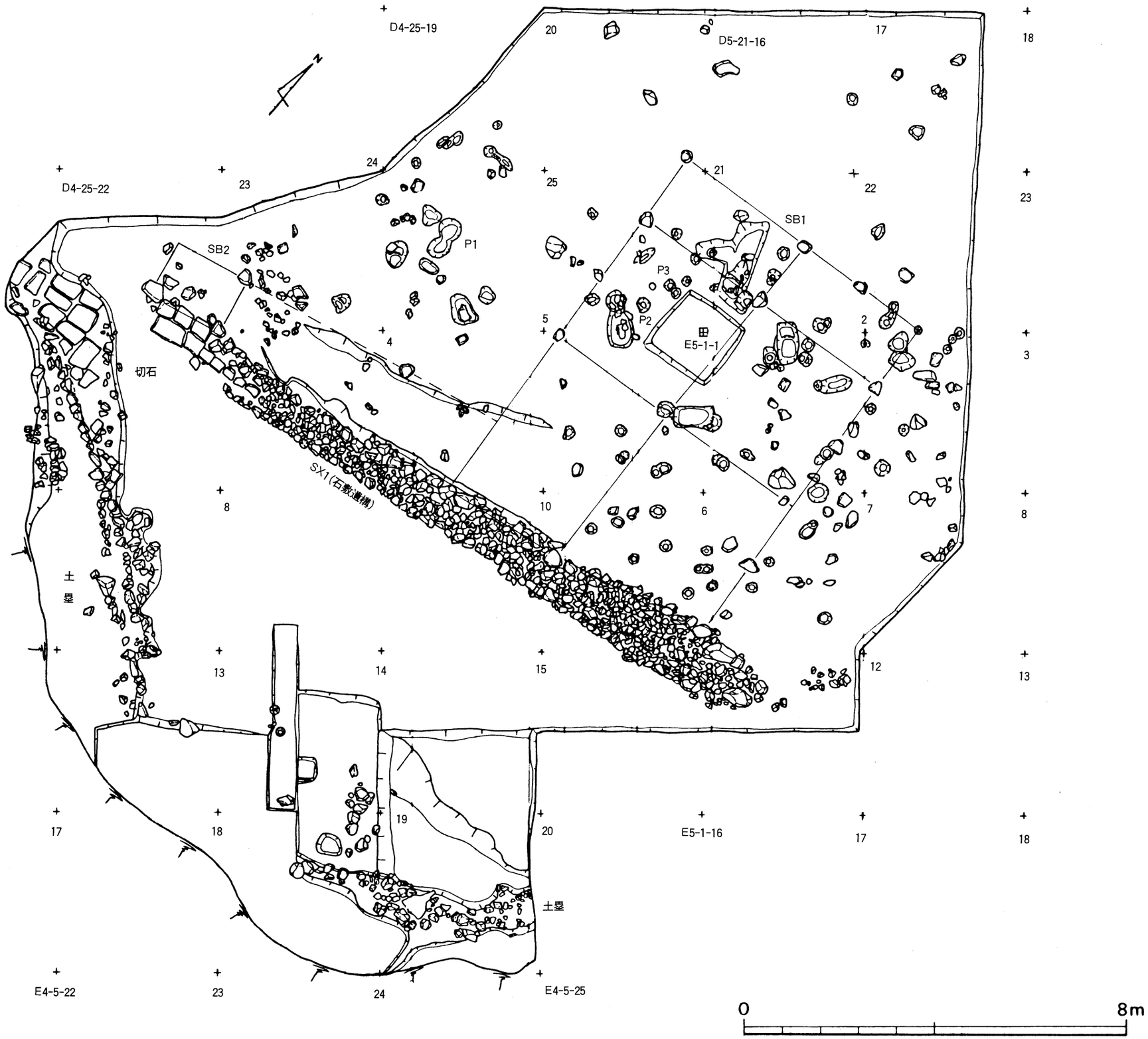
やはりやや小形の割石が集中して検出された。

柱穴の中では、ＳＢ１の西において検出されたＰ１から土師質土器の杯と計91枚の渡来銭が出土した。Ｐ１は直径60㎝、深さ14.2㎝を測るピットであるが、埋土上面に10枚前後の渡来銭を、それぞれの中に収めた12個の杯が並べられた状態で出土しており、埋納されたものであろう。埋土は暗茶褐色粘土質であり、またＰ１の南には同規模の柱穴が接して検出されている。さらに、ＳＢ１の範囲内に位置するＰ２・３からも数枚の土師質土器の杯が重ねられた状態で出土しており、渡来銭は入っていないが、Ｐ１と同じく埋納されたものと考えられる。

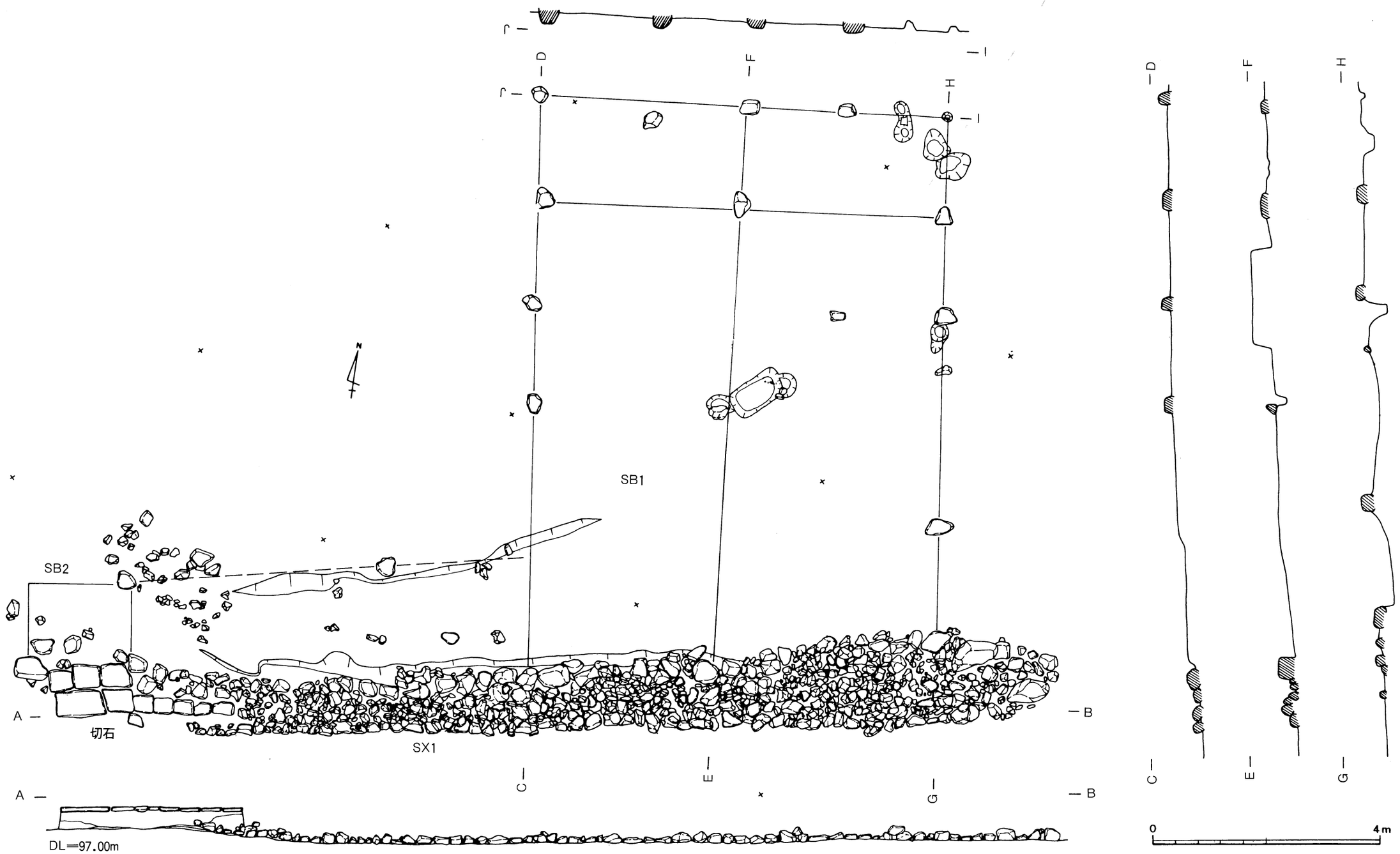
調査区全体の岩盤の検出状態をみると、ＳＸ１の北においては表土下に検出されるが、南西部では低く落ち込んでおり、Ｆ区のセクションからは、岩盤面までの版築状を呈する堅固な盛土が観察され、詰の拡張をみることができる。ＳＸ１の位置、方向は岩盤が落ち込む端部に位置しており、その構築にあたっては、このような地形も考慮しているのではないかと思われる。また、南西部においては包含層が厚く堆積しており、下部には部分的に焼土と炭化物が混在している。ＳＸ１は、この焼土、炭化物の上に築かれている。

詰の北部のＢ・Ⅰ区では、若干の礎石ではないかと思われる割石が検出されたが、建物としてはまとまらず、移動したものであろう。他の遺構としては、Ⅰ区の南半部の岩盤に掘り込まれた小規模な溝、ＳＤ１が検出された。ＳＤ１は幅10㎝、深さ10～15㎝を測り、一見岩盤の崩壊面と見えるが、一辺1.2ｍの方形を画するようにＬ字形を呈しており、人為的な溝として取らえられる。また、北部はやはり岩盤が低く、厚い堆積土が存在するが、南西部のような版築状の堆積はみられなかった。

詰東半部の調査区であるＨ区の遺構としては、土壙１基、溝２条、土塁の根石とみられる列石が検出された。ＳＫ１は岩盤を掘り込んだ土壙であり、Ｈ区の西端部にかかっている。規模は直径2.4ｍ、深さ80～90㎝を測り、平面形は不整円形である。西部へは幅80㎝で1.6ｍほど延びており、中央部にはＳＫ１を埋めるかのような巨大な礫が入っていた。埋土は暗褐色粘質土であり、多量の土師質土器杯を出土した。ＳＤ２は、Ｈ区の東端部において検出された２条の溝であり、やはり岩盤を掘り込んでいる。規模は全長4.4ｍ、幅20㎝、深さ20～30㎝を測る。方向は、南から北へと岩盤の傾斜とともに下がっており、端部では２条が合流し、岩盤が急激に落ち込み終っている。出土遺物としては、底部から手づくねの土師質土器杯が検出されており注目される。また、北東端の堆積土はＦ区のセクションにみられたような版築状の盛土であった。東端部においては、詰下段に対する上部に土塁状の地形がみられ、裾部には集石が検出された。集石は詰側に曲がっており、20～30㎝の割石が並べられていた。集石の端部下方からは、遺構に伴うものではなく攪乱を受けているが、金銅仏及び鉄釘が集中的に出土している。さらに、周辺部からは５㎝前後の円礫も出土している。以上の遺構以外には、礎石とみられる割石と岩盤を掘り込んだ柱穴が検出されており、建物としてはまとまらないが、東半部にも何らかの施設の存在を考えることができる。



第10図　詰A・D・E・F区(S＝1/100)



第11図　詰A・D・E・F区　SBI・2(S=1/80)

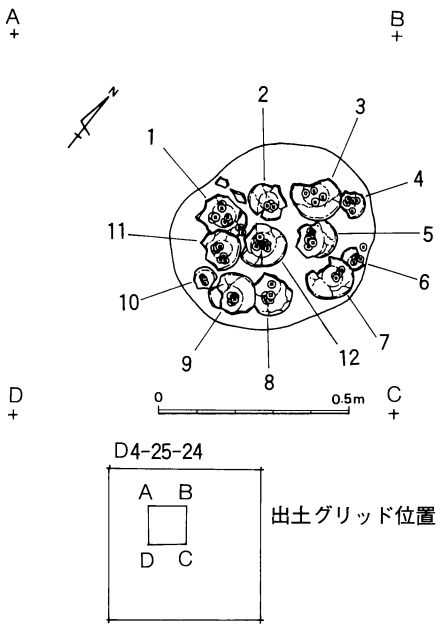
また詰の南端部では、土塁内における柵列、塀等の遺構の存在を確認するためにＪ区の調査を行ったが遺構は検出されなかった。

2　詰下段

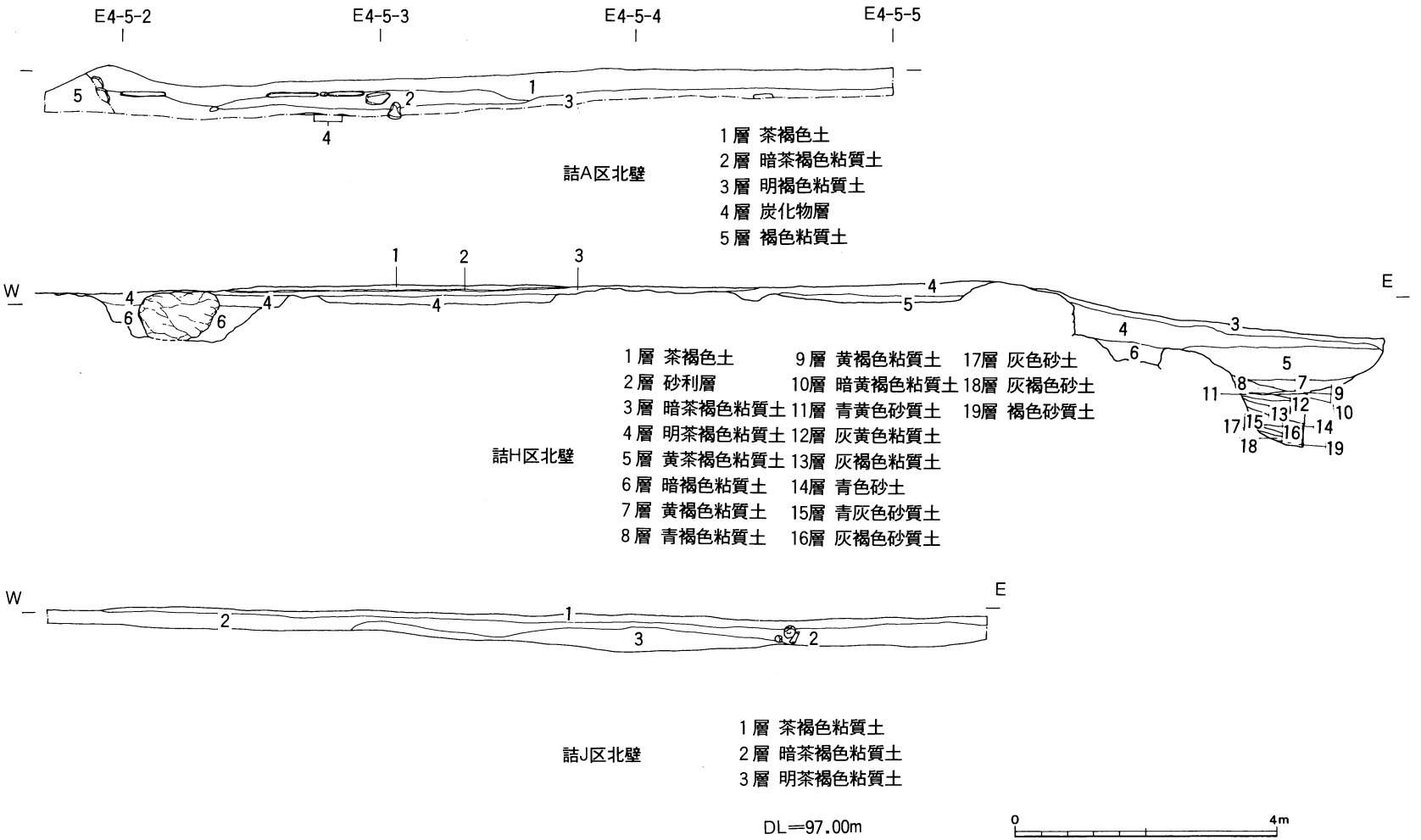
詰下段において検出された遺構は、礎石建物であるＳＢ３及びＳＫ２、それに伴う段状遺構等の地形整形と土塁跡である。

ＳＢ３は詰下段全体に広がる礎石建物であり、礎石は斜面及び堀切側の土塁にほとんど接する位置に検出された。規模は梁間２間、桁行５間の南北棟であり、棟方向はＮ－30°－Ｗを示す。梁間5.8ｍ、桁行9.2ｍを測り、礎石間の距離は、梁間2.8～3.0ｍ、桁行1.6～2.0ｍを測るが桁行はほとんど1.8ｍである。梁間は桁行に比べ礎石間が広く、また桁行には礎石間にさらに半間の礎石が存在しており、北から２間の中央部には梁間の礎石に対応する礎石が検出されている。礎石は40～60㎝の扁平な割石を使用しており、南梁間及び東桁行の半間の礎石が一部欠落するが、他は非常によく残されている。ＳＢ３の占める面積は約35㎡と、ＳＢ１に比べやや小形ではあるが、規模の大きい建物である。なお、桁行には一部礎石と思われる割石が存在するところから６間の可能性も残されている。

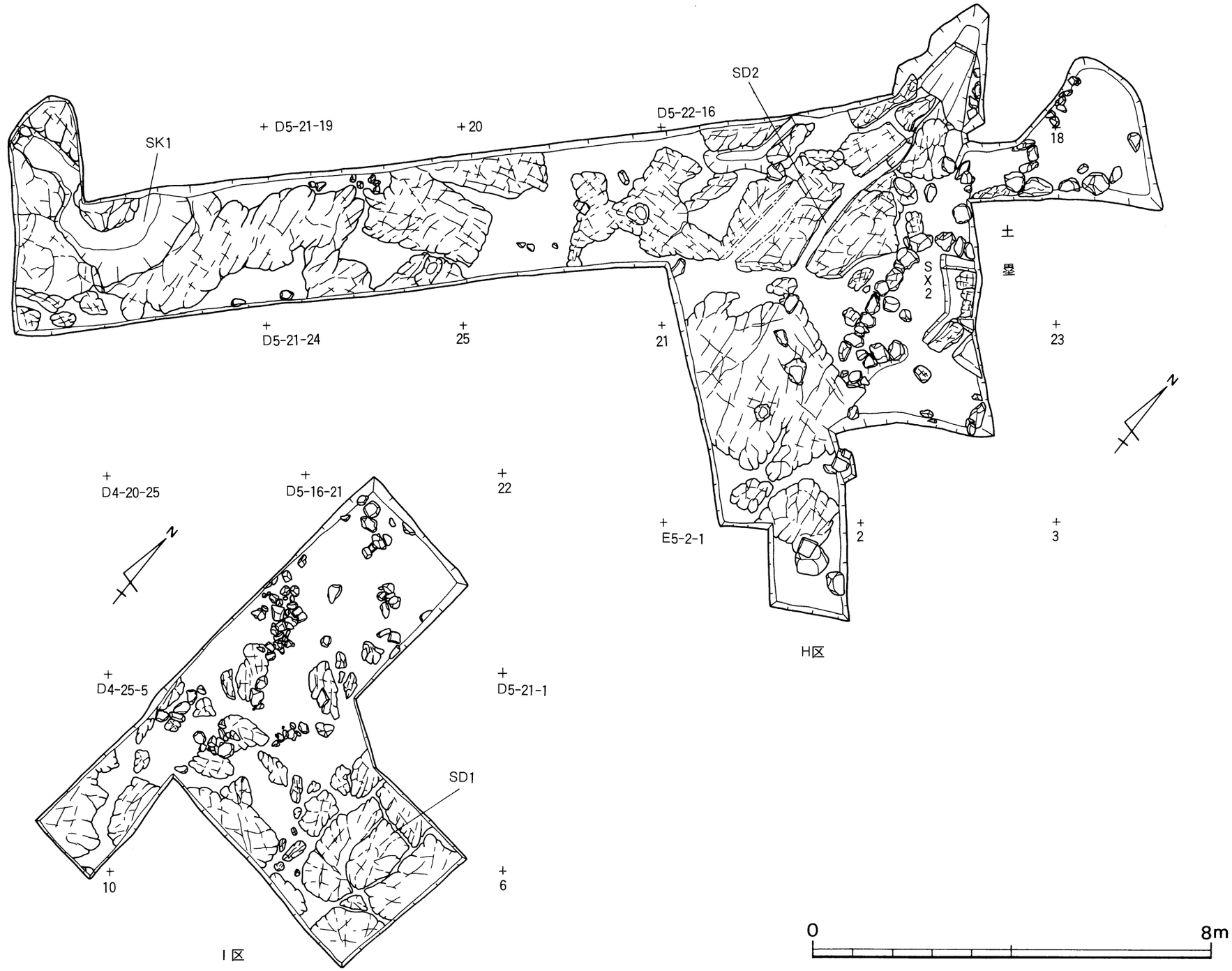
ＳＫ２は、ＳＢ３の北東に接する位置で検出され、周囲に礎石を伴っている。規模は0.9×1.1ｍの方形であり、深さは87㎝を測る。底部は平担であり、壁は急角度で立ち上り、断面図は逆台形を呈する。検出面から20㎝ほど下は岩盤を掘り込んでおり、埋土は暗茶褐色粘質土で



第12図　詰Ａ区 古銭埋納ピット（Ｐ１）



第13図 詰A・H・J区 セクション(S=1/100)



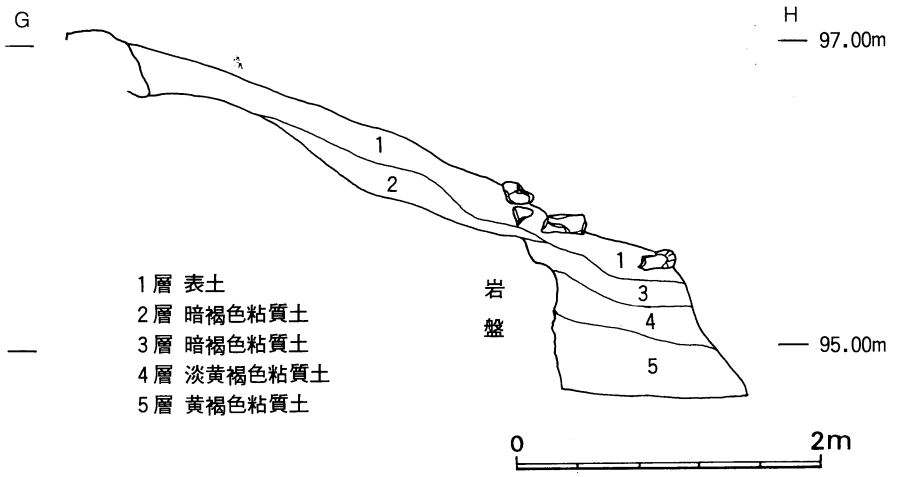
第14図　詰H・I区（S＝1/100）

ある。埋土中には焼土と炭化物が混在しており、壁も一部焼け赤化している。また、周囲にみられる礎石はＳＢ３の礎石と揃わないが梁間に接しており、土壙を伴う付属施設と考えられる。

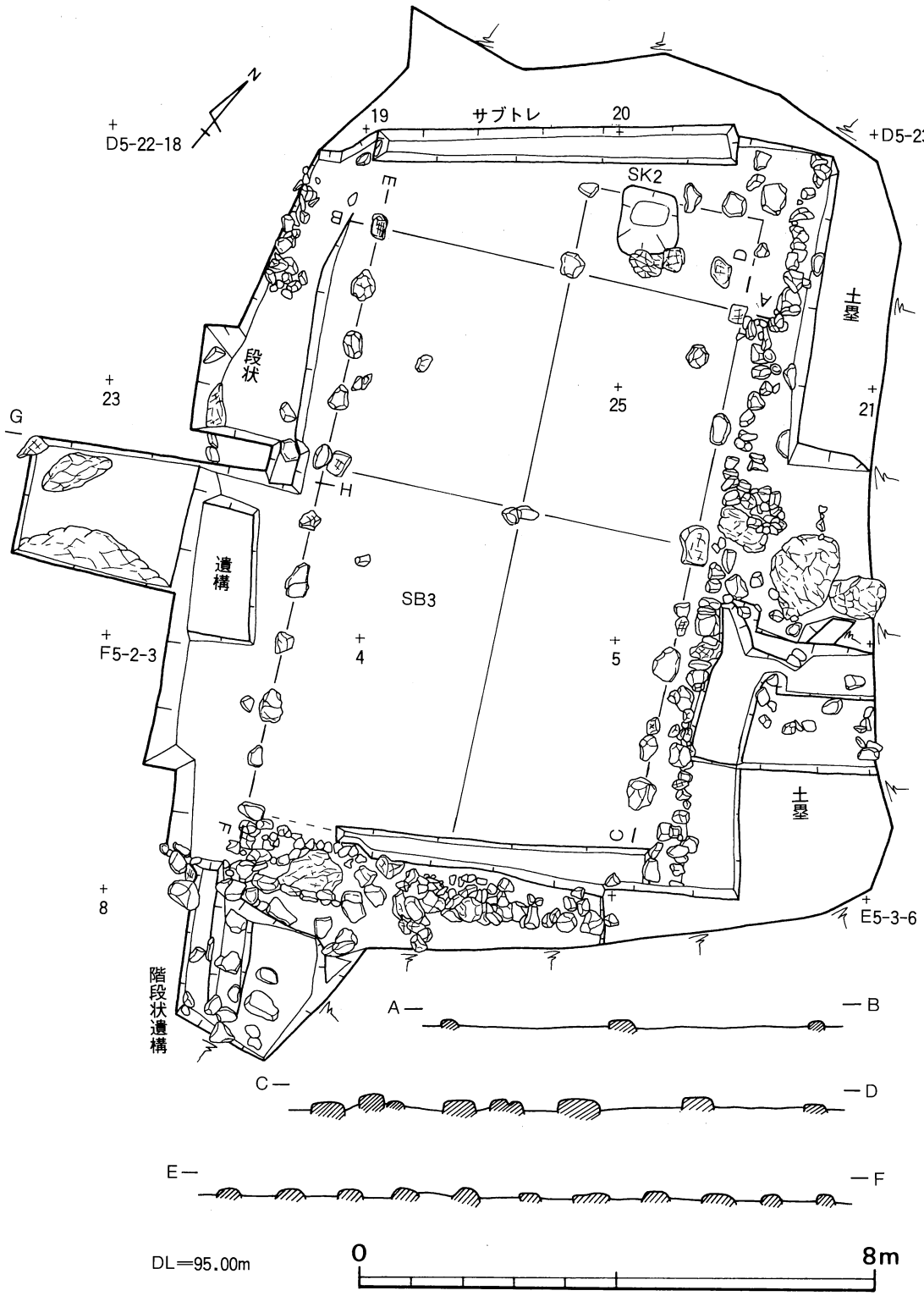
土塁は堀切側によく残されており、現況でも十分に存在を知ることができる。調査の結果、ＳＢ３の礎石に接するように根石の石列が検出され、その規模は、基部で幅2.5ｍ、高さ１ｍ以上と推定される、土塁の断面観察によれば、版築状の盛土は存在せず、上部は後世の盛土であり、やはり上半部は崩れたものであろう。なお、根石の石列上からＳＢ３の礎石上に多量の割石が乱雑に堆積しており、土塁の崩壊を示しているとみられる。また、詰下段の南端部にも石列が確認されたが、平担面の端部に石垣状に積んでおり、表土層中に含まれていることから後世の公園化による整備と考えられる。

詰側の斜面は、岩盤がみられる約７ｍの間にわたって垂直に削り落しており、壁を作り出している。さらにその下部には、全長6.8ｍ、幅1.0ｍ、高さ30～40㎝を測る盛土による段状遺構をＳＢ３の礎石に接するように造り出している。セクションからみればこの盛土は、版築状の堆積土ではなく、黄褐色粘質土の単一層であるが、非常に堅く締っており若干の土師質土器片を含んでいる。また、南西端部には公園化による三ノ段への遊歩道が整備されていたが、確認のためにトレンチを入れたところ下部から階段状の整形面を検出し、一部には敷石とみられる偏平割石も認められ、三ノ段への通路が存在するのではないかと考えられた。

詰下段の出土遺物は詰に比べ少量であるが、やはり土師質土器を中心としており、他に青磁



第15図　詰下段Ｇ区段状遺構セクション（Ｓ＝1/50）

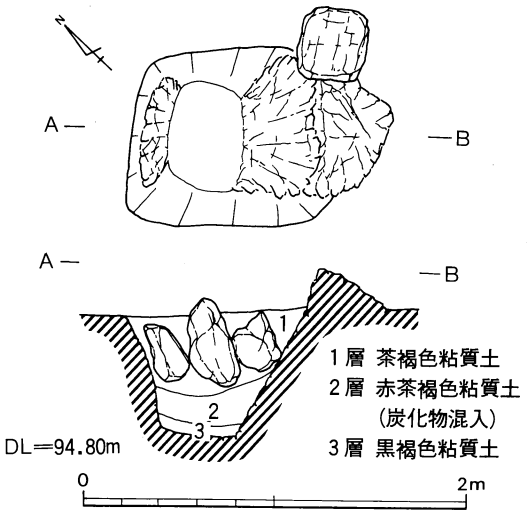


第16図　詰下段G区　SB3(S=1/100)

・染付等も出土しており、ＳＢ３内部では礎石面上で石臼片が出土している。

3　二ノ段

二ノ段は、第１次調査のＣ区と第４次調査のＮ区により調査を行い、数個の岩盤堀り込みのピットを検出したが、建物跡等の遺構は確認されなかった。調査結果からみれば、二ノ段の北部と東半部は厚い盛土により築造されており、西半部には表土下に岩盤がみられる。盛土層は茶褐色粘質土を主体とするものであり、東端部では地表下２ｍまで掘り下げたが、土師質土器片等の遺物が出土している。また、盛土の上層部には暗黒灰色粘質土層がみられ、瓦類、土師質土器、備前、輸入陶磁器等の遺物が多量に出土している。二ノ段には礎石建物等の遺構が存在しないことから、詰からの盛土が上層部に入っているものとみられる。下層部からは手づくねの土師質土器が出土しておりやや古く考えられることから、二ノ段は当初より築造されていたとみられる。

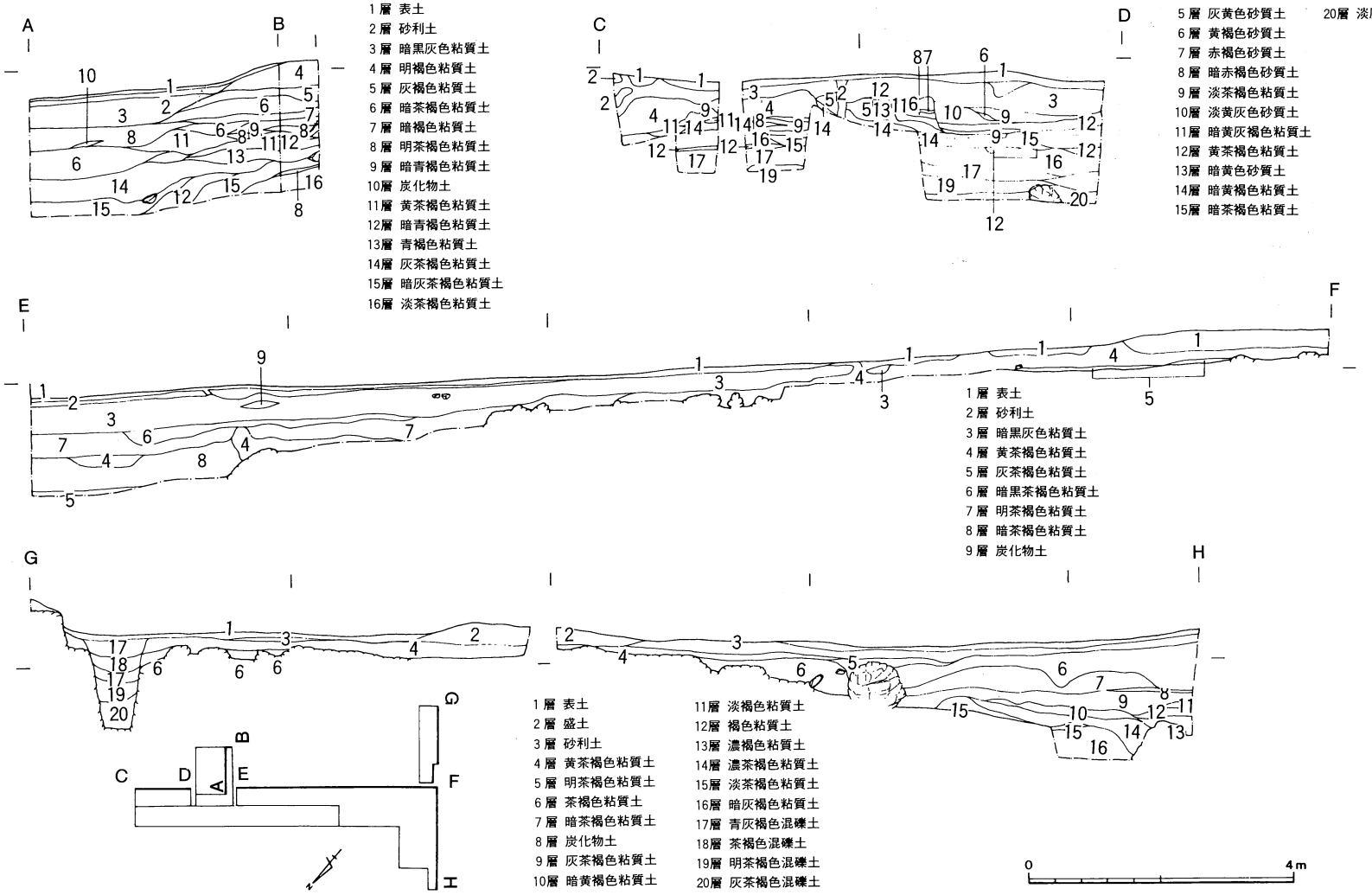


第17図　詰下段G区 SK2

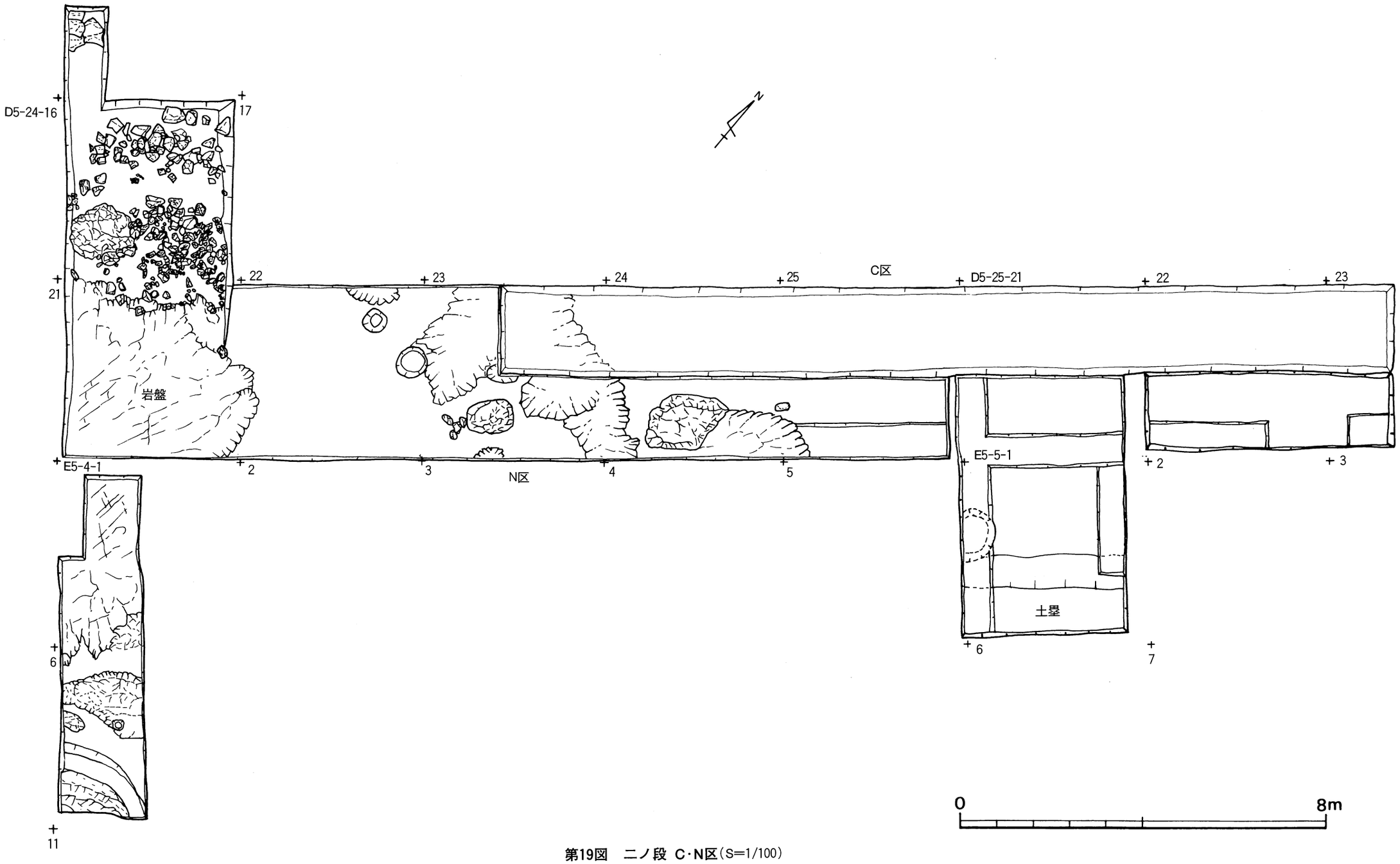
南辺の土塁については、４ｍ幅のトレンチによりその基部を検出することができた。土塁断面の土層からみれば、３層の盛土により形成されているが、いずれも蛇紋岩の礫片を含む粘質土であり、版築状の盛土は見られなかった。土塁の当初の盛土面は地表下50㎝の面であり、この面から現況の上面までの高さは１ｍ、幅約３ｍと規模が大きく、内側の斜面は緩やかな勾配をもっている。

北部はやはり盛土により築造されているが、盛土中には30～50㎝の割石や礫が多量に入っており、北端部では地表下２ｍの底部に60～70㎝の大形礫がみられ、盛土の土留用として積まれているようである。盛土は東半部と同じく茶褐色粘質土であり、上半部から多くの土師質土器が出土している。また、盛土の礫群中には渡来銭を２～３枚入れた土師質土器の杯が３個集中して出土しており、詰の埋納銭ピットと同じく二ノ段築造に関連する地鎮の祭祀ではないかと考えられる。

二ノ段の南西部には、岩盤を掘り込んだ溝状の塹壕跡が存在しており、表土直下が岩盤であるところから遺構はやはり存在しないものと考えられ、二の段は土塁に囲まれた平坦地として使用されていたようである。



第18図 二ノ段セクション



第19図　二ノ段 C·N区(S=1/100)

4　井戸・堀切

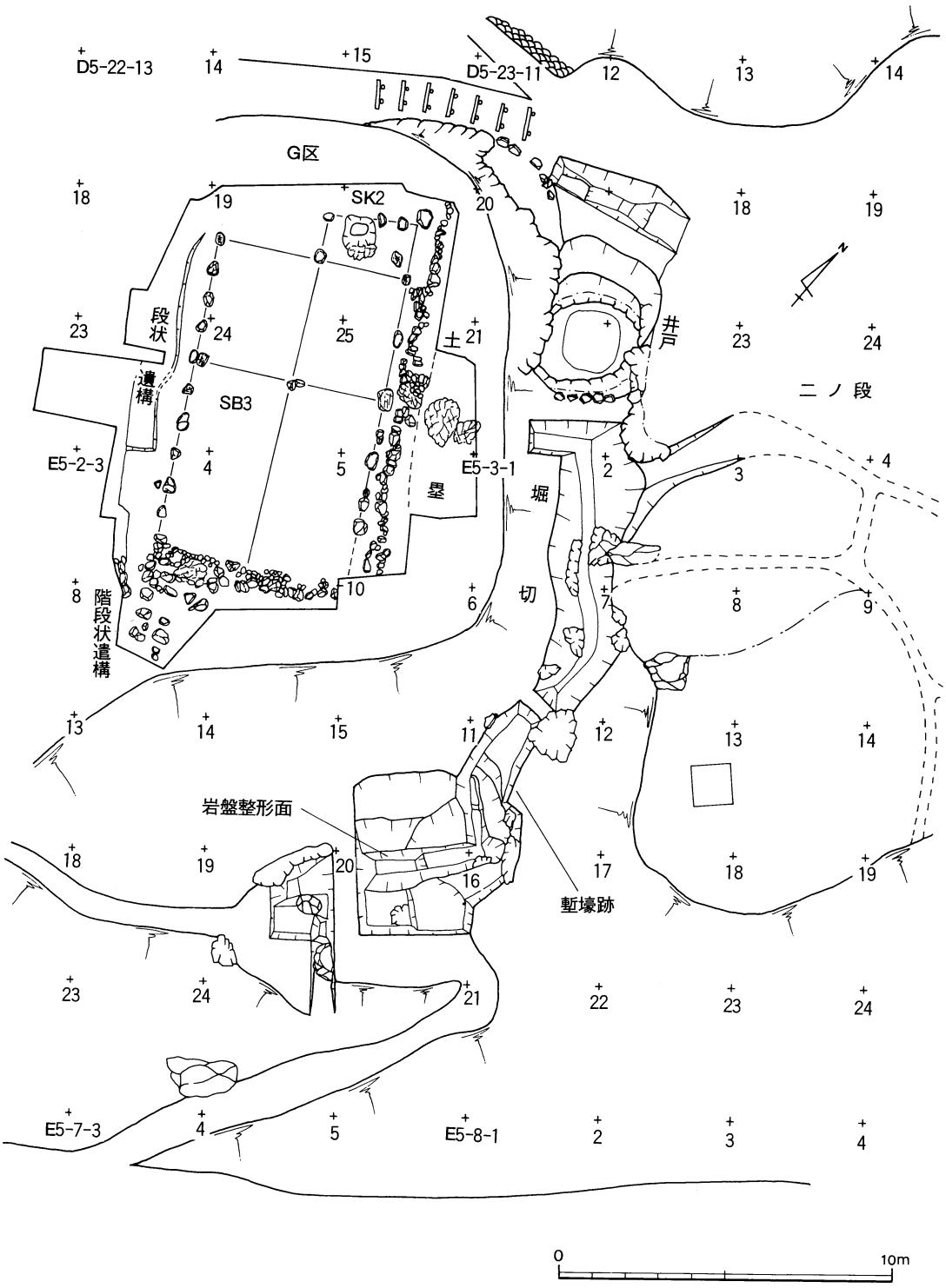
井戸及び堀切を確認するための調査区、M区を中央部から南斜面部へかけて設定した。堀切の現状は、北部に二ノ段から詰への通路が存在しており、通路の南に接して井戸が位置している。井戸からは南へ急激に落ちており、標高90ｍを測る部分において土塁状の地形に接続し、終っている。また、堀切自体が公園化により二ノ段から南へと下る遊歩道として使用されている。堀切の調査区は土塁状の地形までとし、以下は自然地形である。また、井戸北部の通路部分の確認のために１×３ｍのトレンチを設定した。

堀切は、岩盤を幅60㎝、深さ約1.0ｍほど掘り込んでおり、やや蛇行し南へと下っている。土塁状地形手前の斜面は、堀切に直交するように詰側の岩盤を垂直に削る岩盤整形面が検出され、一部深堀りのトレンチにより確認したところ、４ｍ以上の高さをもつ壁を造り出していることが確認された。堀切の埋土は上部30～40㎝が遊歩道としての整備のための盛土であり、以下の土層は茶褐色粘質土であるが、土師質土器とともに新しい時期の遺物が混在しているので疑問が残るところである。また、土塁状地形手前の壁前面の埋土の底部からは近・現代の遺物が出土しており、土塁状の地形も含め全体が後世の埋土及び盛土である。以上の結果からみれば、二ノ段西端部（堀切の上部）に太平洋戦争中に高射砲陣地が設置されていたことも考慮すると、堀切の岩盤堀り込み及び岩盤整形面の壁も後世の所産である可能性が強い。出土遺物としては岩盤整形面前面のトレンチから流れ込みではあるが、２点目の刻銘瓦が発見されており注目される。

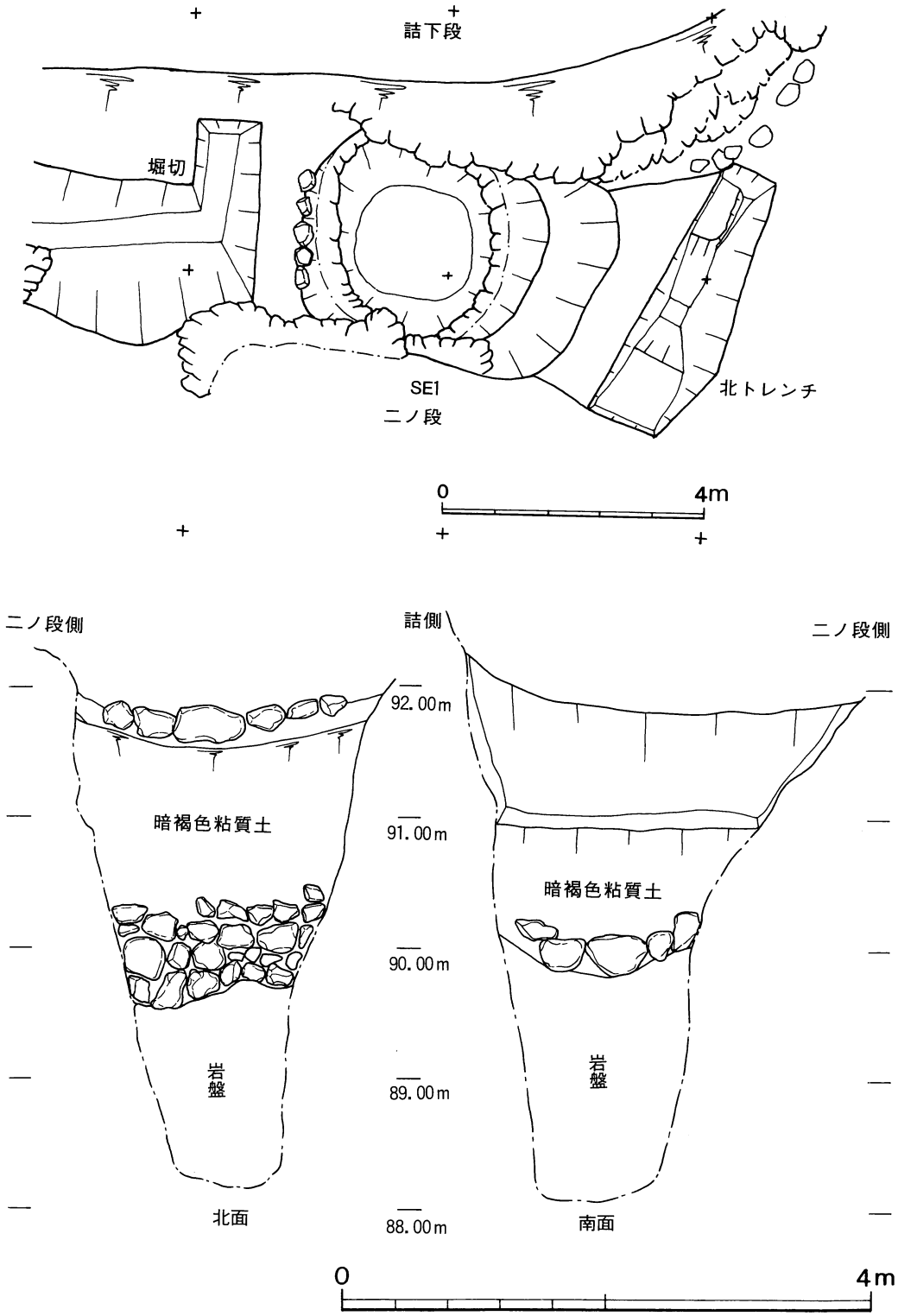
井戸は、堀切のほぼ中央部に位置しており、規模は、上部約3.0ｍ、底部80㎝を測る方形を呈しているが、上部は不整形である。岩盤の掘り込みは約3.6ｍであり、ほぼ垂直に近い壁を持ち、方形に整形している。深さは二ノ段側の上面から4.7ｍを測る。岩盤の上面には堀切を横に区切るように北に２段、南に３段の割石の石積みがみられ、井戸の深さを増すとともに上部を形成している。井戸は公園化された折に一度底部まで掘られており、今回の調査時における埋土はすべてそれ以後のものであった。なお、過去に掘られた時には多量の瓦が出土したとのことである。また、湧水はほとんどなく、雨後に岩盤上面からわずかに流れがみられるのみであり、天水を溜めたもので溜井として使用されていたものと考えられる。

井戸の北の通路部分のトレンチでは、岩盤がＶ字状に掘り込まれており、堀切は南だけではなく北へも続いていたことが確認された。当初の状態は、この堀切により詰と二ノ段は完全に隔絶しており、木橋による通路が存在していたのではないかと推測される。また、岩盤の掘り込み部分にはやや乱雑にではあるが40～60㎝の大形の割石が詰められており、セクションからみても盛土層と考えられる土層が存在することから、ある時期には、この北端部が埋められ、土橋として使用されていた可能性も十分に考えられる。

なお、井戸が堀切の中に存在し、さらに井戸の北側は堀切を埋め通路となっていることから堀切はその役目を終了した後に井戸が堀り込まれたと考えられ、北側の通路部分も同時に埋められたものであろう。



第20図　井戸・堀切M区（S＝1/200）

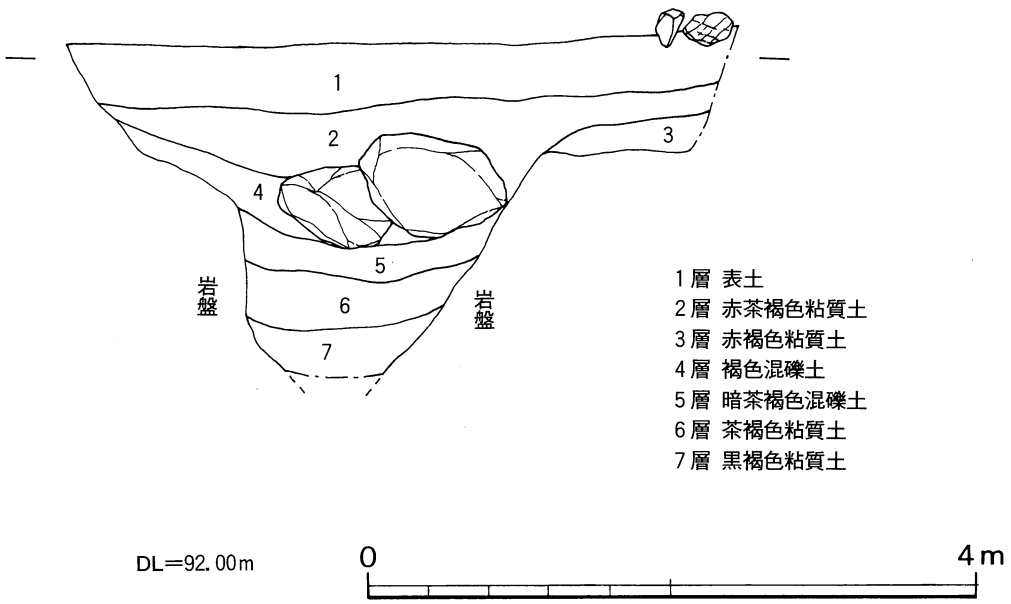


第21図　井戸・堀切M区　SE1（S＝1/100・1/50）

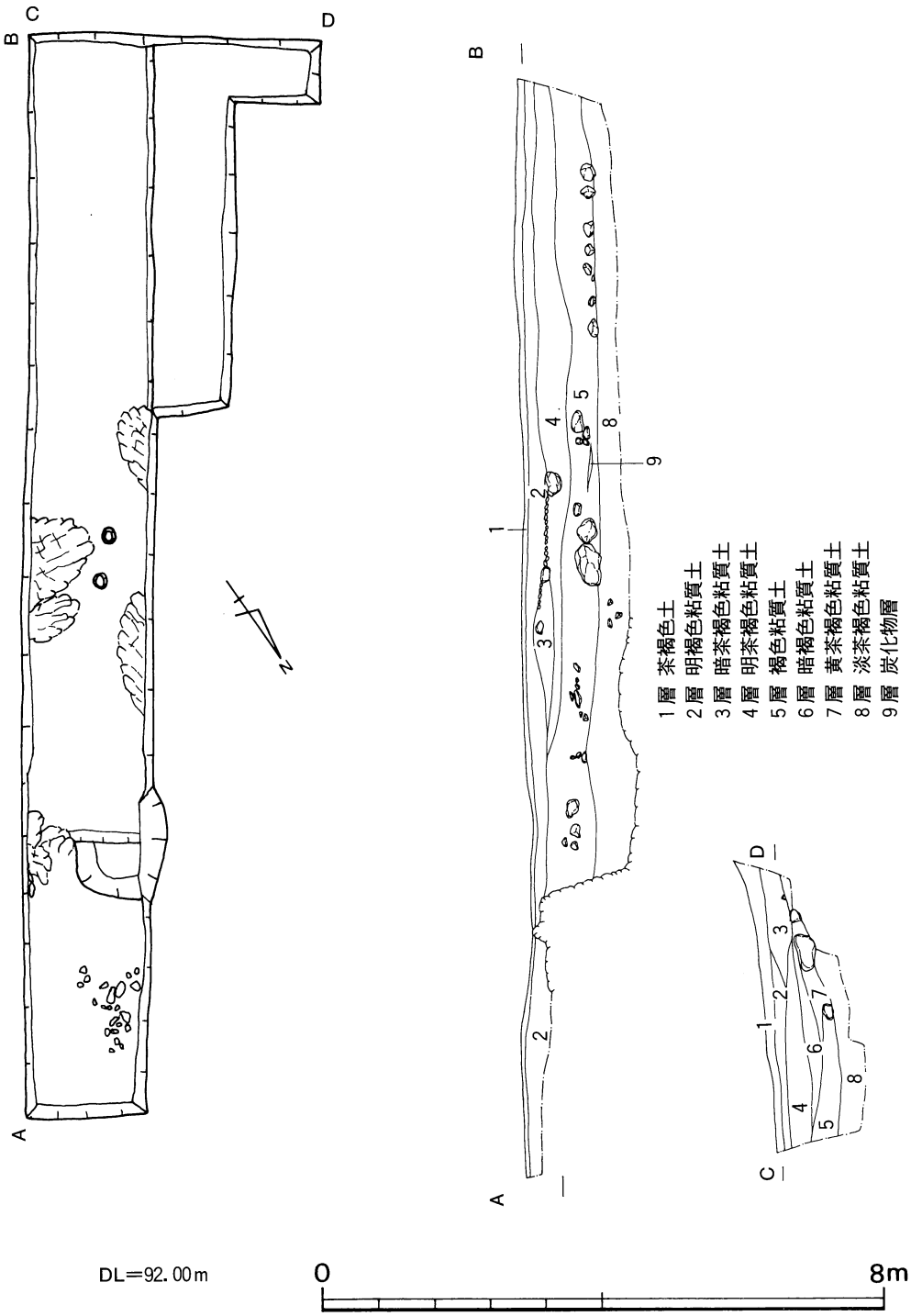
5　三ノ段

三ノ段は南部を対象として第３次調査にＫ・Ｌ区の２ヶ所の調査区を設定した。西部については、第４次調査にＯ区を、第５次調査にＱ・Ｒ・Ｓ区の４ヶ所の調査を設定することにより、ほぼ全体を調査することができた。

三ノ段南部は狭長な曲輪であり、土塁も残されておらず遺構遺存状態は不良とみられた。調査はＫ区を地山まで下げ遺構を確認し、Ｌ区では一部に層序確認のためのトレンチにより地山を確認した。Ｋ・Ｌ区ともに地表下の盛土中に敷石、列石を検出したが、これは公園化により整備されたものであった。Ｋ区では、地表下約1.4ｍで岩盤の地山を検出しており、この岩盤上に２個のピットを確認した。ピットは直径25～30㎝を測る円形であり、深さは30～40㎝と深い。ピットは調査区の中央部に約1.0ｍの間をもって位置しているが、周囲に他の遺構は検出されなかった。調査区の層序からみれば、上部約60㎝ほどの１～３層は敷石等に伴う新しい盛土以降の堆積であり、４層以下が当時の堆積層である。４層中にはやはり炭化物と焼土の集中が部分的にみられ、土師質土器を中心にした青磁等の遺物も多く含んでいた。また、４層の下半部には乱雑に堆積した30～60㎝を測る大形の割石が多量に出土しており、詰の斜面裾部へと続いていた。出土状況及び割石の規模からみると詰の斜面に積まれていた可能性が強く、これが崩壊し、三ノ段へ堆積した後に上面を整地しているのではないかと考えられる。また、Ｌ区においてもトレンチの層序からみて、地表下約1.0ｍに炭化物と焼土を含む層が約10㎝の厚さでみられ二ノ段と同様に三ノ段においても全面に炭化物を含む層が分布しているようである。



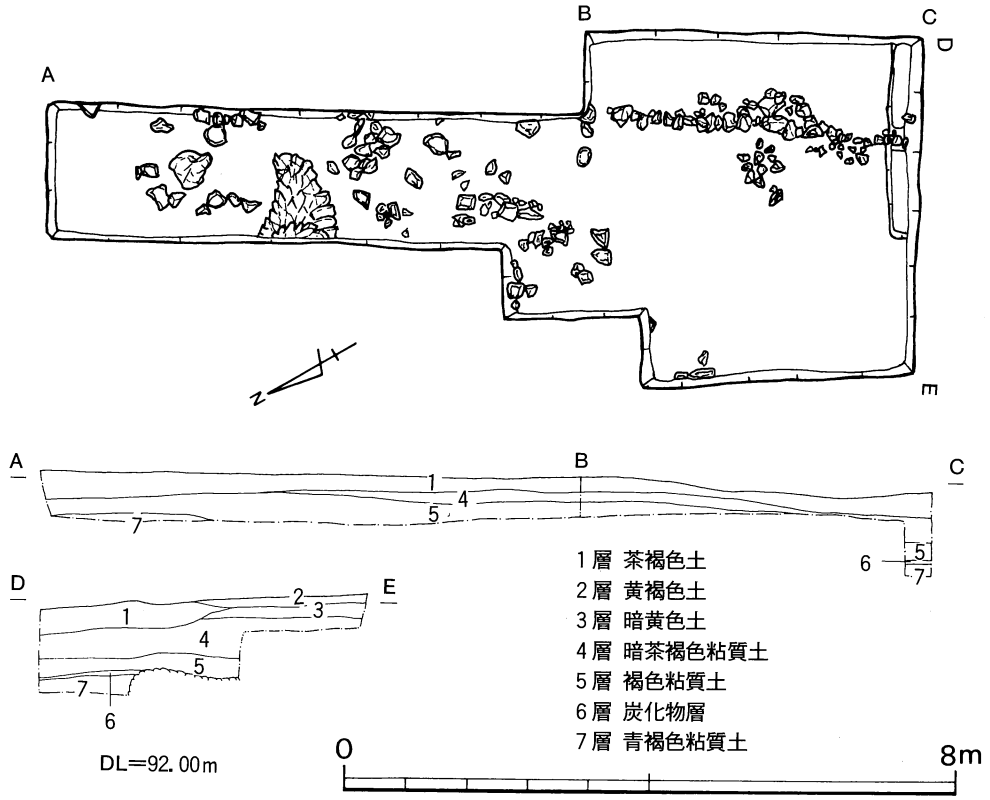
第22図　井戸･堀切Ｍ区 北トレンチ北壁セクション（Ｓ＝1/50）



第23図　三ノ段 K区（S＝1/100）

三ノ段西部では、ほぼ全体にわたる土塁内側の石垣、中央部に位置する詰への階段による通路跡（ＳＸ３）、北半部の土塁とＳＸ３に囲まれた礎石建物跡（ＳＢ４）、土塁とＳＢ４の間にみられる溝（ＳＤ３）が遺構として検出された。

ＳＢ４は、北半部の平垣部いっぱいに建造された礎石建物跡であり、西及び北の一部は土塁石垣に、南はＳＸ３の石垣に、東は詰の斜面に接するように位置している。規模は、南北９間と長く、礎石端では16.8ｍを測る。東西は北部で４間、南部で３間と南では１間狭くなっており、中央部に南北を分離する間仕切りの礎石とみられる石列が存在しているので、北部は４×４間、南部は５×３間の２つに分かれていたものと考えられる。北部の４間は全長8.7ｍ、南部の３間は6.2ｍを測る。礎石はすべて半間の間隔で置かれており、１間間隔の礎石は50～60㎝と大形の蛇紋岩割石であるが、その間にみられる半間の礎石は40～50㎝とやや小形である。礎石間の距離は0.8～１ｍでありほぼ揃っているが、北辺の礎石間には1.2ｍとやや広いものもみられる。東辺の礎石は、南部の2.5間分はきわめて良好に残されているが、北部では詰の斜面にかかり調査区外となっており不明である。北部の４×４間部分には礎石間に20㎝前後の小形の割石の列石が並べられているが、南部の３×５間では礎石間の列石はみられない。しかし、南辺と東辺では、ＳＸ３の石垣と詰斜面の岩盤との間に溝をなす石列が礎石に接しており、礎石間の列石となっている。南北を分ける中央部の石列は60～70㎝と大形の割石と河原石であり、



第24図　三ノ段　Ｌ区（Ｓ＝1/100）

間隔はなく置かれている。また、この石列中と南には石臼の下臼２点の完形品が出土しており、ＳＢ４の性格を考える上で注目される。建物跡の内部にも南部には礎石が５個存在しており、間仕切の礎石とみられる。また、東辺の礎石周辺には20～30㎝の敷石が存在している。ＳＢ４の占める面積は123.16㎡であり、岡豊城跡では最大の建物となっている。

礎石列の北辺と西辺、土塁に面する位置には、礎石の外側50㎝に20～40㎝の割石の列石が存在し、建物の範囲を囲むとともに土塁との間の溝の肩となっている。この列石は、南辺及び東辺では礎石に接しており、南辺では２～３段の石積みとなる。

土塁内側の石垣は、北半部に非常によく残されており、ＳＸ３から南ではほとんど崩壊している。使用される石材は、30～50㎝の蛇紋岩の割石がほとんどであり、若干の河原石が混在している。最もよく残っている部分では６段積みであり、高さは１ｍを測る。また、北辺の一部では、奥にも石積みがみられるところから部分的には二重の石積みをもっているものと考えられる。土塁北部の端面には石垣はみられず、突然に終っている状況からみれば本来は端部にも石垣は存在したものであろうが、土塁に接するように礎石が検出されているので、土塁を部分的に掘削した結果ではないかと思われる。土塁は蛇紋岩の礫片を多く含む盛土により築造されているが、断面からは版築状の盛土は行われておらず、ほぼ単純層により造られている。石垣の裏込めには若干の割石が入れられているが、ほとんどは盛土に直接石積みを行っている。

土塁石垣と礎石外側の列石の間は、幅50㎝、深さ20～50㎝の溝（ＳＤ３）となっており、底部はほとんどが岩盤となっている。底部の高さは北端部がやはり高く、南部へ低くなることから排水用の溝と考えられる。また、底部には直径20～50㎝、深さ10～30㎝のピットが数個検出されているが、間隔、規模等に規格性はなく、柵等の遺構とは考えられない。ＳＸ３と礎石の間も溝であり、東端部で幅30㎝、西端部では幅50㎝となり、深さは40～50㎝である。東端部から２ｍの間には底部に扁平礫による敷石がみられるが、他の部分は岩盤が底部となっている。ＳＤ３は、ＳＢ４から約９ｍ南へと延びるが、土塁石垣の崩壊した位置で同じように消滅している。

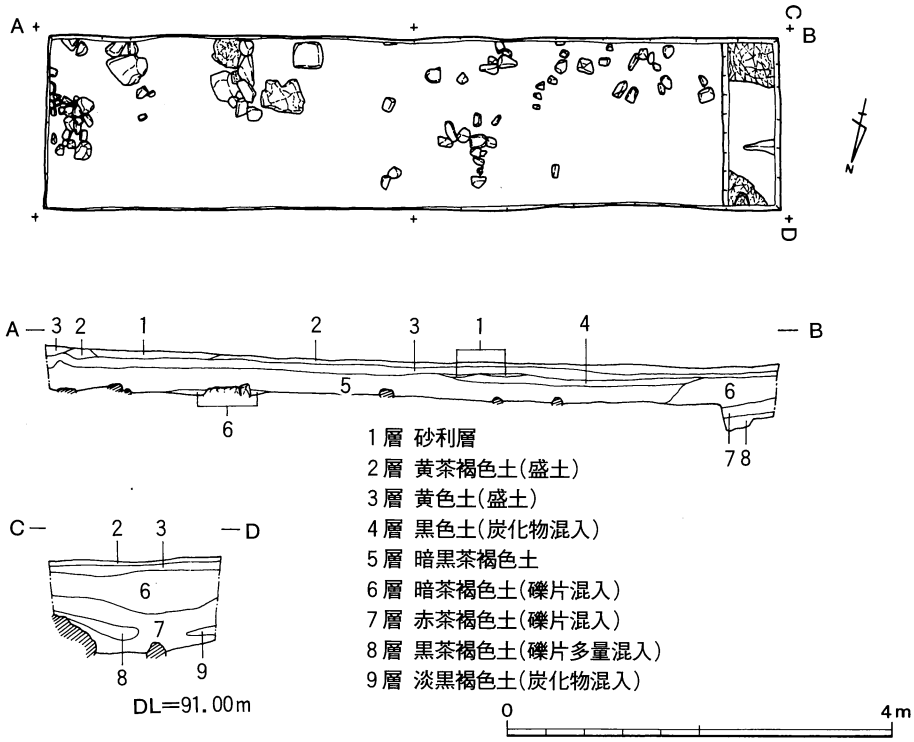
ＳＸ３は、南北両斜面に石積みをもつ階段状の詰へ通路であるが、側面の石積みは北側のみよく残されており、南側ではほとんど崩壊しており、多量の割石が乱雑に堆積していた。石積みは、土塁石垣と同じく40～50㎝の蛇紋岩の割石を使用しており、３～４段に積まれている。全長は約６ｍ、幅2.5ｍ、高さは0.5～１ｍを測る。詰側上部は岩盤を整形し、両側を大きく刻り込むことにより、突出させている。上面と下部は盛土により造られており、中に割石が混在している。上端部から西へ３ｍの間は勾配が大きく、かなり崩れてはいるが、段差30～40㎝、幅２ｍ前後の石段が６～７段存在していたものと考えられる。下部の傾斜は緩やかとなり、盛土のみの斜面が続き、南へと折れ曲り南の三ノ段への入口に接続している。また、南へ折れてから３ｍの間には通路東側にも石積みがみられ、石積みの終った位置には大形の割石による１段の石段が存在している。

土塁南端部では、入口の部分に長さ３ｍ、高さ60㎝の石垣が一部残されており、３～４段の石積みがみられる。また、南辺部の土塁にもやはり石垣が存在していたと考えられ、崩壊した割石が多数散在していた。

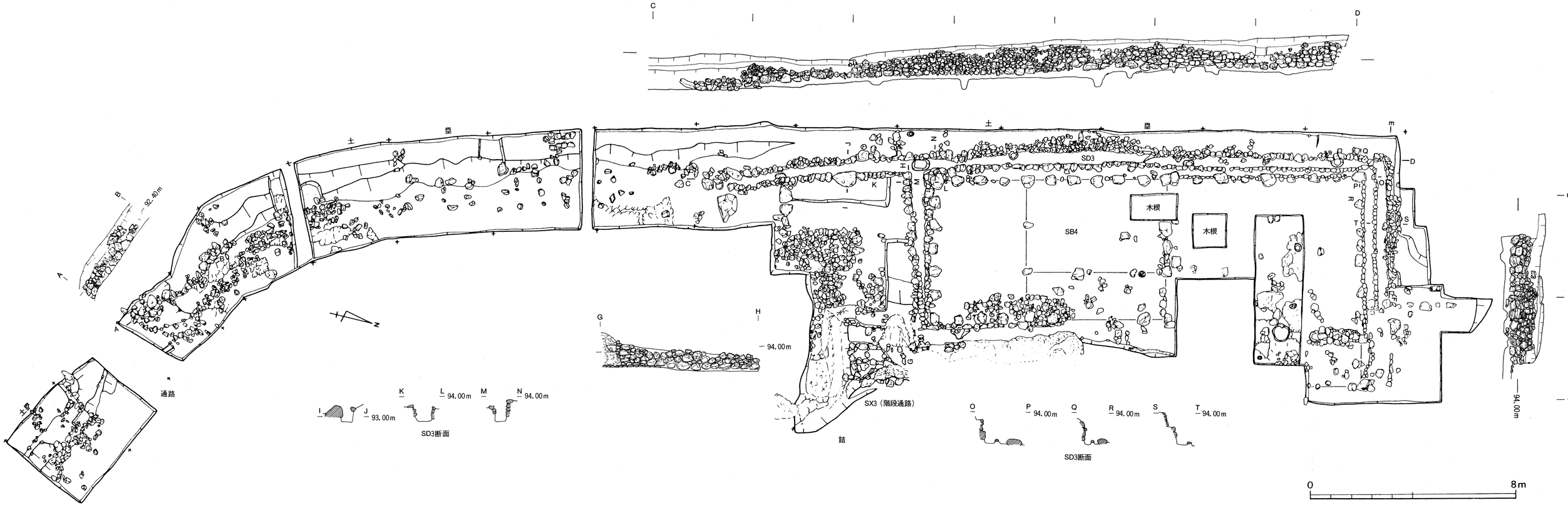
三ノ段西部の土層をみると、南部はほとんど堆積がなく表土下に岩盤が存在しており、土塁のみを盛土により築造している。北部ではＳＢ４の上面に厚さ30～50㎝のほとんど遺物を含まない黄褐色粘質土が全体を覆うように堆積しており、この堆積土により土塁石垣、ＳＢ４、ＳＸ３の北面などは保存されていたようである。また、黄褐色土自体は均一な土であり岡豊山の地山ではないことから考えれば、意識的にＳＢ４を盛土により整地し、空間を造り出したものとみられる。

6　四ノ段

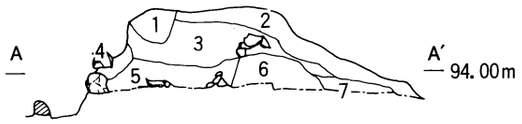
四ノ段北部は、岡豊城跡において虎口に通じる特徴的な曲輪であるが、遺構確認のためのトレンチにより、礎石とみられる割石を検出した。割石は30～40㎝の扁平礫であるが、調査範囲が狭いこともあり建物の規模等を確認することはできなかった。礎石の検出面は地表下50㎝であるが、岩盤は地表1.3ｍで確認されることからみれば盛土中の礎石であり、下層に遺構面が存在する可能性がある。また、地表下90㎝では、詰以下の調査区で確認された炭化物層の存在が確認されている。



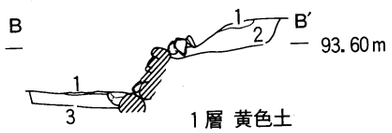
第25図　四ノ段　Ｐ区(Ｓ＝1/80)



第26図　三ノ段 O・Q・R・S区（S＝1/100）



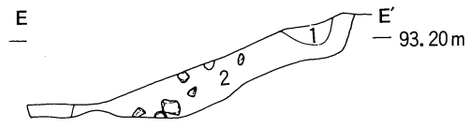
1層 黄色土
2層 茶褐色粘質土
3層 暗褐色粘質土
4層 黄褐色粘質土
5層 明褐色粘質土
6層 明黄褐色粘質土
7層 褐色粘質土



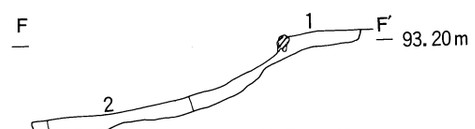
1層 黄色土
2層 茶褐色粘質土
3層 暗褐色粘質土

1層 黄色土
2層 暗褐色粘質土
3層 茶褐色粘質土
4層 明褐色粘質土

1層 茶褐色粘質土
2層 明褐色粘質土
3層 暗褐色粘質土

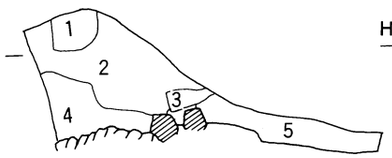


1層 黄色土
2層 茶褐色粘質土

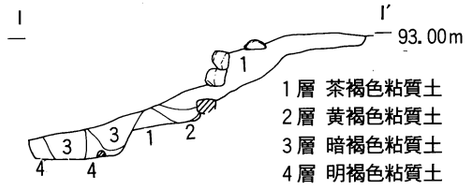


1層 茶褐色粘質土
2層 暗褐色粘質土

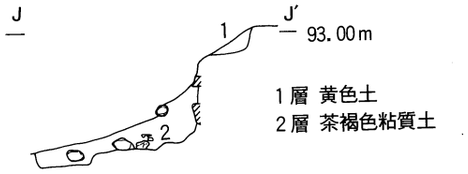
1層 茶褐色粘質土
2層 暗褐色粘質土



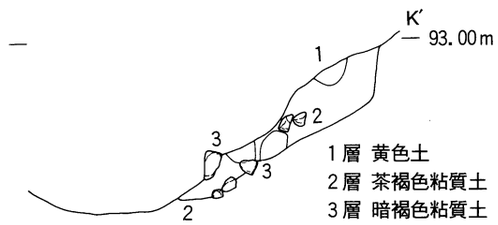
1層 黄色土
2層 茶褐色粘質土
3層 黄褐色粘質土
4層 青褐色砂利土
5層 暗褐色粘質土



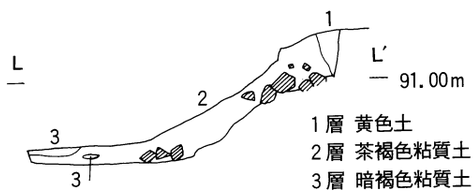
1層 茶褐色粘質土
2層 黄褐色粘質土
3層 暗褐色粘質土
4層 明褐色粘質土



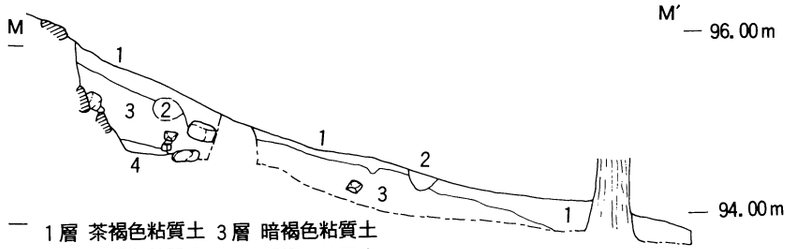
1層 黄色土
2層 茶褐色粘質土



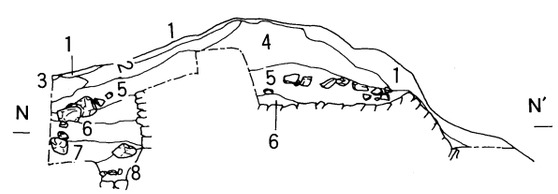
1層 黄色土
2層 茶褐色粘質土
3層 暗褐色粘質土



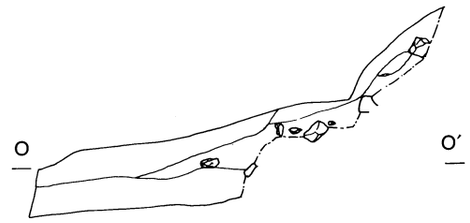
1層 黄色土
2層 茶褐色粘質土
3層 暗褐色粘質土



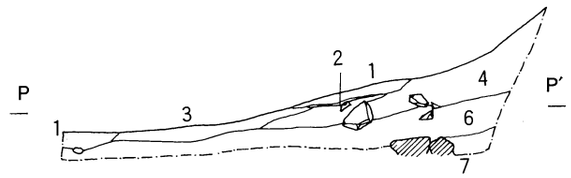
1層 茶褐色粘質土
2層 黄褐色粘質土
3層 暗褐色粘質土
4層 明褐色粘質土



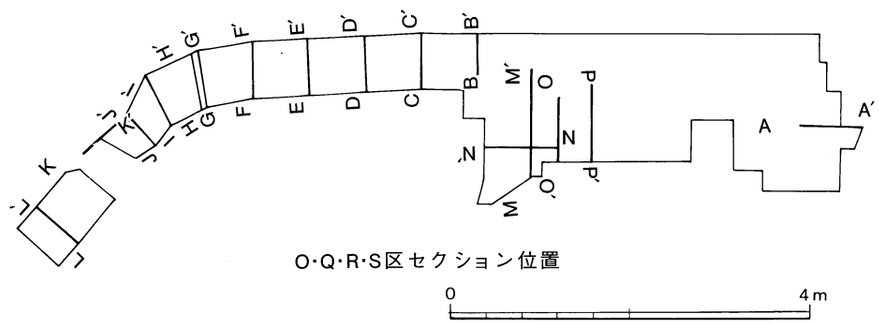
1層 黄色土
2層 黄褐色粘質土
3層 暗黄褐色粘質土
4層 茶褐色粘質土
5層 暗茶褐色粘質土
6層 褐色粘質土
7層 暗褐色粘質土
8層 黄茶褐色粘質土



1層 茶褐色粘質土
2層 明黄褐色粘質土
3層 暗茶褐色粘質土
4層 暗黄褐色粘質土

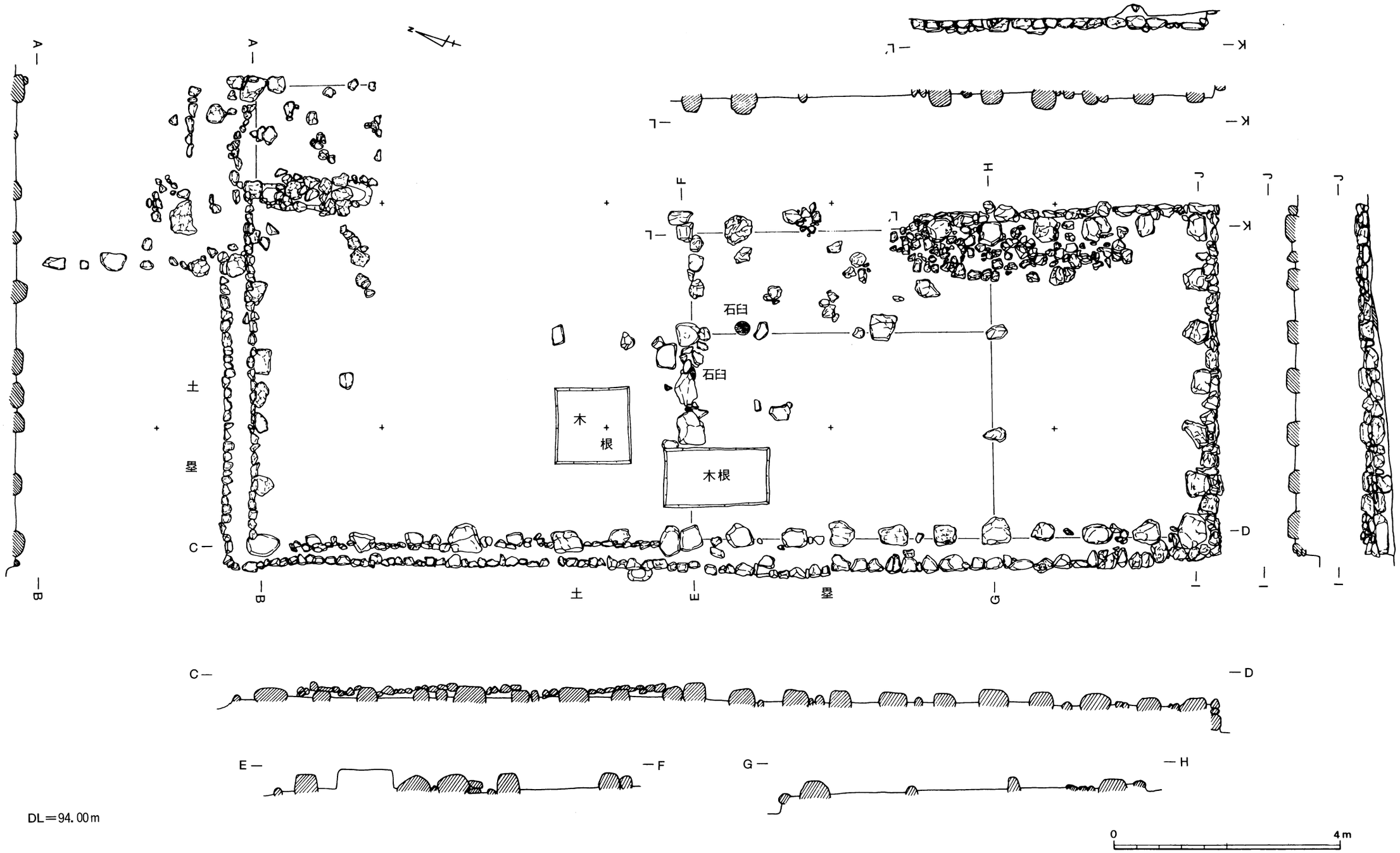


1層 黄色土
2層 黒褐色土
3層 明黄褐色粘質土
4層 茶褐色粘質土
5層 暗褐色粘質土
6層 暗黄褐色粘質土
7層 明褐色粘質土



O·Q·R·S区セクション位置

第27図　O・Q・R・S区 セクション(S＝1/80)



第28図　三ノ段O・Q・R区ＳＢ4(Ｓ＝1/80)

Ⅴ　出土遺物

昭和60年度第１次調査から平成元年度第５次調査までの出土遺物の概要を紹介することにするが、詰から四ノ段にわたるすべての調査区で山城としては夥しい量の遺物が出土しており、長宗我部氏の居城として存在した内容の遺物の豊富さである。昭和63年３月の第１～３次調査概要で一部紹介している如く出土遺物の内容は、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器（青磁・白磁・染付）、国内産陶器、瓦類、土製品、石製品、金属製品等が出土している。県内の山城調査でも瓦類を除き同様な組成で製品が出土しているが、岡豊城の特徴としては輸入陶磁器の染付や瓦類が比較的多く出土している点である。他の中世山城調査で若干輸入陶磁器の染付が出土しているところもあるが、瓦類の出土とともに岡豊城に匹敵する山城は、県西部の中村城跡のみである。

出土土器の総点数は、約74,600点である。その中でも土師質土器の量がもっとも多く、細片も含め約72,600点出土しており、土器総点数の約97％を占め、県内の中世山城と同様な出土状況を示している。器種構成としては、杯・小杯・小皿等が認められる。瓦質土器は、約10点で非常に少ない。輸入陶磁器は、青磁171点、染付247点、白磁56点の総計474点で、土器総点数からすれば極端に少ない。国内産陶器は、備前焼1,223点、瀬戸美濃系36点である。輸入陶磁器に較べその占める割合は多い。供膳具は、土師質土器・輸入陶磁器類・瀬戸美濃系陶器で占められ、貯蔵・調理具は備前焼、煮沸具は、瓦質・土師質土器、暖具は瓦質土器である。土製品は、フイゴの羽口、土錘が主で、石製品は硯、茶臼等が出土している。その他注目される遺物として、天正３年刻銘の瓦片や懸仏として使用されたと考えられる金銅仏等がある。さらに二ノ段からは、貝類が多く出土している。

本城跡出土遺物は、遺構に伴うものが少なく包含層出土のものが大半であることと、詰から四ノ段にかけての遺物に時期的及び器種的な差異は認められないことから、ここでは種類・器種ごとに概要をまとめることにしたい。なお出土地点・調査年次・層位等の詳細については観察表を参照されたい。

１　土師質土器

土師質土器は、小皿、皿、小杯、杯、鉢、火鉢等が出土している。小皿は４点と極端に少ないが、ロクロ成形のものもある。皿はロクロと未ロクロの両者が存在し、比較的まとまって出土している。杯・小杯はすべてロクロ成形で、底部には回転糸切り痕が確認できる。胎土・色調は、軟質で全体的に浅黄橙色を呈するものが多い。土師質土器は、まんべんなく詰から四ノ段にかけて出土しているが、その中でも手づくねの皿は、主に詰東側部分から集中して出土している。

1～4は、小皿で口径6.4～7.2cmで器高1.5～1.7cmを測るものである。形態はそれぞれ異なるがすべてロクロ成形で、底部には回転糸切り痕が観察できる。8は耳皿で1点のみ出土している。底部は回転糸切り痕が残りロクロ成形である。

5～7・9～41は手づくねの皿である。口径8～10cm、器高2.0～2.5cmを測るものが多く、41にみられるように口径12cmで大振りの製品も若干存在する。体部から底部にかけて指頭によるナデや圧痕が観察でき、口縁部が外反するものから直線的に立ち上がるもの、内湾するものなど形態の異なるものが認められる。42～61はロクロ成形の皿で、底部はすべて回転糸切り痕が観察できる。42は、口径8.4cm・器高1.7cmを測り皿の中でも最も小振である。58は口径13.3cm・器高2.8cmを測り最も大振りで、57・59～61に見られるように口径11～12cmの皿もある。その他は、口径10cm前後で統一され量的に一番多い。形態は、平担な底部から屈曲し直線的に外上方に立ち上がるものと、内湾して立ち上がるものとの二形態が認められる。

62～85までは小杯である。小杯の中には小皿と分類が明確でないものも存在するが、杯の小型化を意識し製作しておりここでは一括した。口径6～7cm、器高1.5～2.5cm内外におさまるものである。すべてロクロ成形で、底部には回転糸切り痕が残る。

86～141は杯である。86～108は、やや小振りの杯で口径9.5～10.5cmを測り、器高は3cm内外である。ロクロ成形であるが、内面にロクロ痕を明瞭に残さず体部は直線的に立ち上がる形態を特徴とする。109～115はやや大振りであるが、内面のロクロ痕は明瞭でない。116～140は杯の典型的なもので、口径11～13cm、器高3.5～4.5cmを測りロクロ成形である。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる形態である。内面に明瞭なロクロ痕が残るのが特徴である。口径と底部の比率が3：1になるものが多い。141は口径14.0cm、器高3.1cmで口径が広いが、これは特異な現象である。142は、内底面の中央部に径5mmの小孔が穿たれているが貫通はしていない。底部は、回転糸切り痕の後に平行圧痕が施される。

245・246は鉢である。246は口縁部の細片なので明確ではないが、条線は認められずコネ鉢と考えられる。247～249・251・252は火鉢である。体部は外傾して立ち上がり端部はやや肥厚し、252のような三脚が付くと考えられる。内外面の摩耗が著しいが横位のハケ調整が施される。

2　輸入陶磁器

輸入陶磁器は、青磁・染付・白磁が出土している。図示できえた遺物では、染付が比較的多く出土している。

青　磁

143～152までは碗である。143は、内外面無文の碗で貫入の認められない口縁部の破片である。144も内外面無文の碗であるが、釉が厚く内外面に荒い貫入が入り、やや大振りの碗と考えられる。形態は、体部が内湾して立ち上がり口縁部が外反するものである。外面は、山形の剣先

を有する細蓮弁文が施される。146は、復元口径15.2cmで体部から内湾気味に外上方に立ち上がる。外面に線描きの細蓮弁文が施され、内面に貫入が入る。147は、胴部破片であるが、同様に線描きの細蓮弁文が施され内外面に荒い貫入が入る。148は、篦による線描きで細線と剣頭が施されているが、連弁としての単位にやや乱れが生じている。口縁部外面に一条の横線が施され、内外面に荒い貫入が入る。149は体部破片であるが、内面雷文帯の下に文字が刻み込まれている。外面は草花文と考えられる。150は、底部破片で見込みは段を有し内面のみ施釉される。外面は、露胎で高台は逆台形状を呈する。151も内面から高台外面まで青緑色釉が施されるが、畳付と外底は露胎である。152は、底部から内湾して外上方に立ち上がる形態をとる。内外面無文で、釉は高台外面まで灰褐色釉が施され貫入が入る。高台内面、畳付は露胎である。

153菊皿で、内面は21弁の花弁を持ち型押し成形でなく、見込みから口縁に向かってそぎを入れている。154～157は稜花皿である。復元口径11～14cmを測り154・157はやや大振りである。いずれも口縁部内面に櫛描きの文様が施されており157は、横線のみと簡略化されている。すべて内外面に貫入が入る。

159～161は盤である。160は、畳付の中程まで釉が施され、外底は無釉である。内外面に貫入が入る。161はやや大振りの盤であるが、底部から大きく外方に内湾して立ち上がる。畳付のみ露胎で、すべて釉が施ざれ内外面に貫入が入る。159は、口縁部で水平に近く屈曲し、さらに端部は上方に肥厚する。内面には幅広の細蓮弁文が施される。158は、三脚の香炉である。外面は露胎で、外面は細かい貫入が入り青白色の釉が施される。

染　付

162～192までが皿である。162は、口縁部の細片であるが内面に波濤文、外面に1条の界線が施されている。163は、体部が内湾して立ち上がり全体的に白濁色の釉が施され細かい貫入が入る。外面は草花文、内面は見込みに2条の界線が施される。164は、全体的に透明釉で口縁部内外面に1条の界線と外面高台脇に界線が施される。165は見込みに十字花文、高台脇に2条の界線が施され外面には貫入が入る。166の外面は、口唇部に界線と体部には草花文と考えられる文様が認められる。167は大振りの皿である。底部の細片であるが、畳付の釉を削られ一部に砂が溶着している。見込みと高台脇に2条の界線が施される。168は、底部破片で見込みと高台脇に1条の界線が施される。畳付は露胎で砂が溶着している。169は白濁色の釉がかかり内面に2条の界線、外面は草文が施され、内外面に貫入が入る。170・173・175は外面牡丹唐草文が淡い呉須で描かれる。口縁部は端反りである。171は碁笥底の皿で外面波濤文と芭蕉葉文で、見込みは不明である。172は口縁部がやや外反する形態を持ち、口唇部内外面に1条の界線が施されその他は濃技法で文様が施される。174は内外面白濁色の釉が施され内外面に貫入が入る。内面は1条の界線が入り外面の文様は明確でない。176は底部の細片であるが、

高台外面に2条の界線が施され見込みの文様は不明である。畳付は狭く無釉である。177は体部が内湾して立ち上がり、口縁部が外反する皿である。外面に唐草文が施される。178は大振りの皿で、見込みに玉取獅子の文様が施される。179は、器壁が薄く見込み中央部がやや窪む。文様は見込みに1条の界線のみである。180は口縁部が端反で、内外面口縁部に2条の界線と外面の下に唐草文が施される。181は口縁部の細片であるが、端反の皿で外面2条の界線下に唐草文が施される。182は一般的によく見られるもので、見込みの2条界線中に玉取獅子、体部外面には牡丹唐草文が施される。183は口縁部が大きく外反し端部に鉄釉がみられる。内面と外面に1条の界線が見られる。184は、畳付を除き全面施釉され見込みに山水人物画が施され、外底2条の界線中に文様が施されている。185は大振りの端反の皿で、口縁部内面に四方襷文、見込みと外底に2条の界線が施されている。畳付は露胎で釉調は、内外面で異なる。186は、小振りの端反の皿で外面に唐草文、見込みに十字花文が施される。畳付に一部砂が溶着している。187は、口縁部が端反で端部に鉄釉がかかり、内面に丸ノミ状工具の蓮弁状の文様が施される。見込みは文様不明。188は、口縁部で大きく外反し、器壁も薄い。見込みの文様などは、濃技法がもちいられている。189は大振りの皿で、見込みと外底に2条の界線が施されている。190は、見込み2条の界線中に玉取獅子が描かれる。高台脇から畳付まで無釉である。191は、見込み2条の界線中に濃技法で文様が施される。192は、大振りの皿で口縁部は端反、畳付のみ露胎で総釉である。体部外面は界線に囲まれた唐草文、内面は口縁部に1条の界線、見込みは2条の界線に囲まれ花樹文と考えられる文様が描かれている。

193は小杯である。器壁が薄く口縁部は外反し、内外面1条の界線と外面には文様がほどこされている。1点のみ出土している。

194から205までが碗である。皿と比較すれば量的に少ない。194は、体部から口縁部にかけて内湾して外上方に立ち上がる形態で、内面は1条の界線、外面は文様不明である。195は小振りの碗で、口縁部は外面1条の界線のみで内面は四方襷文が施される。196は、口縁部が外反する。197も口縁部が外反し、外面に唐草文が施される。198は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部外面に波濤文、体部は唐草文と思われる。199は内湾気味に外上方に立ち上がる形態で、口縁部外面に雷文帯、内面は四方襷文が施される。体部外面は不明である。200は細片であるが、外面に仙人文と考えられる文様が認められる。201は全体的に釉が剝離しており文様等不明であるが畳付に砂が溶着している。202は外面草花文と考えられる文様が施される。203は口縁部外面に雷文、体部に鳳凰唐草文を描いている。内面は口縁部に2条の界線が施されるのみである。204は外面文様が不明であるが、濃技法で文様が描かれている。口縁部内外面に2条の界線が施されている。205は見込みの2条の界線中に十字花文が施され、外面は草花文と考えるが明確でない。高台外面に3条の界線が回る。

白磁

白磁は量的に少なく端反の皿、小杯などが出土している。206～211は、口縁部が外反する端反の皿である。白濁色釉が全面に施され、畳付には砂が溶着している。209は底部が窪む形態である。212は白濁色釉が高台外面まで施釉されるが、見込みは蛇ノ目釉ハギである。外底は露胎である。213は白濁色釉が体部下半までかかり、見込みは蛇ノ目釉ハギである。高台脇から外底にかけて露胎である。214は底部破片であるが、底径3.2cmを測り器種は小杯になると考えられる。

3　国内産陶器

瀬戸・美濃系の天目茶碗、皿、備前焼、産地不明陶器が出土している。215は口縁部のくびれが明確ではないが216・217のくびれは明確でやや形態に差が認められる。さらにこの2点は体部下半外面に化粧掛けが施されている。胎土はにぶい黄橙色で、内面と外面体部下半まで黒褐色釉が施されている。218は明黄褐色釉がかかる大振りの皿と考えられる。

219は、褐釉陶器である。口縁部は玉縁状を呈し内面に篦ナデが見られる。

220～237は備前焼である。220～224は壺で、220・221は外反する口縁部で端部はやや肥厚する。内外面ロクロナデである。222は、外反する口縁部を有し端部は玉縁状を呈する。胴部上位には、櫛描きの波状文が施される。223は壺の底部である。224は口縁部が上方に短く立ち上がり端部は肥厚する。225～229は甕である。すべて口縁部は玉縁であり、形態に若干の差が認められる。225・226は、口縁部折り返しの幅が広く外面に凹線が見られる。228はやや外反し、227・229は上方に立ち上がる。230～237は摺鉢である。口縁部の形態を見ると時期差を認めることができる。230・231は体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がり、端部は外下方に斜めに切り落としている。櫛描条線の単位は、8～9条で下から上へ施されている。時期的に古い所産である。232・233は口縁部が上方に立ち上がるもので232は内湾気味に立ち上がり、233は直立して立ち上がり外面に凹線が施される。234の口縁部は上下に拡張され内面の条線の単位は確認できない。235～237は底部破片で、櫛描条線の単位はすべて9本で下から上へ施されている。

238・239は産地不明陶器である。238は、外面ナデ調整で内面は篦ナデが施される。胎土は堅緻で外面の色調は黄灰色を呈する。239は体部に向け外傾して立ち上がり底部は、篦による雑な切り離しである。内面にロクロ痕が残る。胎土は堅緻で色調は灰色を呈し須恵質の陶器である。

4　瓦質土器

瓦質土器は、鍋・釜・火鉢類が出土している。240は体部が直線的で口縁部で水平に屈曲する。外面は摩耗しているが内面はミガキが丁寧に施されている。241は体部で大きく内湾し、口縁

部は上方に立ち上がり、端部は外方に若干折り曲げる。242は口縁部が短く外反気味に立ち上がり、口縁部内面に刷毛目、外面に指頭圧痕が見られる。243は羽釜で口縁部は短く立ち上がり鍔は水平に突出する。体部外面は篦ケズリ内面は横ナデが施される。244は火鉢で、胴部から内湾して口縁部は内傾する。端部は水平な面を有し、外面は2条の貼付突帯の間に4条単位の直違文がスタンプされる。250は、脚部が欠損しているが体部はやや外傾して直線的に立ち上がり端部は内側に肥厚する。内面横ナデ調整で、外面は丁寧なミガキが施される。

5　土製品

フイゴの羽口と土錘が出土されている。土錘は山城しては比較的多く出土している。260～283は土錘で形状は管状を呈しており、長さ4～5㎝内外、幅が1.5㎝程度の製品が多い。色調はにぶい橙色を呈するものが多い。フイゴの羽口は、二ノ段からの出土がその多くを占める。285～290は円筒形の羽口で、直径9.5～11㎝、中央の孔が2.5～3㎝を測り、胎土は粗い。口の部分に硅酸質の付着も認められる。284のみは形状が異なり、断面方形状を呈する。

6　石製品

石製品は、硯と臼が出土している。253・254は臼である。253は上臼で、半径15㎝、高さ10.6㎝、芯穴の復元径3.4㎝を測る。分画の詳細は細片のため不明であるが、溝間が広く4条以上の溝を有する。溝は丸溝である。254は茶臼の上臼で、大部分が欠損しているが、挽き手穴が側縁の中央部に認められる。挽き手穴は方形で一辺1.9㎝、高さ12.1㎝、芯穴の復元径3.2㎝を測る。溝間が密で6条以上の溝を有し丸溝である。258・259は下臼で完成品である。258は半径13.5㎝、高さ3㎝、芯穴の径3.4㎝を測る。8分画で5～6条の丸溝を有する。芯穴は方形である。259は同様な規格品でやや小型である。半径12.4㎝、高さ2.5㎝、芯穴の径2㎝を測る。8分画で5～6条の丸溝を有する。257は、茶臼の破片である。255は、硯であるが陸部が欠損している。断面長方形を呈し、側面は底部より上面にかけて垂直に立ち上がり磨き込まれる。現存部分で長さ6.5㎝、幅4.8㎝、高さ1.3㎝を測る。石質は輝緑凝灰岩と考えられる。

7　瓦類

瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、紀年銘瓦、文字瓦が詰・二の段・三の段から検出されており、そのほとんどは二ノ段3層からの出土である。

軒丸瓦

軒丸瓦は7点出土しており、文様構成から以下のⅡ類に分類した。

Ⅰ類　瓦当文様は、左巻き三ツ巴と珠文を組み合せたものである。巴の頭部は小さく、尾部は長く次の尾に接続する。

Ⅰa類（第42図、291）

三ノ段東トレンチから検出されたものである。推定径14.3cm、珠文数12個である。巴の彫りは、シャープで巴頭部は平担部をもつものである。珠文は高く、周縁は低い。周縁の内縁は、篦削りを施す。裏面は、全体に指ナデに整型を施す。色調は、淡茶灰色を呈する。

Ⅰb類（第42図、292）

二ノ段3層から検出されたものである。推定径13.6cm、珠文数12個である。文様の配置は、Ⅰa類と一致する。Ⅰa類と比較すると珠文はやや大きく半球状を呈し、丸味を帯びる。巴部は、一部粘土を補填している。瓦当部は、砂が顕著に認められ、胎土は雲母が微量に含まれる。色調は、灰褐色を呈する。

Ⅱ類　瓦当文様は、右巻三巴文と珠文を組み合わせたもので、頭部は丸味を帯びており尾部は他の尾と接しないものである。

Ⅱa類（第42図293）

詰から検出された瓦である。推定径12.9cm、珠文数30個と推定される。巴の彫りはシャープで、色調は、黒褐色を呈する。胎土は、白色粒子及び雲母を微量に含む。

Ⅱb類（第42図297）

二ノ段3層から検出されたものである。全容は不明であるがⅡb類に分類した。推定径15.6cm、珠文数30個と推定される。Ⅱa類に比較すると直径も大きい。周縁は高く、緩やかに立ち上がる。凸面は、淡灰褐色を呈し、篦削りを施す。凹面はコビキが認められる。瓦当面は、白色粒子及び雲母がみられる。

他に3片ほど軒丸瓦の破片が検出されている。すべて二ノ段3層から検出されたものである。294は瓦当面に砂粒を含むものであり、周縁部の内縁は、篦削りを施す。珠文は半球状を呈する。色調は、灰褐色を呈する。295は瓦当面に白色砂粒、雲母を含むもので周縁、珠文は低い。色調は淡灰褐色を呈する。296の瓦当面は灰褐色を呈し、周縁部、珠文は低い。周縁部内縁は、篦削りを施すものである。

軒平瓦

軒平瓦は、文様構成から以下のⅡ類に分類した。軒平瓦も二ノ段3層からの検出されたものが主体をなす。

Ⅰ類　（第42図298～303）

推定弦幅38cmを測る。文様区は浅く、彫りはシャープである。瓦当面は均整唐草文である。瓦当の中心飾りは、2葉と左右に大小の唐草を配し、下方の子葉の左右にも唐草を意識したものと考えられる文様を配している。そして、巻き込みの強いとび唐草が2反転したものが配されている。瓦当面は、ナデを施し、顎部は強いナデがみられる。凸面は、ナデ、凹面もナデを施し、瓦当面端部は篦削りを施す。色調は、灰白色を呈するもの、灰色を呈するものがある。

302・303は、Ⅰ類に分類できるものであるが瓦当面に砂粒を多く含むものである。凹面、凸面ともに多量に砂が認められる。瓦当裏面は、指頭による整形が認められる。

Ⅱ類　(第43図304)

三ノ段石垣溝覆土から検出されたものである。文様区は、浅く摩滅が認められ、脇区をもつ。破片であるため全容は不明であるが、瓦当中央に楕円形の文様を配し、唐草が外と内に向い反転しその間に珠文がみられる。凹面は瓦当面端部に篦削りを施す。瓦当裏面は、ナデを施す。色調は、淡黄色を呈し、砂粒を微量に含む。

丸瓦

丸瓦は、出土点数が多いが完形に近いものは極めて少なく、全容の知れるものは1点のみであった。丸瓦は、すべて玉縁を有するものである。

Ⅰ類　(第45図310)

全長は29.2cmを測る。凹面は布袋目とコビキが認められる。前端は6.5cmにわたり面取りがされている。玉縁部も篦で面取りされており、縄目痕も認められる。凸面は、全体に篦削りを施し、一部縄目の叩きが観察される。色調は銀色をなし、一部黒配色を呈する。

311は、凹面に布袋目とコビキが認められる。前端は、4cmにわたり面取りがされており、一部大きな縄目が観察できる。凸面は篦削りを施し、縄目の叩きを一部残す。凸面は一部銀化現象が認められる。312は、凹面に同様な製作技法が観察できるが一部棒状圧痕が認められる。凸面は一部横方向のナデが認められる。凸面には、1.6cmの釘穴がある。色調は灰褐色を呈する。

丸瓦は破片が多いため一部第46図に拓影により図示した。317は凹面に顕著にコビキが認められるもので、凸面は縦方向の篦削りを施し、銀化現象が認められる。318も同様なものであるが、布袋目がみられ、銀化現象が認められる。319もコビキがみられるもので、布袋目が認められる。色調は灰褐色を呈する。320も同様のもので、前端部に4.8cmの篦削りが認められる。色調は灰褐色を呈する。321・322も同様のものであるが銀化現象が認められる。323は釘穴が観察できるもので、凹面は布袋目が観察でき縦方向のナデがみれる。色調は淡黄色を呈する。

平瓦

平瓦は、破片が多く全長の観察できるものは少ない。全長、全幅の復元可能なものを資料化し、調整手法の違いをもとに分類した。

Ⅰ類　(第45図313・324)

全長の測れるものは、二ノ段3層から検出されている。全長27.2cm、後幅21.8cm、厚さ2cmを測る。凹面は一部砂粒が認められる。端部は、篦削りを施す。全体に横ナデ調整を行っている。凹面の最前部には水切りが認められる。凸面は、縦方向の篦削りを施し、一部銀化現象が

みられる。二次焼成を受けている。凸面は砂が顕著に認められ、ハナレ砂と考えられる。色調は黒褐色を呈し一部淡茶褐色を呈する。313もⅠ類に属するもので、凹面は、丁寧なナデを施し、最前部に水切りが認められる。凸面は全体に篦削りを施し、砂粒が認められ、ハナレ砂と考えられる。径８㎜の小石を含み、色調は淡灰褐色を呈し、一部淡黄褐色を呈する。厚さ2.2㎝を測る。側端部は、狭い範囲で篦削りを施す。

Ⅱ類　（第45図315・316）

315は、幅22.2㎝、遺存長21.5㎝、厚さ2.2㎝を測る。凹面は横方向のナデを施し、一部凸面と同様に粘土が付着している。凸面は篦削りの後一部ナデを施す。一部粘土が突出しているところがある。色調は淡赤茶褐色を呈する。316は、前幅21.2㎝、厚さ1.8㎝を測る。凹面は、横方向のナデを施し、前端部に水切りが認められる。凸面は、砂が認められハナレ砂と考えられる。縦方向の篦削りの後横方向のナデを施す。色調は黒灰褐色を基調とし、一部淡黄色の部分が認められる。

Ⅲ類　（第45図314）

ここでは一応Ⅲ類に分類した。凹部端部に凸帯を有するもので、粘土を貼付したものである。凸帯の両端は、篦ナデを施す。凸面は、砂が認められ、一部粘土が紐状をなしているのが観察できる。色調は淡黒褐色である。

平瓦も破片が多いため第46図に拓影により一部図示した。325は凹面に横方向の篦ナデを施すもので、一部縦方向のナデも認められる。凸面には、多量の砂が認められる。326は、凹面に布目及びコビキが観察できるもので、凸面は横方向の篦ナデと縦方向のナデを施す。色調は淡黄色を呈する。327は凹面にコビキが観察でき、横方向のナデを施す。凸面は縦方向の篦ナデを施し、一部粘土の剝落が認められる。色調は、黒褐色を呈し、一部淡黄色を呈す。328は凹面に細かい布目が認められるもので、一部ナデにより布目を消す。端部は篦削りを施す。色調は赤茶褐色を呈する。凸面はナデを施し黒褐色を呈する。329は凹面に布目、コビキが観察でき、横方向の篦ナデを施す。一部縄目の様なものが観察できる。凸面は縦方向の篦ナデを施す。色調は淡黄色を呈する。330は色調が淡黄色を呈し、凹面、側面に縄目が認められるもので一部ナデを施す。331は、凹面にナデを施し、色調は黒灰褐色を呈する。厚さは３㎝と他の瓦より厚い。

紀年銘瓦・文字瓦　（第44図308・309）

紀年銘瓦、文字瓦、各１点が詰と堀切から検出されている。ともに丸瓦の凸面に刻銘されているが、破片のため全容は明らかでない。

308は、天正３年（1575）の紀年銘を刻す瓦で、「おかう之御 □ ／瓦工泉刕 □ ／ □ 天正三 □ ／ □ 」と４行にわたって刻んでいる。凸面の色調は、灰褐色を呈し、細砂粒が認められる。凹面は、淡黄色を呈し、端部には篦削りが認められる。布目には、

棒状圧痕が認められる。

309は、「批瓦 □ ／新岡(カ) □ ／于時 □ ／於乃 □ ／ □ 」と刻されている。破片であるため明確ではないが５行にわたり刻まれていると考えられる。凸面は丁寧な篦削りを施し、色調は灰褐色を呈する。凹面はコビキが認められ、布目には、縄目痕が観察できる。

その他の瓦　（第43図305～307）

306は、色調が淡灰色をなし、砂が観察できるもので、凹部はナデを施す。厚さ1.8cmを測る。305は径8.5cmを測る瓦で、胎土は、雲母が混入するもので凹部はナデを施し、凸部は篦ナデを施す。頂部は欠損しているが、金属製品が先端につくものと考えられる。棰先瓦に使用されたものとも考えられる。307は、飾りをつけた瓦で、透かしの梅文と考えられるものと帯状の凸帯がつくものである。用途は不明である。

8　金属製品　（第47・48図）

鉄製品は、火箸、釘、環、鏃、小柄、鍋などがあり、特に二ノ段から多く検出されている。

火箸

332・333は、火箸と考えられるもので二ノ段から多く検出されている。332は全長22.1cm、厚さ0.8cmを測る。333は全長19.3cm、厚さ0.6cmを測る。

釘

釘は、鋭角で頭部が折れる折頭釘と称されるものが主体をなす。各釘の計測値は、337が全長12.1cm、厚さ0.9cm、頭部幅2.5cm、338が全長9.2cm、厚さ0.6cm、339が全長9.8cm、厚さ0.6cmを測る。340は全長6.4cm、厚さ0.4cm、341は全長8.1cm、厚さ0.4cm、342は全長6.7cm、厚さ0.6cm、344は全長7.0cm、厚さ0.6cmを測る。347は、折り曲げた釘か、打つ時に折り曲げられたものと考えられる釘で、全長2.2cm、厚さ0.5cmを測る。

環

336は、茶釜の環と考えられるもので、最大長６cm、厚さ５mm測る。

鏃

349は、鏃と考えられるもので、二ノ段から２点検出されている。全長5.8cm、幅１cmを測る。もう１点は、図示できなかったが全長8.7cm、厚さ1.3cmを測る。

小柄

351は、小柄で全長19.5cm、幅1.3cm、重さ42.9ｇを測るもので、三ノ段から検出されたものである。刃部は、10.7cm、柄の部分は青銅張りで長さ8.8cmで端部に0.6cmの小孔がある。

鍋

352は、鍋の口縁部である。353は、鍋の足と考えられる。

その他

347は、鍵と考えられるもので、全長2.5cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。334は、棒状の製品で、端部が環状をなすものである。335も環状を呈するものである。

青銅製品

349は、断面の薄いもので、棒状のものであるが用途不明である。

9　宗教具

詰の東部、石列裾部より室町時代の様式をもつ金銅仏（353）が検出されている。この金銅仏は懸仏としての機能をもつもので観音座像と考えられる。像総高は、9.5cm、像高8.4cm、台座の幅5.1cm、面幅1.7cm、像の出（鼻）1.6cmを測る。台座とともに半肉鋳造で、左肩を屈し、胸前に上げ、右手は膝上において蓮台に座す。台座に4ヶ所、宝冠部に4ヶ所穿孔が見られる。

近年、各地の城跡の発掘調査により、城で用いられた宗教具の報告が多くなってきているが、ほとんど注意がはらわれていないのが現状のように思われる。岡豊城跡で検出された懸仏については、「特集・1988年の考古学界の動向」(1)で述べたことがある。この懸仏は、本地仏と考えられ、詰に懸仏を祭った施設が想定される。さらに、長宗我部氏の尊崇があつかった岡豊の別宮八幡宮との関係が考慮されるものである。戦国期の山城内における信仰の実態を物語る貴重な資料である。

高知県高岡郡椙原町の和田城跡では、小さな建物に瓦を葺いたと考えられる施設が確認されている。これを調査担当者は、城八幡ではないかと推定しており、(2)城八幡の成立を考えるうえで興味深い資料といえる。戦国期の実相が明らかにされつつある今日、戦国期に生きた武士たちがどの様な信仰を持っていたかを明らかにすることも「戦国考古学」の課題の一つである。

10　古　銭

渡来銭

岡豊城跡の第1～5次調査により詰、二ノ段、三ノ段より検出された古銭は、29種128枚で、詰106枚、二ノ段19枚、三ノ段6枚である。特に詰pit 1からは、土師質土器に納められた91枚の渡来銭が検出されている。

詰（第49～52図・354～461）

詰から検出された渡来銭は、27種でpit 191枚のうち不明銭5枚、遺構外からは14枚、計105枚が検出されている。遺構外から検出された渡来銭は、北宋の天聖元寶・皇宋通寶・治平元寶・元豊通寶・元祐通寶・紹聖元寶・元符通寶が各1枚、政和通寶2枚、明の洪武通寶1枚、永楽通寶3枚、不明銭1枚が検出されている。

pit 1からは杯12個に納められていた91枚が検出されている。渡来銭は、唐の開元通寶1枚、

北宋の咸平元實３枚・景徳元實１枚・祥符元實５枚・祥符通實１枚・天禧通實３枚・天聖元實２枚・明道元實１枚・皇宋通實１枚・至和元實１枚・至和通實１枚・嘉祐通實２枚・治平元實１枚・熙寧元實７枚・元豊通實７枚・元祐通實10枚・紹聖元實１枚・元符通實１枚・聖宋元實２枚・大観通實２枚・政和通實２枚・宣和通實１枚、南宋の嘉熙通實１枚・景定元實１枚、明の洪武通實８枚・永楽通實13枚・宣徳通實１枚、不明銭５枚が検出されている。永楽通實には初鋳のものと後鋳のものがみられる。

二ノ段（第53・54図462～475）

二ノ段からは８種９枚の渡来銭が検出されている。銭種は、北宋の祥符元實、天聖元實、景祐元實、熙寧元實、元祐通實、政和通實、南宋の淳熙元實、明の洪武通實が各１枚である。他に被熱を受け密着したもの５枚が検出されている。

三ノ段（第54図476～481）

三ノ段からは、４種５枚の渡来銭が検出されている。銭種は、北宋の皇宋通實１枚・熙寧元實１枚・元豊通實２枚・明銭の洪武通實１枚である。

無名銭

詰から１枚（459）、二ノ段から５枚（471～475）、三ノ段から１枚（481）が検出されている。

近代・現代の銭

詰より２枚検出されている。109は一銭で大正８年（1919）、108は昭和23年（1948）の５円である。ともに城八幡に奉納されたものと推定しておきたい。

註

(1) 岡本桂典「1988年の動向-中近世（西日本）」『考古学ジャーナル』305　1989

(2) 椿原町教育委員会『和田城跡調査現地説明会資料』　1988

Ⅵ 総 括

1 遺構について

岡豊城跡の第１～５次調査によって検出された遺構は、詰、詰下段、三ノ段西部を中心として、礎石建物、石敷遺構、土壙、溝、土塁石垣、階段状遺構、ピット等であり、岡豊城跡の主郭部の構造を知る上で貴重な資料を得ることができた。

詰で検出されたＳＢ１は、ＳＸ１及びＳＢ２と関連をもつ４×５間の建物であり、岡豊城跡の中では最大規模の礎石建物と考えられる。石敷遺構のＳＸ１は、ＳＢ１と接続しているところから建造物の基礎として構築されたものと考えられ、ＳＢ２の存在、さらにはＳＢ１との間をつなぐ構造物の存在を考えるならば、ＳＸ１を基礎とする強固な外壁をもつ一連の建造物の姿を想定することができる。位置的には詰の南西部の最も広い場所に存在しており、眺望も最もよく、櫓としての機能も有する中心的な建造物であり、天守の前身的な性格をもっていたのではないかと考えられる。また、ＳＢ２とＳＸ１西端部及び土塁上の切石は、この建造物に関する出入口的機能を有すると考えられ、土塁にも接続していたと推定される。内部構造については不明であるが、ＳＢ１内にも礎石を伴っており、石敷遺構の存在からみても二層以上の構造をもつ建造物と考えもよいのではないだろうか。

一連の建造物の方向は、真北に対しほぼ東西方向を示しており、これは基盤である岩盤の端部にそっており、建造物の基礎を強化するものと考えられ、同時に地形だけではなく方位も考慮していると思われる。また、詰の南西部及び東部の岩盤が低く落ち込んでいる部分には版築状の盛土が行われており、詰の有効面積を拡張し、その構造を強化するために計画的な補強がなされている。時期的には、二ノ段、三ノ段にもみられる焼土及び炭化物層の上にＳＸ１が構築されているところから、国親による再興以降と考えられ、元親による大高坂城移転時の最終段階を示しているのではないだろうか。

詰では他に土壙と溝が検出されている。ＳＫ１は詰のほぼ中央部に位置しており、岩盤を深く掘り込んでいるところから天水溜めとして機能していたのではないかと推定される。埋土中には多量の土師質土器を含んでおり、中央部には直径１ｍ以上の岩盤礫が入れられている。移動時に埋められたものと考えられる。溝は、北部と東部において検出されているが、小規模であり、岩盤の端部に掘られているところから排水用の溝として機能していたものであろう。時期的には東部の溝から手づくねの土師質土器が出土していることからみれば、他の遺構に比べやや古く考えてもよいのではないだろうか。また、周辺には礎石とみられる割石も存在しており、何らかの建物に関連する可能性もあるが現段階では不明と言わざるを得ない。

詰下段のＳＢ３は２×５間の礎石建物であり、詰下段全体を占めている。規模が大きく、土塁及び詰側の段状遺構にそっているところから、土塁、堀切と一体となって詰東部における防禦的機能をもち、かつ城詰における居館の一部としても使用されていたのではないだろうか。

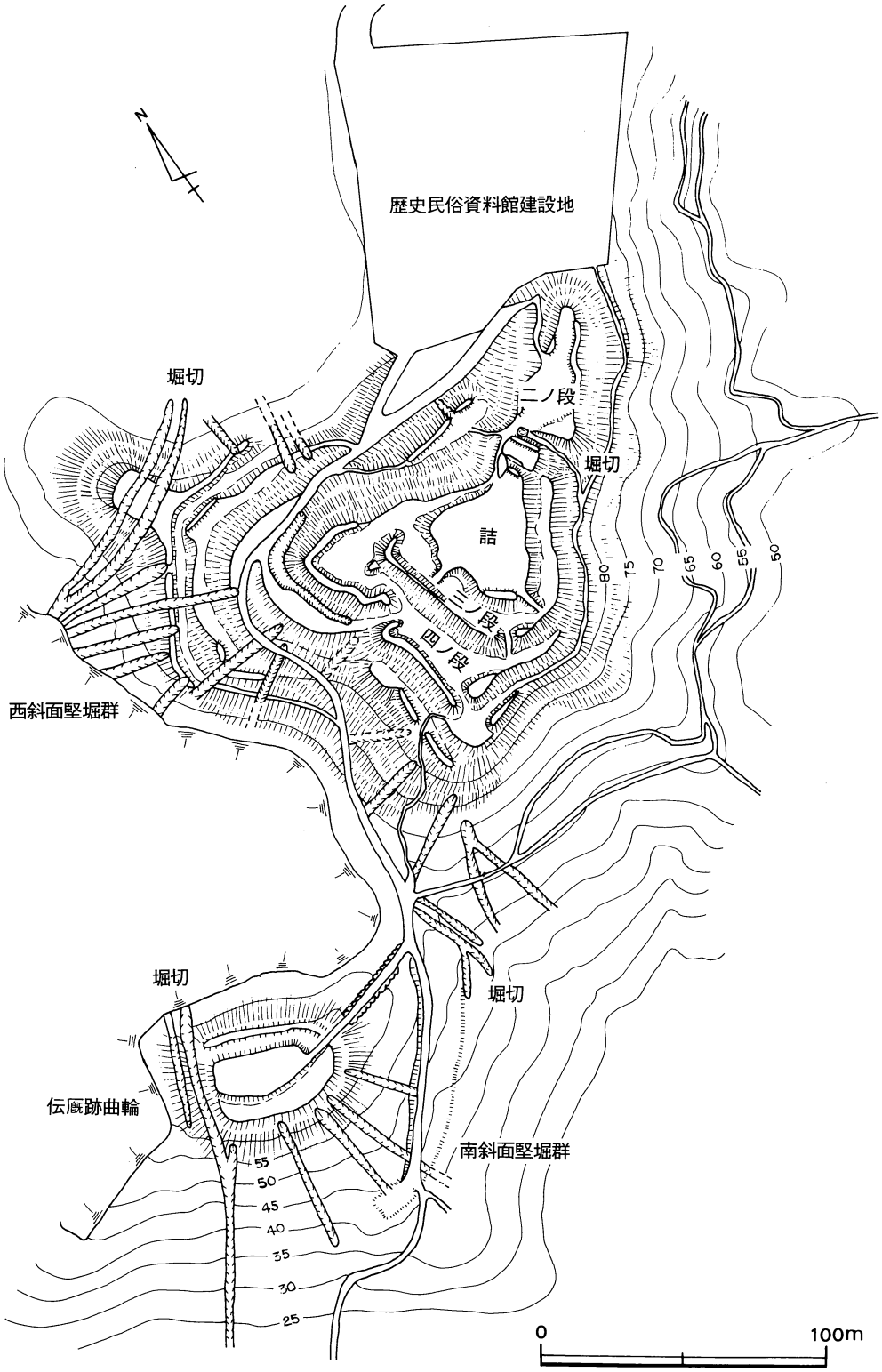
礎石は一部欠落もあるが、半間の柱間の礎石がみられ、やはり強固な構造をもっていたと推定される。詰側の段状地形はＳＢ３への通路ではないかと考えられ、さらに詰下段と三ノ段をつなぐ通路とみられる階段状地形へも通じ、詰から詰下段、三ノ段への通路が存在していたのではないだろうか。ＳＢ３の北に接しては周囲に礎石を伴う土壙、ＳＫ２が存在しており、壁面の赤化、埋土中の焼土、炭化物がみられ、ＳＢ３に付属する火の使用に関係した施設の存在が考えられる。

以上の如き詰及び詰下段における建造物の検出は、中世山城の中心部の構造を示すものとして注目されるものである。ちなみに県内の他の中世城跡の調査例では、波川城跡(1)、久礼城跡(2)の例がある。詰にも礎石建物がみられるが、城跡の規模同様に小さい。また、一条氏支配下の居城であった中村城跡(3)の調査でも詰における良好な礎石建物は検出されていない。その点で戦国時代末期の城跡の構造を知る上で貴重な資料と言えるのではないだろうか。

二ノ段、三ノ段南部については、調査面積も少なく、遺構もほとんど検出されていないので不明な点が多い。ただセクションにみられる焼土、炭化物の層は注目され、永正５～６（1508～1509）年、19代兼序の代における落城に関連するものと考えられ、併せて二ノ段、三ノ段にこれらが存在するのは、永正13（1516）年前後の20代国親再興時における整地のためと考えてよかろう。また、三ノ段南部にみられる多量の割石が詰斜面に築かれた石積みの崩壊を示すものとすれば、中村城跡において検出された石垣(4)に類するものとしなければならない。さらに詰、詰下段の土塁では、根石とみられる石列が検出されており、特に詰下段における土塁では多量の割石が崩壊したかのような状態で出土していることから、土塁の基部には数段の石積みが存在していたのではないかと推測され、三ノ段出土の割石とともに、野面積みの石垣が存在した可能性が非常に強い。

三ノ段西部において検出されたＳＢ４は９×３～４間の最大の建物であり、三ノ段西部の北半全体を占めている。礎石は非常に大きく、半間間隔であり、礎石間の列石があるところからやはり強固な基礎をもつ建物と考えられるが、三ノ段からの瓦の出土はほとんどみられなかった。しかし、岡豊城から大高坂城への移転に伴い建物を解体移築しているならば瓦も搬出していると考えられ、規模からみても土壁等の構造をもつ建物であったのではないだろうか。また、北半部が４×４間、南半部が５×３間に分かれており、同じ棟ではあるが礎石間の列石の有無等からも構造の違いが考えられ、建物の機能としても分離していたものとみられる。さらに、ＳＢ４が三ノ段北の入口を鎖すように位置しており、土塁との間には南への通路もなく、南面は詰からの段段による通路に接していることから、詰の建物と有機的なつながりをもつと考えられる。また、ＳＢ４の検出状況からは、礎石、溝等が黄褐色粘質土に覆われていたことからみれば、ＳＢ４を解体した後に整地したものと考えられ、大高坂城への移転後の状態として促えることができるのではないだろうか。

三ノ段西部では北半部に建物跡が位置しており、四ノ段北部から三ノ段への北からの通路は



第29図　岡豊城跡縄張図（S＝1/2.400）

考えられず、南入口からの通路を通り、中央部の階段を経て詰へ入るルートが主要な通路として使われていたものと考えられる。

堀切は調査の結果として、当初は北部まで岩盤をＶ字形に掘り込み、詰と二ノ段を隔絶していたことが判明した。そして木橋を使用して両者を連結していたと考えられる。しかし、埋土中の大形の割石の存在からして、ある段階以後は堀切の北部が埋め戻されて土橋に変化していったと考えられる。また井戸の位置は堀切の中央部であり、通常の場合、堀切中における井戸の存在は考え難いことから、井戸の時期を知る手掛りがないので断定できないが、北部に土橋が構築された時点で堀切を必要とせず、そのために井戸が掘られたのではないだろうか。そしてこの時期は、岡豊城跡が周囲からの攻撃を受けなくなる時期、すなわち土佐一国を統一した段階でのかなり大規模な改修が行われたものと考えてはどうであろうか。

堀切及び南斜面の岩盤整形面については、後世の所産と考えられる要素が多く、当時の姿は不明と言わざるを得ないが、南斜面が急傾斜をもつところから、その自然地形を城跡の中へ取り入れているものとみられる。

以上、各遺構についてまとめてみたが、全体的にみれば基本的に詰を中心とする各曲輪は、岡豊山の地形を基に形成されており、県内にみられる他の中世城跡と同一線上に位置している。地形の制約を受けた基本的な構造からみれば、岡豊城跡はその築城時期は不明であるが、古くより長宗我部氏の居城として存在していたものと考えられる。しかしながら、虎口の守りとなる四ノ段北部の曲輪や南西部曲輪等は新しい形態とみられ、さらに詰、詰下段、三ノ段西部に存在する大規模かつ恒久的な建物群、土塁内側に積まれた石垣等を考えれば、明らかに従来の中世山城の構造を凌駕しており、織豊系大名により造営された城に類似する点がある。この点からみれば、今回の一連の調査で明らかになった岡豊城跡の姿は、長宗我部氏が織豊系大名との接触をもち、戦国大名から近世的大名への変化としての現われとして促えることができる。このことは中世的な城としての防御機能だけではなく、城を領国統治の中心として機能させることを意識していた結果であろう。これを裏付けるものとして、地検帳によれば岡豊城跡の東に岡豊新町として市町を形成しており、岡豊城とその城下町を形成する意図をみることができる。さらには、大高坂城への移転についても、岡豊城では十分に押し進めることができなかった城下町を成立させることを目的とし、また浦戸湾を通じての海上交通への必要性をあげることができる。

岡豊城跡の調査結果としては、中世山城から近世城郭への変化を知ることができ、長宗我部氏が土佐一国の統一から四国征覇をなしとげ、織豊体制へと組み込まれれる中で城に対する新しい認識をもつに至ったと考えられる。ここに織豊系大名の居城としての変遷と、その影響を受けた姿をみることができるのではないだろうか。

2　遺物について

岡豊城跡の出土遺物の様相は、土佐国における中世後期の山城で使用された焼物の一般的な組成を如実に示している。出土遺物の90％以上を土師質土器が占めており、次に国産陶器の備前焼、輸入陶磁器、瓦質土器となる。中世後期でも15世紀後半と16世紀後半では基本的に組成は変わらないが輸入陶磁器の中での変化がみられるのみである。15～16世紀初頭に機能したとされる春野町に所在する芳原城跡では、輸入陶磁器425片のなかで青磁が多く、次いで白磁・染付が出土している。岡豊城跡を中心とした16世紀の山城では染付が多く青磁・白磁と逆転する。しかしこの現像は、有力戦国大名を初めとする長宗我部氏の居城である岡豊城跡、一条氏が支配したとする中村城跡でみられるのである。ここでは、土師質土器の分類を中心に輸入陶磁器も含めて検討し、城跡が主に機能した時期を抽出することにする。

土師質土器に付いては、第１～３次調査の概報(5)で若干述べた所であるが基本的には変わる所はなく、概報分類に従うことにする。

小皿は出土点数が非常に少ないが、口径7.2cm、器高1.7cm以下であり、ロクロ成形の製品である。体部の形態の差で小皿Ａ（２）、小皿Ｂ（１・３・４）に分類している。小皿Ａは１点のみで、その他は小皿Ｂである。

皿は手づくねによる成形を皿Ａ（９～41）、ロクロ成形のものを皿Ｂ（42～61）とした。皿Ａ・Ｂ共に小振りのものから大振りのものが存在し、口径の差及び口縁部の形態で細分類できる可能性がある。

小杯は、概報において分類は試みなかったが、若干形態の差が認められるので、小杯Ａ・小杯Ｂに分類した。杯Ａを小型化したタイプで内面にロクロ痕が残らず口径と底径の差がさほど認められないものを小杯Ａ（81・84・85）、杯Ｂを小型化したタイプを小杯Ｂ（62～80・82・83）とする。

杯はすべてロクロ成形である。やや小振りの杯で口径9.5～10.5cmを測り、器高が３cm内外で内面にロクロ痕が残らないものを杯Ａ（86～113）とする。口径11～13cm、器高3.5～4.5cmを測り、内面に明瞭なロクロ痕が残る製品を杯Ｂ（116～140）とする。杯は大きくこの杯Ａと杯Ｂに分類できるが、その特徴として口径と底径の差が明瞭に開く点が指摘できる。以下、土師質土器を器種ごとに若干の考察をしていくことにする。

小皿は他の城跡でも出土しているが点数はさほど多くない。田村遺跡群のLoc 42のＳＫ96・Loc 43のＳＤ１(6)、芳原城跡(7)、中村城跡(8)、栗本城跡(9)から出土している。Loc 42のＳＫ96出土の小皿は、手づくねが主流を占め若干ではあるがロクロ成形のものも存在する。ロクロ成形のものは、小皿Ｂの１に酷似している。Loc 43のＳＤ１では、手づくねの製品のみである。芳原城跡では、小皿Ｂのタイプが出土しており手づくねの製品は極端に少ない。田村遺跡群のLoc 43のＳＤ１では、大永年間（1521～1527）の紀年銘を有する護符と共伴しており16世紀前半におさえることができる。芳原城跡出土のものは、明確な遺構に伴うものでないが

明応２年（1493）の紀年銘をもつ護符と同一土層から出土しており15世紀末の年代を与えることができる。以上のことから15世紀後半頃までロクロ製品が主流を占め、その後手づくねの製品が除々に出現し始める。岡豊城跡から多量の土師質土器が出土しているにもかかわらず小皿の占める割合とその中で手づくねの製品が少ない点は、城跡の機能した時期に関係すると考えられる。

皿は手づくねとロクロの製品が混在しているがやや手づくねが多い。高知県内で中世後期の遺跡からは頻繁に手づくねの皿が出土するが、その初現は香我美町所在の十万遺跡⑽ＳＫ11出土の土器にみられる。ＳＫ11は共伴している青磁から14世紀とされており、県内ではほぼこの時期から手づくねの皿が認められる。現時点で15世紀後半の時期と考えている田村遺跡群のLoc 42の ＳＫ96・ＳＤ２の資料では皿がすべて手づくねの製品で、明応２年の護符が出土した芳原城跡では除々にロクロ製品が出現してくる。以前筆者がロクロ製品の皿の出現を16世紀前後として促え、県内では土器生産のひとつの画期と考えたことがある⑾。このことについては土器編年の再考と共に議論されなければならないが、本城跡では確実に手づくね製品が減少しロクロ製品が増加している。さらに手づくねの皿の法量が減少している特徴がある。

杯は小杯と共に大きくＡ・Ｂ類に分類した。杯Ａは、杯Ｂに比較して小振りで内面のロクロ痕の有無の違いがある。さらに口縁径と底部径の比率に差が認められ、杯Ｂになると口径が開き底径が狭くなる特徴がみられる。他の遺跡でもこの点で時期的な差が認められ、15世紀前半の十万遺跡ＳＤ１の杯では底径が６～７㎝を測るのに対して、田村遺跡群Loc 42のＳＫ96では５㎝前後である。以上の点から考えてみても杯Ａ・Ｂには時期差を認めざるをえない。本城跡出土の杯・皿の構成比をみると杯がその多くを占めている。十万遺跡のＳＤ１出土の資料では皿が61.5％・杯が38.5％とほぼ皿が占めている。芳原城跡では、皿2.5％・杯97.5％と逆転している⑿。この現象は、供膳形態に認められる食生活様式の変化が現れているものと考えられる。時期的に新しくなるにつれて皿が減少してきている。13世紀から14世紀初頭にかけて土師器埦が瓦器・木器・さらに輸入陶磁器の碗に淘汰され消滅していくと同様に、皿も輸入陶磁器の皿に淘汰されていった可能性がある。輸入陶磁器をみると碗・皿は出土しているが杯の形態をしたものは出土していないことも重要な視点と考える。

輸入陶磁器は、青磁・白磁・染付が出土しており、中でも染付の量が目につく。青磁碗では上田編年⒀の龍泉窯系Ｅ類・Ｂ４類が中心に出土しており、皿では菊皿・稜花皿が若干存在するが染付皿に主流は移行している。染付は皿・碗・小杯が出土しているが、皿がその多くを占めている。小野編年⒁の染付皿Ｂ１群・Ｂ２群・Ｅ群・Ｆ群が出土している。碗は端反碗の染付碗Ｂ群が若干出土している他は、細片で明確ではないが染付碗Ｅ・Ｆ・Ｄ群が出土している。白磁は、端反の皿が主流である。以上、輸入陶磁器に関しては一部15世紀後半のものも存在するがその多くは16世紀を中心としたもので16世紀後半の遺物も含まれる。

国内産陶器は、底部が欠損しているため明確に言及できないが大窯第３型式から第４型式⒂

の時期と考えられる瀬戸・美濃系の天目茶碗・皿、備前の編年⑯でⅣ期からⅤ期にかけての壺・甕・擂鉢がその多くを占め、２点ほどⅢ期の製品が存在する。以上、土師質土器を中心に輸入陶磁器も含め若干の検討をしてきたが、出土土器から城跡の機能した時期を考えていくことにする。層位的につかめたものではなく包含層の遺物という制約があるが、あえてその時期を出すとすれば16世紀後半に移行した時期を考えることができる。しかし、土師質土器の杯Ａ・Ｂ、輸入陶磁器の出土からみても前半代さらに15世紀後半までさかのぼる遺物が存在する。これらのことを考えると、岡豊城主19代兼序の代に本城跡は完全に機能しており、その盛行をみるには国親から元親へ変わる16世紀半ばにかけてと考えられる。城跡の下限を大高坂移城の1588年をあてることを考えなければならないことから、兼序の時期永正５～６(1508～1509)年に落城した時期⑰も含めて、およそ100年間にわたり本城跡は存続したものと考えられる。

瓦

岡豊城跡からは、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・紀年銘瓦・文字瓦・方形飾瓦などが検出されている。瓦類は、詰・二ノ段・三ノ段から出土しており、特に二ノ段３層からの出土が多い。

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦については、平成２年度も調査が実施されることになっているので、それらの出土遺物の報告をまって別稿で他の中世城跡の出土瓦と比較検討し論じたい。

ここでは、今回の調査で検出された紀年銘瓦・文字瓦をめぐる問題について先学の論功を基にまとめることとしたい。⑱

岡豊城跡から検出された紀年銘瓦は、天正３年（1575)の年号を刻する丸瓦で凸面に「おかう之御 □ ／瓦工泉刕 □ ／ □ 天正三年 □ ／ □ 」と４行にわたり刻されている。この瓦は、詰の切石遺構の北から検出された瓦で、詰の付櫓に用いられたものと推定される。なお、天正３年は、長宗我部元親が土佐を平定した年でもある。銘文の「おこう之御 □ 」は、「おこう之御瓦 □ 」と続くものと推定され、２行目の「瓦工泉刕 □ 」は、大坂泉州の瓦工人の名を刻したものと考えられる。そして３行目には、瓦を製作した年月日が刻されたものである。かかる銘文より岡豊城跡の瓦の一部は、現在の大阪で生産されたことが推測されるのである。

もう１点の瓦は、「此瓦 □ ／新岡(カ)／于時 □ ／於乃 □ ／ □ 」と刻されたもので、これにも年号が刻されていたことが考えられるが、破片のため残念ながら不明である。

さて、土佐の中世の紀年銘を刻する瓦は、この岡豊城跡以外にも４点ほど知られている。この岡豊城跡の出土の紀年銘の次に古いものには、天正16年（1588）のものがあるが、現在はその所在は不明である。しかし、この瓦は『皆山集』二巻⑲（松野尾章行（1836～1903）編著）に「土州吸江庵待月之棟甎也／天正十六年五月十日作之／大工者四天王寺之住藤□朝□広源衛門作之也／奉行者介良より出慶保／池冷乃無三伏夏／松高風有一声秋／悪質に候へ共皆々御大

儀ニ仍如此候／吸江之沙弥祖元書之也」とある。

次に『南路志－闔國之部－』下巻⑳文化十年刊に現高知市浦戸町の受法寺の瓦についての記述がある。これには、「真宗寺跡　道場谷　一向宗淋瑞／本尊阿弥陀　真宗寺者秦氏之時ハ受法寺ト云　真宗寺ハ本山より送り号也　寺地免許／古瓦銘泉州堺瓦工中山越後大椽文禄二年（1593）八月」とある。この瓦も現在所在が不明である。

さらにこの受法寺には、現在２点の紀年銘を有する瓦が残っている。この２点の瓦は、鬼瓦で側面に「文禄四年（1595）霜月吉日舟治吾左右衛門」「泉州大島郡深井郷嶋村」とある㉑。以上のように、土佐には４点の中世の紀年銘を有する瓦がある。かかる銘文より土佐の瓦は、大坂泉州の瓦工によるものが多く、土佐では瓦の生産はこの時期ほとんど行われていなかった事が推測される。しかし、天正16年（1588）に作成された『長宗我部地検帳』には、現在の岡豊城跡北麓に瓦工がいたことがみえており、一部土佐でも瓦生産が行われていたことが窺える。

また、慶長６年（1601）の大高坂城の築造時には、大坂から舟で瓦を購入し、さらに瓦工人も呼んでいる㉓。かかる状況より中世における土佐の瓦は、大坂よりの瓦の移入に依存していたことが推測されるが、一部に大坂からの瓦工人が移住し生産を行っていたことが考えられる。

本来なら瓦の製作技法など多くの問題を取り上げて論じなければならない問題であるが、別の機会に稿を改めたい。

出土銭

岡豊城跡からは、二ノ段から８種９枚、三ノ段から４種５枚、詰から27種105枚の出土銭が検出されている。

二ノ段では、中国北宋の祥符元寶から明の洪武通寶（初鋳年代、1368）までの渡来銭が出土している。三ノ段から北宋の皇宋通寶から明の洪武通寶までの渡来銭が出土している。詰の遺構外からは北宋の天聖元寶から明の永楽通寶（初鋳年代、1408年）が出土している。

特に詰のＰ１からは12枚の杯に納められた出土銭が検出されている。銭種は、唐の開元通寶から明の宣徳通寶（初鋳年代、1426～33）までである。各杯に納められた銭の数は、10、４、６、７、13、８、６、４、４、３、13、13枚とばらつきがある。そして、これらに納められた銭には、無文銭が伴っていない。このことは、祭祀に用いる銭埋納にあたり、良好な銭のみを選別していたことが考えられる。

岡豊城跡で検出された出土銭で注意されるのは、無文銭が含まれていることである。この銭貨の出土が確認されているのは、高知県内では現在岡豊城跡のみである。

無文銭は、北海道志海苔遺跡、青森県根城跡、同県浪岡城跡、宮崎県五ヶ瀬町三ヶ所遺跡などから出土しており、京畿より遠隔地で多く認められる。うちひらめと考えられる無文銭は、是光吉基氏㉔が指摘されているように善銭と同様の価値をもって流通していたと考えられる。

註

(1) 岡本健児「波川城跡の発掘」『土佐史談』137号　1974

(2) 中土佐町教育委員会『久礼城跡』　1984

(3) 松田直則ほか『中村城跡』中村市教育委員会 1985

(4) 註(3)に同じ

(5) 森田尚宏・松田直則『岡豊城跡発掘調査概報』高知県教育委員会　1989

(6) 松田直則・下村公彦「中～近世小結」『田村遺跡群』第10分冊　高知県教育委員会　1986

(7) 宅間一之・出原恵三『芳原城跡発掘調査報告書』高知県教育委員会　1984

(8) 註(3)に同じ

(9) 宅間一之・木村剛朗『栗本城跡』中村市教育委員会　1985

(10) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会　1988

(11) 松田直則「高知県における中世土器の様相」『中世土器の基礎研究』Ⅲ
日本中世土器研究会　1987

(12) 十万遺跡・芳原城跡の出土遺物により出原恵三氏がデーターを集積し分析している。

(13) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No 2　日本貿易陶磁研究会　1982

(14) 小野正敏「15～16世紀の染付碗皿の分類と時代」『貿易陶磁研究』No 2　日本貿易陶磁研究会 1982

(15) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ
瀬戸市歴史民俗資料館　1986

(16) 間壁忠彦・葭子「備前焼研究ノート(1)～(3)」『倉敷考古館研究集報』1・2・5　倉敷考古館 1966・1967

(17) 山本大『高知県の歴史』山川出版社　1972

(18) 岡本健児「元親の城と瓦生産」『長宗我部元親のすべて』　1989

(19) 岡本健児編「寺院跡と古瓦―吸江磨甎堂敷瓦」『高知県史考古資料編』　1973

(20) 武藤致和編「南路志―闔國之部」下巻　文化十年　1960年12月活字本

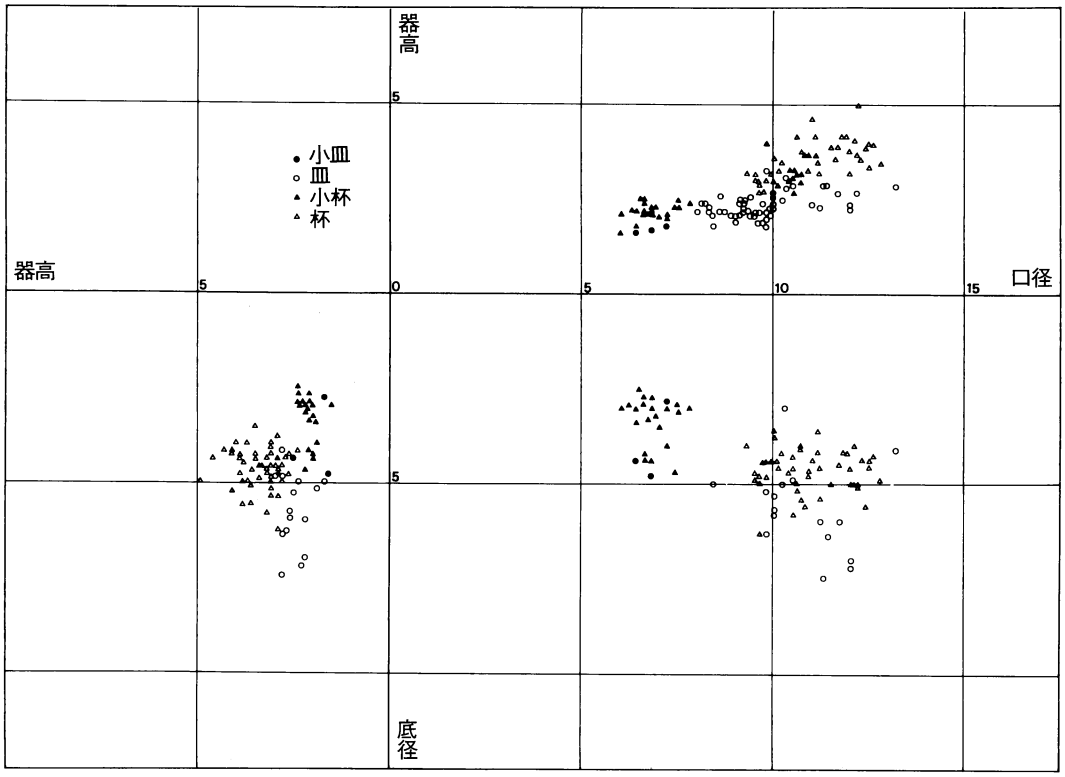
(21) 註(18)に同じ

(22) 「江村郷御地検帳」『長宗我部地検帳―長岡郡下―』1959年　高知

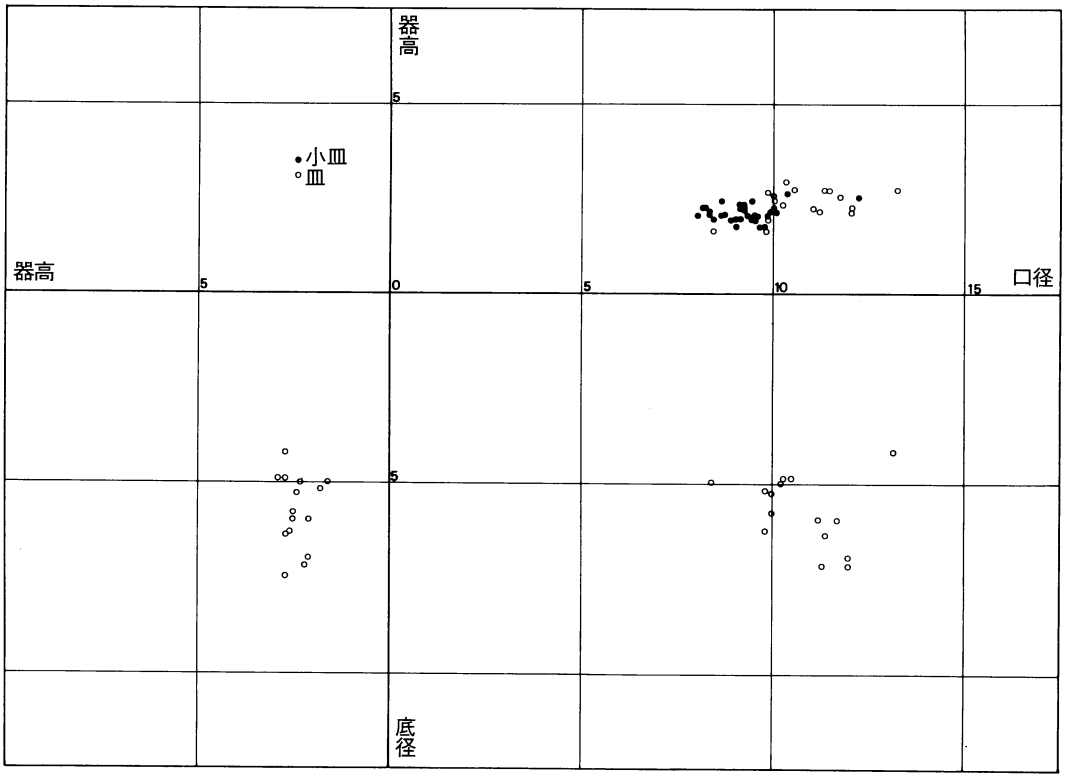
(23) 『山内家史料　第一代　一豊公紀(全)　自天文十四年至慶長十年』　1980

(24) 是光吉基　「出土銭からみた撰銭令」『季刊考古学』26　1989

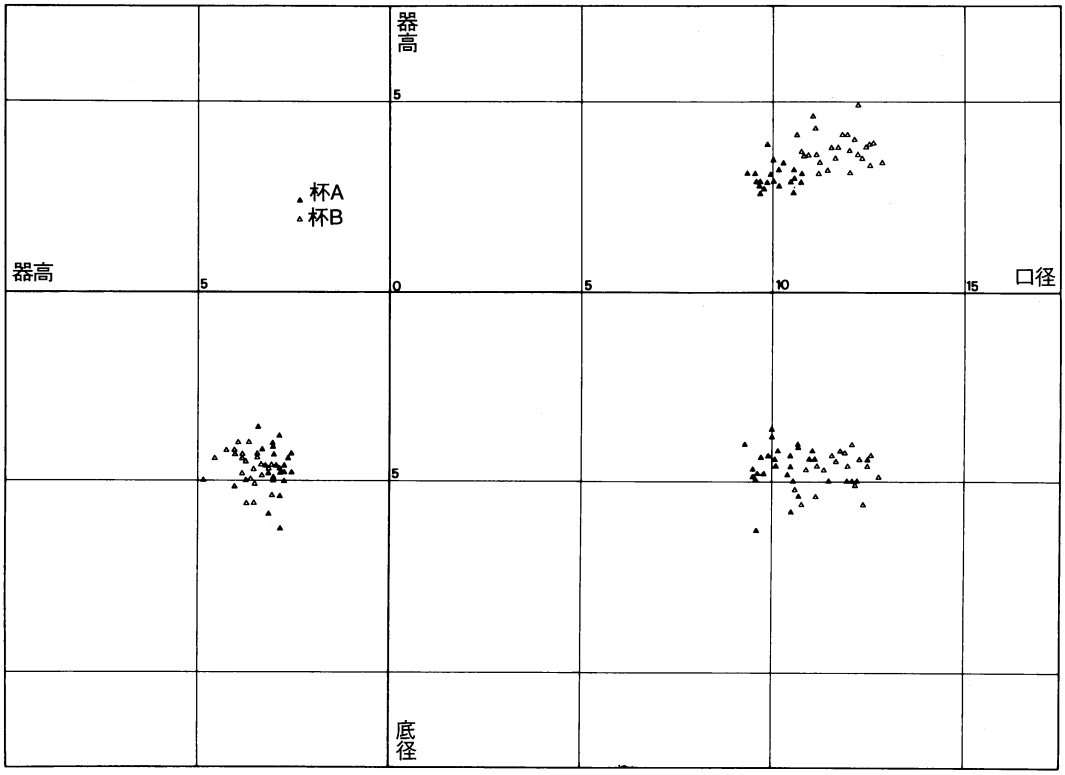
第２表　土師質土器法量表



第３表　土師質土器皿法量表



第4表　土師質土器杯法量表



第5表　出土土器法量表1

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次出土地区
1	土師質土器	小皿	6.4	1.5	4.4	——	浅黄橙色・10YR 8/3	〃	3次詰
2	〃	〃	(7.2)	1.7	(2.8)	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	1次詰
3	〃	〃	7.2	1.4	4.0	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	5次三ノ段
4	〃	〃	(6.8)	1.6	(4.8)	——	にぶい橙色・5YR 6/4	〃	〃
5	〃	皿	(8.3)	2.2	——	——	浅黄橙色・7.5YR 8/4	〃	4次二ノ段
6	〃	〃	(8.4)	2.0	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
7	〃	〃	(9.4)	2.0	——	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	1次二ノ段
8	〃	耳皿	(10.1)	3.6	3.7	——	淡黄色・2.5Y 8/3	〃	3次三ノ段
9	〃	皿	(8.1)	(2.3)	——	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	1次詰
10	〃	〃	(8.7)	2.1	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	4次二ノ段
11	〃	〃	(8.3)	2.1	——	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	〃
12	〃	〃	(8.0)	2.1	——	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	5次三ノ段
13	〃	〃	(9.2)	2.3	——	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	4次二ノ段
14	〃	〃	10.0	2.2	——	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	〃
15	〃	〃	8.9	2.0	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
16	〃	〃	9.2	2.4	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	3次詰
17	〃	〃	8.2	2.3	——	——	浅黄橙色・7.5YR 8/4	〃	4次二ノ段
18	〃	〃	9.1	2.0	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
19	〃	〃	9.7	1.8	——	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	〃
20	〃	〃	(9.9)	2.2	——	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	〃

第５表　出土土器法量表２

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次出土地区
21	土師質土器	皿	9.6	(1.8)	——	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	４次二ノ段
22	〃	〃	(9.0)	1.8	——	——	にぶい橙色・5YR 7/4		〃
23	〃	〃	(9.0)	2.0	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4		〃
24	〃	〃	(9.0)	2.0	——	——	浅黄橙色・7.5YR 8/4		５次三ノ段
25	〃	〃	(9.1)	2.1	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
26	〃	〃	9.8	2.1	——	——	橙色・7.5YR 7/6		〃
27	〃	〃	8.6	2.5	——	——	橙色・7.5YR 7/6	灰褐色・7.5YR4/2	〃
28	〃	〃	9.2	2.2	——	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	〃
29	〃	〃	(10.0)	2.3	——	——	にぶい黄橙色・10YR 6/3	〃	〃
30	〃	〃	(9.5)	2.1	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
31	〃	〃	9.2	2.2	——	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	４次二ノ段
32	〃	〃	9.3	2.1	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
33	〃	〃	9.1	2.4	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
34	〃	〃	9.1	2.3	——	——	橙色・5YR 7/6	〃	〃
35	〃	〃	(8.6)	2.1	——	——	橙色・5YR 7/6	〃	５次三ノ段
36	〃	〃	9.9	2.0	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	４次二ノ段
37	〃	〃	9.5	2.0	——	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	〃
38	〃	〃	(10.3)	2.7	——	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	〃
39	〃	〃	9.6	2.1	——	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	〃
40	〃	〃	9.4	2.5	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃

第５表　出土土器法量表３

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)				外内(断)	色調	調査年次出土地区
			口径	器高	底径	高台高			
41	土師質土器	皿	(12.2)	2.6	——	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	４次三ノ段
42	〃	〃	8.4	1.7	5.0	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	４次二ノ段
43	〃	〃	9.8	1.7	4.8	——	橙色・5YR 6/6	〃	〃
44	〃	〃	11.4	2.8	6.4	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	１次二ノ段
45	〃	〃	11.7	2.6	6.0	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	５次三ノ段
46	〃	〃	(11.0)	2.3	5.4	——	黄橙色・7.5YR 7/8	〃	４次二ノ段
47	〃	〃	(9.5)	2.2	6.2	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	５次三ノ段
48	〃	〃	(10.3)	2.7	(5.2)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	４次三ノ段
49	〃	〃	(10.2)	2.4	(5.0)	——	橙色・7.5YR 6/8	〃	４次二ノ段
50	〃	〃	10.0	2.5	5.3	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	３次詰
51	〃	〃	10.0	2.6	5.8	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	４次二ノ段
52	〃	〃	9.8	2.0	5.2	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	５次三ノ段(SD4)
53	〃	〃	9.8	2.7	6.3	——	にぶい橙色・7.5YR 6/4	〃	４次三ノ段
54	〃	〃	10.3	3.0	4.9	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	３次詰
55	〃	〃	10.5	2.8	4.9	——	橙色・5YR 7/6	〃	５次三ノ段
56	〃	〃	10.3	3.0	5.3	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	４次三ノ段
57	〃	〃	11.3	2.8	7.5	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	５次三ノ段
58	〃	〃	13.3	2.8	4.2	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	４次四ノ段
59	〃	〃	12.0	2.3	7.2	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	４次二ノ段
60	〃	〃	(12.0)	2.2	(7.0)	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃

第5表　出土土器法量表4

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
61	土師質土器	皿	11.2	2.2	6.0	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	4次 二ノ段
62	〃	小杯	(6.0)	1.5	3.0	——	淡黄橙色・7.5YR 8/6	〃	1次 詰
63	〃	〃	(6.4)	1.7	(3.0)	——	淡黄色・2.5Y 8/4	〃	1次 二ノ段
64	〃	〃	6.0	2.0	3.0	——	黄橙色・7.5YR 7/8	〃	1次 詰
65	〃	〃	7.2	2.0	3.0	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	2次 詰
66	〃	〃	6.3	2.1	2.9	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	3次 詰(SK1)
67	〃	〃	6.8	2.1	2.7	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	2次 詰
68	〃	〃	7.5	2.2	3.1	——	橙色・5YR 7/6	〃	4次 三ノ段
69	〃	〃	6.7	2.0	3.3	——	明黄褐色・10YR 7/6	〃	1次 詰
70	〃	〃	(7.0)	2.0	3.5	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	5次 三ノ段
71	〃	〃	(7.8)	2.3	3.0	——	橙色・5YR 6/6	〃	5次 三ノ段
72	〃	〃	(6.4)	2.1	3.4	——	にぶい黄橙色・10Y 7/4	〃	1次 詰
73	〃	〃	6.9	2.2	3.2	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	2次 詰
74	〃	〃	7.2	1.8	3.0	——	橙色・5YR 7/6	〃	5次 三ノ段
75	〃	〃	6.6	2.4	2.7	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	1次 詰
76	〃	〃	(7.5)	2.5	2.9	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	4次 三ノ段
77	〃	〃	6.8	2.2	3.0	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	2次 詰
78	〃	〃	6.6	2.2	4.2	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	4次 三ノ段
79	〃	〃	(6.6)	2.3	2.9	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	1次 詰
80	〃	〃	6.5	2.4	2.5	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	〃

第5表　出土土器法量表5

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外 内(断)	色調	調査年次 出土地区
81	土師質土器	小杯	(7.4)	2.2	4.7	——	橙色・5YR 7/6	〃	5次 三ノ段
82	〃	〃	6.2	2.2	3.0	——	淡黄橙色・7.5YR 8/6	〃	1次 詰
83	〃	〃	(7.2)	1.9	(4.0)	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	〃
84	〃	〃	(6.8)	2.0	4.4	——	にぶい橙色・7.5YR 6/4	〃	5次 三ノ段
85	〃	〃	6.6	2.0	4.3	——	にぶい橙色・7.5YR 6/4	〃	〃
86	〃	杯	(9.6)	2.8	(5.0)	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	1次 二ノ段
87	〃	〃	9.8	3.0	4.4	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	4次 二ノ段
88	〃	〃	(9.8)	2.9	(4.8)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	〃
89	〃	〃	(10.5)	3.0	(4.6)	——	橙色・7.5YR 6/6	〃	1次 二ノ段
90	〃	〃	9.7	2.7	4.4	——	にぶい橙色・5YR 6/4	〃	4次 二ノ段
91	〃	〃	9.9	3.1	4.3	——	淡黄橙色・7.5YR 8/3	〃	2次 詰
92	〃	〃	(10.5)	2.6	(4.3)	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	5次 三ノ段
93	〃	〃	(9.5)	3.1	(4.9)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	4次 三ノ段
94	〃	〃	(10.0)	2.9	(3.8)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	5次 三ノ段
95	〃	〃	(10.5)	(3.2)	(5.8)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	〃
96	〃	〃	(10.7)	2.9	(5.4)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	4次 二ノ段
97	〃	〃	9.8	2.9	4.4	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	〃
98	〃	〃	(10.7)	3.1	(4.1)	——	浅黄橙色・10YR 8/3	〃	〃
99	〃	〃	(9.5)	2.9	4.7	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
100	〃	〃	9.6	2.6	4.8	——	浅黄橙色・10YR 8/3	〃	〃

第5表　出土土器法量表6

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
101	土師質土器	杯	10.1	2.8	4.6	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	4次 二ノ段
102	〃	〃	9.6	2.9	6.3	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	4次 三ノ段
103	〃	〃	(10.1)	3.2	(4.4)	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	5次 三ノ段
104	〃	〃	10.4	2.9	4.8	——	浅黄橙色・10YR 8/4	〃	4次 二ノ段
105	〃	〃	(10.2)	3.4	(4.2)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	〃
106	〃	〃	9.3	3.1	4.0	——	浅黄橙色・10YR 8/3	〃	〃
107	〃	〃	(10.0)	3.5	(3.6)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	〃
108	〃	〃	(9.8)	3.9	4.8	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	〃
109	〃	〃	(10.8)	3.6	(5.6)	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	〃
110	〃	〃	(10.6)	3.1	(5.0)	——	橙色・5YR 7/6	〃	〃
111	〃	〃	(12.0)	3.1	(4.6)	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	4次 三ノ段
112	〃	〃	(11.6)	3.6	4.3	——	にぶい橙色・10YR 7/4	〃	5次 三ノ段
113	〃	〃	11.2	3.1	5.4	——	にぶい黄橙色・10YR 7/3	〃	4次 二ノ段
114	〃	〃	(11.7)	3.8	(6.0)	——	橙色・5YR 6/6	〃	1次 詰
115	〃	〃	(11.1)	4.3	(4.2)	——	黄橙色・7.5YR 7/8	〃	〃
116	〃	〃	11.1	3.6	4.4	——	橙色・7.5YR 6/6	〃	3次 詰
117	〃	〃	10.9	3.2	4.8	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	4次 二ノ段
118	〃	〃	(11.4)	3.2	(4.7)	——	橙色・5YR 6/6	〃	4次 四ノ段
119	〃	〃	11.2	3.4	4.6	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	2次 詰(P2)
120	〃	〃	(10.9)	3.6	4.7	——	浅黄橙色・7.5YR 8/3	〃	4次 三ノ段

第5表　出土土器法量表7

〔(　　)は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
121	土師質土器	杯	(11.8)	4.2	4.3	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	2次 詰
122	〃	〃	(10.7)	3.7	4.0	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	5次 三ノ段
123	〃	〃	(12.2)	3.6	(5.1)	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	〃
124	〃	〃	(12.2)	5.0	(5.0)	——	橙色・5YR 6/6	〃	〃
125	〃	〃	(12.3)	3.6	(4.4)	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	〃
126	〃	〃	12.6	3.9	4.2	——	にぶい褐色・7.5YR 6/4	〃	2次 詰(P3)
127	〃	〃	12.1	4.0	4.0	——	橙色・7.5YR 6/6	〃	2次 詰(P3)
128	〃	〃	12.5	3.9	4.4	——	にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃	〃
129	〃	〃	(12.4)	3.8	(5.6)	——	橙色・7.5YR 6/8	〃	1次 詰
130	〃	〃	11.7	3.8	4.5	——	橙色・7.5YR 6/7	〃	2次 詰(P3)
131	〃	〃	11.9	4.1	4.2	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	〃
132	〃	〃	(12.2)	4.1	5.0	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	1次 詰
133	〃	〃	(11.5)	3.8	(5.0)	——	橙色・5YR 7/6	〃	4次 三ノ段
134	〃	〃	(12.2)	4.0	(5.0)	——	橙色・5YR 7/6	〃	〃
135	〃	〃	(12.0)	3.7	5.0	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
136	〃	〃	(12.5)	3.3	(4.6)	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	〃
137	〃	〃	(12.8)	3.4	(49)	——	にぶい橙色・5YR 7/4	〃	〃
138	〃	〃	(10.6)	4.1	(5.2)	——	にぶい橙色・10YR 7/3	〃	4次 二ノ段
139	〃	〃	(11.0)	4.6	(4.4)	——	橙色・7.5YR 7/6	〃	4次 三ノ段
140	〃	〃	——	(3.3)	6.0	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4	〃	4次 二ノ段

第5表　出土土器法量表8

〔(　　)は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
141	土師質土器	杯	(14.0)	3.1	5.0	——	外	にぶい橙色・7.5YR 7/4	2次
							内	〃	詰
142	〃	〃	——	(1.6)	4.2	——	外	にぶい橙色・7.5YR 7/4	3次
							内	〃	三ノ段
143	青磁	碗	(13.7)	(3.3)	——	——	外	オリーブ灰色・10Y 6/2	1次
							内	(灰白色・10Y 8/1)	二ノ段
144	〃	〃	——	——	——	——	外	オリーブ灰色・10Y 6/2	3次
							内	(灰白色・2.5Y 7/1)	詰
145	〃	〃	(10.5)	(2.6)	——	——	外	灰白色・10Y 7/2	4次
							内	(　〃　・5Y 7/2)	三ノ段
146	〃	〃	(15.2)	(4.2)	——	——	外	オリーブ灰色・5GY 6/1	3次
							内	(灰色・10Y 5/1)	詰
147	〃	〃	——	——	——	——	外	オリーブ灰色・10Y 6/2	5次
							内	(灰白色・7.5Y 8/2)	三ノ段
148	〃	〃	(14.0)	(4.1)	——	——	外	オリーブ灰色・10Y 6/2	1次
							内	(灰白色・10Y 8/1)	詰
149	〃	〃	——	——	——	——	外	オリーブ灰色・10Y 6/2	5次
							内	(灰白色・2.5Y 8/2)	三ノ段
150	〃	〃	——	(2.3)	5.0	0.6	外	にぶい黄色・2.5Y 6/3	5次
							内	(灰白色・2.5Y 7/1)	三ノ段
151	〃	〃	——	(1.7)	5.4	0.6	外	灰白色・5GY 8/1	4次
							内	(灰黄色・2.5Y 7/2)	四ノ段
152	〃	〃	——	(5.6)	4.6	0.8	外	灰褐色・5YR 6/2	3次
							内	(明赤褐色・2.5YR 5/8)	三ノ段
153	〃	稜花皿	10.5	3.1	4.3	0.4	外	灰白色・10Y 7/2	4次
							内	(黄灰色・2.5Y 6/1)	二ノ段
154	〃	〃	(14.1)	(2.3)	——	——	外	緑灰色・7.5GY 6/1	2次
							内	(にぶい黄橙色・10YR 6/3)	詰
155	〃	〃	(11.2)	(2.2)	——	——	外	オリーブ灰色・10Y 4/2	2次
							内	(にぶい黄橙色・10YR 6/3)	詰
156	〃	〃	(13.5)	(2.5)	——	——	外	灰オリーブ色・7.5Y 6/2)	4次
							内	(にぶい黄橙色・10YR 7/2)	三ノ段
157	〃	〃	(15.1)	(3.0)	——	——	外	オリーブ灰色・10Y 6/2	1次
							内	(にぶい黄橙色・10YR 6/3)	詰
158	青白磁	香炉	(10.2)	(3.9)	——	——	外	黄灰色・2.5Y 6/1	5次
							内	(浅黄色・2.5Y 7/2)	三ノ段
159	青磁	盤	——	——	——	——	外	オリーブ灰色・10Y 6/2	2次
							内	(灰白色・10Y 7/1)	詰
160	〃	〃	——	(1.5)	(9.2)	0.7	外	にぶい黄色・2.5Y 6/3	3次
							内	(にぶい黄橙色・10YR 7/4)	三ノ段

第5表　出土土器法量表9

〔(　　)は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
161	青磁	盤	——	(3.5)	(8.6)	0.6	オリーブ灰色・10Y 6/2)	(灰白色・10Y 7/1)	2次 詰
162	染付	皿	——	——	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 二ノ段
163	〃	〃	(12.1)	3.4	(5.5)	0.6	浅黄色・5Y 7/3	〃	5次 三ノ段
164	〃	〃	(11.0)	2.1	(6.2)	0.4	明緑灰色・7.5GY 8/1	〃	5次 三ノ段
165	〃	〃	——	(1.0)	(5.2)	0.4	灰白色・2.5GY 8/1	(淡黄色・2.5Y 8/3)	2次 詰
166	〃	〃	(11.6)	(2.2)	——	——	灰白色・5Y 8/2	(黄褐色・2.5Y 5/3)	2次 詰
167	〃	〃	——	(1.4)	(10.4)	0.7	明緑灰色・7.5GY 8/1	〃	1次 詰
168	〃	〃	——	(1.3)	(6.0)	0.3	明緑灰色・7.5GY 8/1	〃	4次 二ノ段
169	〃	〃	(13.3)	(2.0)	——	——	灰白色・5Y 8/2	〃	2次 詰
170	〃	〃	(12.0)	(1.7)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 二ノ段
171	〃	〃	(12.4)	(3.0)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	2次 詰
172	〃	〃	(13.3)	(1.9)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 二ノ段
173	〃	〃	(12.4)	(1.6)	——	——	明緑色・5G 7/1	〃	2次 詰
174	〃	〃	(13.7)	(2.6)	——	——	淡黄色・2.5Y 8/3	〃	4次 三ノ段
175	〃	〃	(11.4)	(2.0)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 三ノ段
176	〃	〃	——	(1.5)	(9.6)	0.7	灰白色・2.5GY 8/1	〃	1次 詰
177	〃	〃	(15.6)	(3.5)	——	——	灰白色・2.5GY 8/1	〃	1次 詰
178	〃	〃	——	(1.0)	(10.2)	0.6	明緑灰色・10GY 8/1	〃	5次 三ノ段
179	〃	〃	——	(1.1)	(5.2)	0.4	明緑灰色・10GY 8/1	〃	5次 三ノ段
180	〃	〃	(16.6)	(2.8)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	1次 詰

第5表　出土土器法量表10

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
181	染付	皿	(16.3)	(1.9)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	5次 三ノ段
182	〃	〃	——	(1.1)	(6.8)	0.4	明緑灰色・10GY 8/1	〃	1次 詰
183	〃	〃	(18.6)	(2.4)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	5次 三ノ段
184	〃	〃	——	(1.6)	(7.1)	0.4	明緑灰色・10GY 8/1	〃	1次 詰
185	〃	〃	(20.3)	4.0	(12.0)	0.6	明緑灰色・10GY 8/1	(灰白色・7.5Y 8/2)	4次 三ノ段
186	〃	〃	(9.0)	2.3	(4.7)	0.3	明緑灰色・10GY 8/1	〃	1次 詰
187	〃	〃	(10.2)	2.7	(5.8)	0.4	明緑灰色・7.5GY 8/1	〃	2次 詰
188	〃	〃	——	(2.1)	(8.2)	0.5	明緑灰色・2.5GY 8/1	〃	3次 詰
189	〃	〃	——	(1.7)	(11.6)	0.7	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 三ノ段
190	〃	〃	(11.6)	2.5	(5.8)	0.5	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 四ノ段
191	〃	〃	——	(1.2)	(7.8)	0.5	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 二ノ段
192	〃	〃	(16.3)	3.6	(8.8)	0.7	明緑灰色・10GY 8/1	〃	2次 詰下段
193	〃	小杯	(6.6)	(2.3)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 二ノ段
194	〃	碗	——	(5.3)	——	——	灰白色・2.5GY 8/1	〃	2次 詰
195	〃	〃	(10.5)	(3.6)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	5次 三ノ段
196	〃	〃	(13.8)	(4.2)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 三ノ段
197	〃	〃	(12.6)	(2.1)	——	——	明緑灰色・5G 7/1	〃	2次 詰
198	〃	〃	(11.5)	(3.9)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 三ノ段
199	〃	〃	(14.2)	(3.0)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	5次 三ノ段
200	〃	〃	(12.4)	(2.0)	——	——	明緑灰色・7.5GY 8/1	〃	4次 二ノ段

第5表　出土土器法量表11

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
201	染付	碗	——	(2.0)	(4.6)	0.4	明オリーブ灰色・2.5GY 7/1	〃	5次
202	〃	〃	(13.0)	(4.1)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 二ノ段
203	〃	〃	(16.9)	(5.9)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	2次 詰下段
204	〃	〃	(13.3)	(3.5)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 二ノ段
205	〃	〃	——	(2.8)	(5.4)	1.3	明緑灰色・10GY 8/1	〃	4次 三ノ段
206	白磁	皿	(12.5)	2.5	(6.0)	——	灰白色・5GY 8/1	〃	5次 三ノ段
207	〃	〃	(13.2)	(2.0)	——	——	明緑灰色・10GY 8/1	〃	5次 三ノ段
208	〃	〃	(12.9)	(2.9)	——	——	明緑灰色・7.5GY 8/1	〃	4次 二ノ段
209	〃	〃	(11.8)	2.9	6.5	0.4	明オリーブ灰色・2.5GY 7/1	〃	4次 四ノ段
210	〃	〃	(11.7)	3.1	(6.6)	0.4	明緑灰色・7.5GY 8/1	〃	4次 二ノ段
211	〃	〃	(11.8)	(2.6)	——	——	浅黄色・2.5GY 7/3	〃	4次 四ノ段
212	〃	〃	——	(1.6)	5.4	0.7	明緑灰色・7.5GY 8/1	〃	4次 三ノ段
213	〃	〃	——	(2.8)	5.4	0.4	淡黄色・5Y 8/3	〃	4次 SD4
214	〃	〃	——	(1.4)	3.2	——	灰白色・2.5Y 8/1	〃	2次 詰
215	瀬戸美濃系	天目茶椀	(11.0)	(3.7)	——	——	黒色・N 21	(にぶい橙色・7.5YR 6/4)	1次 詰
216	〃	〃	(11.0)	(4.9)	——	——	にぶい褐色・7.5YR 7/4	(にぶい黄橙色・10YR 7/4)	5次 三ノ段
217	〃	〃	(10.3)	(6.4)	——	——	黒褐色・5YR 2/1	(にぶい黄橙色・10YR 7/4)	5次 三ノ段
218	〃	皿	(14.8)	(3.7)	——	——	明黄褐色・10YR 6/6	(にぶい褐色・7.5YR 5/4)	5次 三ノ段
219	褐釉陶器	壷	(11.2)	(3.6)	——	——	黒褐色・10YR 3/1	〃	5次 三ノ段
220	備前	〃	(10.9)	(5.9)	——	——	にぶい黄褐色・10YR 5/3	〃	2次 詰

第５表　出土土器法量表12

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
221	備前	碗	(11.1)	(6.4)	——	——	黄灰色・2.5Y 6/1	(暗灰黄色・2.5Y 4/2)	1次 詰
222	〃	〃	12.8	(11.5)	——	——	にぶい赤褐色・2.5YR 4/3	〃	4次 二ノ段
223	〃	〃	——	(5.6)	(13.2)	——	にぶい赤褐色・5YR 4/3	〃	4次 二ノ段
224	〃	〃	(28.2)	(5.1)	——	——	暗赤褐色・2.5YR 3/3	(灰褐色・5YR 6/3)	3次 堀切
225	〃	甕	(30.6)	(5.8)	——	——	にぶい赤褐色・2.5YR 4/3	(灰黄褐色・10YR 5/2)	4次 三ノ段
226	〃	〃	(35.0)	(7.4)	——	——	灰赤色・2.5YR 4/2	(灰褐色・5YR 4/2)	1次 二ノ段
227	〃	〃	——	(12.8)	——	——	暗赤褐色・2.5Y 3/2	〃	3次 詰
228	〃	〃	(54.5)	(5.4)	——	——	にぶい赤褐色・5YR 5/3	〃	2次 詰
229	〃	〃	——	(9.0)	——	——	橙色・2.5YR 6/6	〃	3次 詰
230	〃	摺鉢	(30.6)	(10.1)	——	——	灰褐色・5YR 4/2	〃	4次 二ノ段
231	〃	〃	(35.0)	(7.5)	——	——	にぶい褐色・7.5YR 5/4	〃	1次 詰
232	〃	〃	(25.4)	(8.0)	——	——	青灰色・10BC 5/1	(にぶい赤褐色・2.5YR 5/3)	4次 三ノ段
233	〃	〃	(23.0)	(4.8)	——	——	灰褐色・5YR 4/2	〃	5次 三ノ段
234	〃	〃	(29.0)	(6.4)	——	——	淡黄色・2.5Y 7/3	(にぶい黄橙色・10YR 6/3)	1次 詰
235	〃	〃	——	(6.8)	(13.2)	——	灰褐色・5YR 4/2	〃	4次 二ノ段
236	〃	〃	——	(5.2)	17.4	——	にぶい赤褐色・2.5YR 4/3	〃	4次 三ノ段
237	〃	〃	——	(5.5)	(16.2)	——	にぶい赤褐色・2.5YR5/4	(にぶい褐色・5YR 7/4)	4次 二ノ段
238	産地不明陶器	甕	——	(6.4)	(16.7)	——	黄灰色・2.5Y 4/1	(暗灰黄色・2.5Y 5/2)	1次 二ノ段
239	〃	〃	——	(8.2)	(10.8)	——	灰色・5YR 5/1	〃	2次 詰
240	瓦質土器	鍋	(13.4)	(7.5)	——	——	黄灰色・2.5Y 4/1	〃	5次 三ノ段

第5表　出土土器法量表13

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	外内(断) 色調	調査年次 出土地区
241	瓦質土器	鉢	(26.0)	(8.7)	——	——	灰色・7.5Y 4/1 〃	3次 三ノ段
242	〃	鍋	(18.0)	(4.2)	——	——	灰白色・2.5Y 7/1 〃	4次 二ノ段
243	〃	羽釜	——	(5.9)	——	——	灰色・7.5Y 4/1 〃	5次 三ノ段
244	〃	火鉢	——	(6.8)	——	——	黄灰色・2.5Y 4/1 (灰黄色・2.5Y 7/2)	3次 詰
245	土師質土器	鉢	——	(4.4)	——	——	にぶい赤褐色・2.5YR 4/3 〃	4次 四ノ段
246	〃	コネ鉢	(43.0)	(5.9)	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4 〃	5次 三ノ段
247	〃	火鉢	(36.0)	(9.2)	——	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4 〃	4次 二ノ段
248	〃	〃	(40.0)	(10.8)	(35.4)	——	にぶい橙色・7.5YR 7/4 (灰色・10Y 4/1)	4次 二ノ段
249	〃	〃	(41.6)	(10.5)	——	——	橙色・7.5YR 7/6 〃	2次 詰
250	瓦質土器	〃	(28.2)	(10.3)	(30.1)	——	灰色・10Y 4/1 〃	4次 二ノ段
251	土師質土器	〃	(38.2)	(11.2)	——	——	橙色・7.5YR7/4 〃	4次 三ノ段
252	〃	〃	——	(8.5)	——	——	にぶい黄橙色・7.5YR 7/4 〃	4次 四ノ段
260	土錘	——	4.6	1.8	0.6	1.5	橙色・2.5YR 6/6	3次 堀切
261	〃	——	4.4	1.7	0.6	1.3	橙色・5YR 7/6	〃
262	〃	——	4.4	1.6	0.6	1.2	にぶい橙色・10YR 7/4	〃
263	〃	——	4.4	1.6	0.6	10.1	赤褐色・2.5YR 4/6	2次 詰
264	〃	——	4.4	2.0	0.4	14.1	褐色・7.5YR 4/3	〃
265	〃	——	5.0	1.4	0.4	10.4	にぶい黄褐色・10YR 5/4	〃
266	〃	——	4.3	1.5	0.5	7.5	橙色・5YR 6/6	4次 三ノ段
267	〃	——	4.9	1.6	0.4	10.9	にぶい橙色・7.5YR 6/4	3次 詰

(土錘の法量は、長さ・幅・孔径・重量)

第5表　出土土器法量表14

〔(　　) は復元及び残存値〕

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 長さ	幅	孔径	重量	外内(断)	色調	調査年次 出土地区
268	土錘	——	4.2	1.5	0.3	1.2		にぶい橙色・7.5YR 6/4	3次 堀切
269	〃	——	4.5	1.6	0.5	1.2		にぶい黄橙色・10YR 7/4	〃
270	〃	——	4.3	1.6	0.5	8.8		にぶい橙色・7.5YR 6/4	5次 三ノ段
271	〃	——	4.7	1.3	0.3	6.2		にぶい橙色・7.5YR 6/4	〃
272	〃	——	3.9	1.5	0.4	8.7		にぶい褐色・7.5YR 5/3	〃
273	〃	——	4.6	1.3	0.4	6.0		にぶい黄橙色・10YR 7/4	1次 詰
274	〃	——	4.1	1.6	0.6	1.5		橙色・5YR 6/6	3次 堀切
275	〃	——	3.9	1.8	0.4	11.7		橙色・7.5YR 7/6	1次 詰
276	〃	——	3.8	1.5	0.5	8.6		橙色・5YR 7/6	〃
277	〃	——	4.0	1.5	0.5	8.4		橙色・7.5YR 7/6	〃
278	〃	——	3.7	1.7	0.3	10.8		にぶい橙色・5YR 7/4	5次 三ノ段
279	〃	——	3.8	1.6	0.4	9.9		橙色・7.5YR 7/6	5次 三ノ段
280	〃	——	3.6	1.6	0.5	7.9		にぶい褐色・7.5YR 5/4	2次 詰
281	〃	——	4.1	1.5	0.5	8.1		橙色・7.5YR 6/6	1次 詰
282	〃	——	4.0	1.6	0.5	9.8		赤褐色・10R 5/4	2次 詰
283	〃	——	4.0	1.3	0.4	5.1		にぶい橙色・5YR 7/4	1次 詰

第6表　軒丸瓦計測表

単位(cm)

挿図番号	分類	直径	文様	珠文		周縁		瓦当厚	胎土	色調	出土地点
				数	径	幅	高				
291	Ⅰa類	(14.3)	10.2	12	0.5	2	0.8	2.8	細砂粒を多量に含む	淡黄色	三ノ段J区
292	Ⅰb類	13.8	10.5	12	0.8	1.8	0.6	2.7	瓦当面に砂粒を含む	淡灰黒褐色	二ノ段3層
293	Ⅱa類	(12.9)	(9.4)	30	0.6	2.1	0.7	2.5	細砂粒を含む	灰黒褐色	詰
297	Ⅱb類	15.6	(9.5)	(30)	0.6	3	0.8	2.6	細砂粒を若干含む	灰黒褐色一部銀化現象	二ノ段3層

第7表　軒平瓦計測表

単位(cm下)

挿図番号	分類	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	文様	周縁				周縁高	胎土	色調	出土地点区
							上	下	左	右				
298	Ⅰ	(23.8)	(2.1)	(23)	3.1	1.8	0.6	0.7	—	3	0.6	砂粒を含む	灰黒褐色	二ノ段
304	Ⅱ	——	——	——	3.7	2.3	0.6	0.7	—	—	0.3	砂粒を若干含む	淡黄色	三ノ段

第8表　丸瓦・平瓦計測表

単位(cm)

挿図番号	器種	法量			胎土	焼成	色調	備考	出土地点区
		長さ	幅	厚					
310	丸瓦	29.1	13.9	2.4	細砂粒微	良好	銀色	凸面に一部縄目コビキ	二ノ段3層
324	平瓦	27.2	21.8	2	細砂粒を多量に含む	〃	黒褐色	凹面に砂粒	〃
313	〃	——	26.3	2.3	砂粒を若干含む	〃	灰褐色		三ノ段
315	〃	——	22.5	2.1	〃	不良	黒灰褐色一部黄褐色	凸面に砂粒多量	〃
316	〃	——	21.5	2.3	砂粒を多量に含む	良好	黒灰褐色	〃	二ノ段

第9表　出土銭計測表1

挿図番号	銭　種	初鋳年次		出土地点	枚数	銭　径（mm）		量目（g）	備　考
		年　号	西　暦	遺構		外　径	内　径		
詰	中国唐朝銭								
354	1.開元通寶	高祖武徳4年	621	P1		24.0	20.0	2.41	対　1次
	中国北宋銭								
355～357	2.咸平元寶	真宗咸平元年	998	P1	3	24.0	19.0	2.35～3.5	順　1次
358	3.景徳元寶	真宗景徳元年	1004	P1	1	25.0	19.5	2.53	順　1次
359～363	4.祥符元寶	真宗大中祥符元年	1008	P1	5	23.0～25.0	18.0～19.0	2.2～3.5	順　1次
364	5.祥符通寶	真宗大中祥符元年	1008	P1	1	25.0	20.0	3.48	順　1次
365～367	6.天禧通寶	真宗天禧元年	1017	P1	3	25.0	20.0～20.5	2.65～3.05	順　1次
368・369	7.天聖元寶	仁宗天聖元年	1023	P1	2	25.0	20.5	2.95～3.7	順　1次
370	8.明道元寶	仁宗明道元年	1032	P1	1	25.0	20.5	2.92	順　1次
371～377	9.皇宋通寶	仁宗宝徳元2年	1039	P1	7	23.0～24.5	18.0～21.0	1.63～2.82	対　1次
378	10.至和元寶	仁宗至和元年	1054	P1	1	23.5	19.5	3.2	順　1次
379	11.至和通寶	仁宗至和元年	1054	P1	1	24.5	19.0	2.7	対　1次
380・381	12.嘉祐通寶	仁宗嘉祐元年	1056	P1	2	25.0	19.5	2.2～2.5	対　1次
382	13.治平元寶	英宗治平元年	1064	P1	1	24.5	19.5	2.9	順　1次
383～389	14.熙寧元寶	神宗熙寧元年	1068	P1	7	24.0	19.0～20.5	2.7～3.46	順　1次
390～396	15.元豊通寶	神宗元豊元年	1078	P1	7	23.0～24.5	19.0～21.0	2.3～3.3	順　1次
397～406	16.元祐通寶	哲宗元祐元年	1086	P1	10	24.0～25.0	17.5～21.0	3.15～3.55	順　1次
407	17.紹聖元寶	哲宗紹聖元年	1094	P1	1	23.5	18.5	2.65	順　1次
408	18.元符通寶	哲宗元符元年	1098	P1	1	24.0	18.0	3.2	順　1次
409・410	19.聖宋元寶	徽宗建中靖国元年	1101	P1	2	23.5	18.5	2.6～3.05	順　1次
411・412	20.大観通寶	徽宗大観元年	1107	P1	2	24.5	21.5	2.6～2.8	対　1次
413・414	21.政和通寶	徽宗政和元年	1111	P1	2	24.0	19.5～20.5	2.16～3.05	対　1次
415	22.宣和通寶	徽宗宣和元年	1119	P1	1	23.5	20.0	2.6	対　1次
	中国南宋銭								
416	23.嘉熙通寶	理宗嘉熙元年	1237	P1	1	24.5	20.0	1.9	対　1次
417	24.景定元寶		1260	P1	1	24.0	20.0	1.95	対　1次
	中国明朝銭								
418～425	25.洪武通寶	大宗洪武元年	1368	P1	8	22.5～23.0	17.5～20.0	2.4～3.3	対　1次
426～438	26.永楽通寶	成祖永楽6年	1408	P1	13	25.0	21.0	2.85～3.6	対　1次
439	27.宣徳通寶	宣宗宣徳8年	1433	P1	1	25.5	20.0	2.7	対　1次
440	28.不明銭			P1	1	24.0	20.0	2.1	1次
441	29.不明銭			P1	1	24.0	20.0	2.6	1次
442	30.不明銭			P1	1	24.0	20.0	2.1	1次
443	31.不明銭			P1	1	23.0	——	2.5	1次
444	32.不明銭			P1	1	20.5	18.5	2.9	1次
	計				91				

第9表　出土銭計測表2

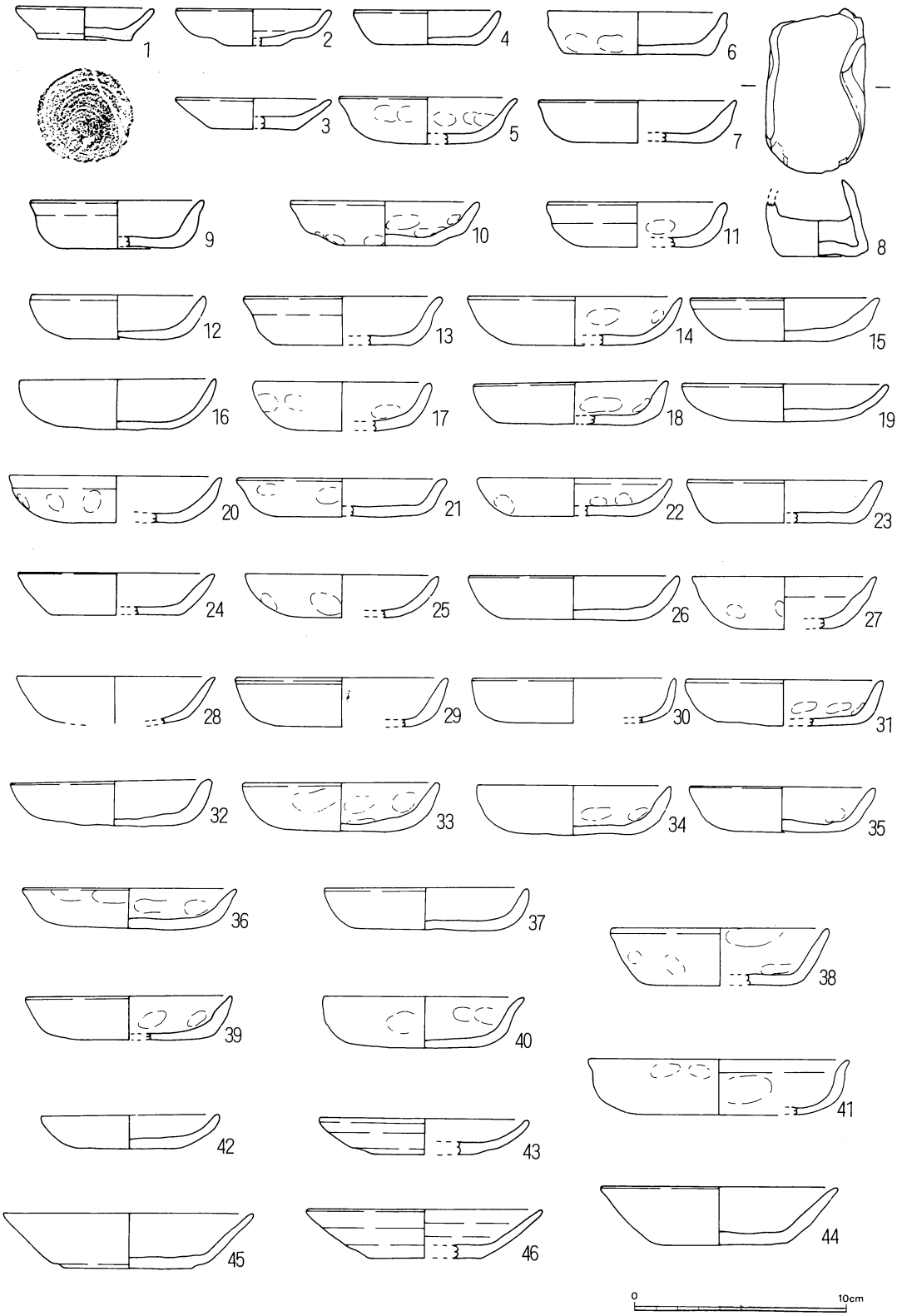
挿図番号	銭　種	初鋳年次		出土地点	枚数	銭　径（mm）		量目（g）	備　考
		年　号	西　暦	遺構（層位）		外　径	内　径		
詰	中国北宋銭								
445	1.天聖通寶	仁宗天聖元年	1023	A区・Ⅲ層	1	24.5	20.0	3.2	順　1次
446	2.皇宋通寶	仁宗宝元2年	1039	D区・Ⅰ層	1	23.0	20.0	2.45	対　2次
447	3.治平通寶	英宗治平元年	1064	E区・Ⅱ層	1	25.0	21.0	3.35	順　2次
448	4.元豊通寶	神宗元豊元年	1078	D区・Ⅱ層	1	24.0	19.0	2.6	順　2次
449	5.元祐通寶	哲宗元祐元年	1086	D区・Ⅰ層	1	23.0	18.0	1.95	順　2次
450	6.紹聖元寶	哲宗紹聖元年	1094	B区・Ⅰ層	1	24.0	19.0	1.9	順　1次
451	7.元符通寶	哲宗元符元年	1098	Ⅰ区・Ⅰ層	2	23.5	19.0	2.9	順　2次
452・453	8.政和通寶	徽宗政和元年	1111	D区・A区 Ⅰ～Ⅱ・Ⅲ層		24.0	21.5	2.25・2.75	対　1次
	中国明朝銭								
454	9.洪武通寶	大宗洪武元年	1368	D区・Ⅰ層	1	23.0	1.75	3.6	対　2次
455～457	10.永楽通寶	成祖永楽6年	1408	A区・D区 Ⅰ～Ⅱ層	2	24.0～25.0	20.0～21.5	2.1～3.4	対　2次
458	11.不明銭			D区・Ⅰ層	1	——	——	0.9	2次
459	12.無明銭			B区・Ⅰ層	1	19.0		1.3	1次
460	一銭				1				2次
461	五円				1				2次
	計				17				
二ノ段	中国北宋銭								
462	1.祥符元寶	真宗大中祥符元年	1008	Ⅱ層	1	24.5	19.5	2.35	順　1次
463	2.天聖元寶	仁宗天聖元年	1023	Ⅰ層	1	25.0	23.0	3.2	順　4次 裏面やや磨滅
464	3.景祐元寶	仁宗景祐元年	1034	Ⅲ層	1	23.0	19.5	2.37	順　4次
465	4.熙寧元寶	神宗熙寧元年	1068	Ⅳ層	1	23.0	20.0	2.6	順　4次 （鐚銭）
466	5.元祐元寶	哲宗元祐元年	1086	Ⅳ層	1	23.0	19.0	2.8	順　4次
467	6.政和元寶	徽宗政和元年	1111	茶褐色	1	23.5	19.5	3.1	対　4次 裏面磨滅
	中国南宋銭								
468	7.淳熙元寶	孝宗淳熙元年	1174	Ⅴ層	1	24.5	19.5	2.8	順　1次 （二次焼成）
	中国明朝銭								
469	8.洪武通寶	太宗洪武元年	1368	茶褐色土	1	22.0	17.0	3.36	対　4次 （裏面に銭）
470	9.不明銭			（茶褐色土）	1	22.5	19.0	2.2	4次 銘が磨滅したもの
	10.不明銭			Ⅴ層	5				4次（融着）
471	11.不明銭			Ⅲ層	1	22.0		1.7	4次
472	12.不明銭			Ⅳ層	1	21.0		1.6	4次
473	13.不明銭			Ⅳ層	1	21.0		1.5	4次
474	14.不明銭			Ⅱ層	1	21.0		0.85	4次
475	15.不明銭			Ⅴ層	1	18.0		0.31	4次（融着）
	計				19				

第９表　出土銭計測表３

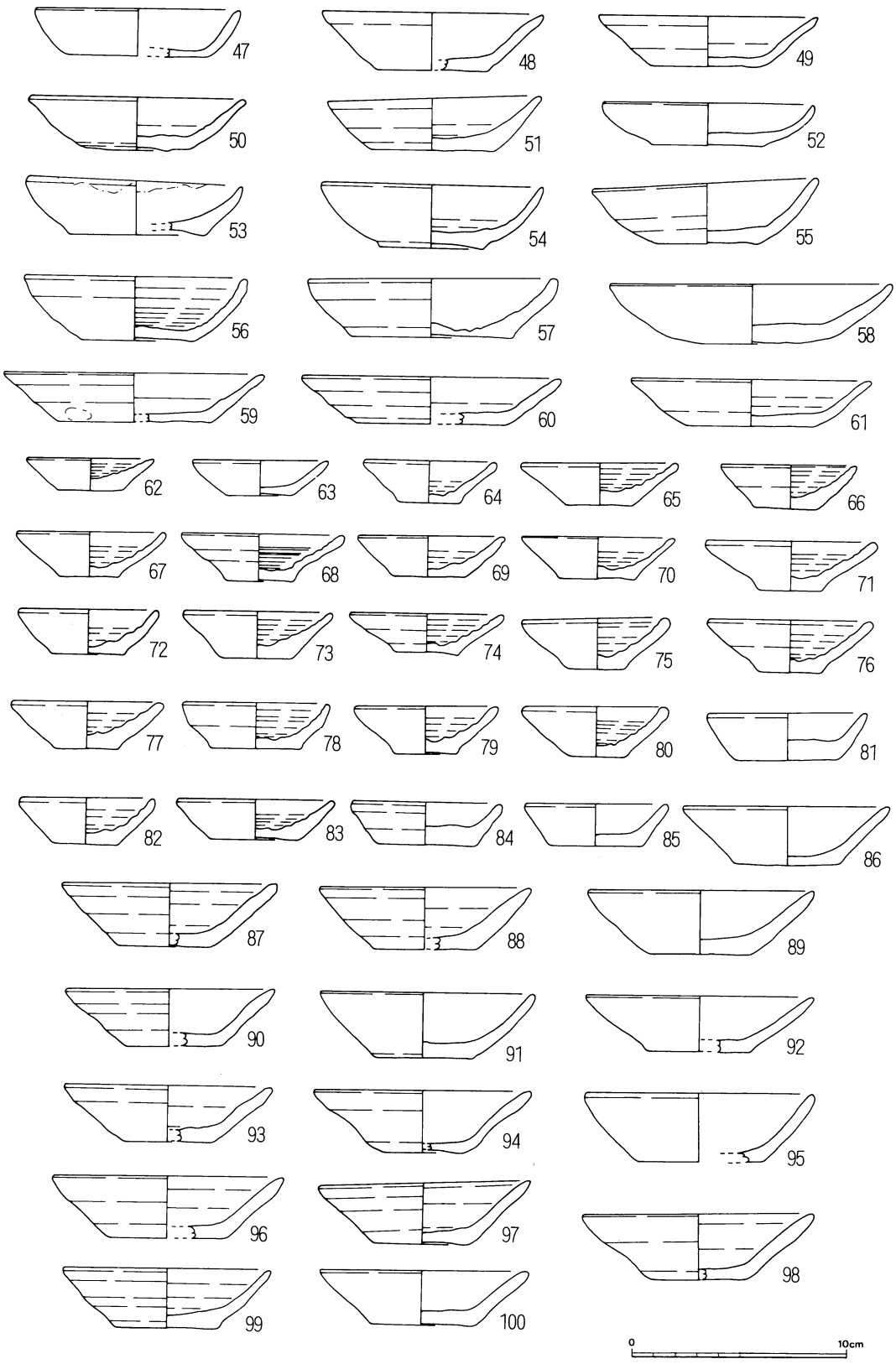
挿図番号	銭　種	初鋳年次		出土地点	枚数	銭　径（mm）		量目（g）	備　考
		年　号	西　暦	遺構（層位）		外　径	内　径		
三ノ段	中国北宋銭								
476	１.皇宋通寶	仁宗保元２年	1039	Ⅱ層	1			1.1	対・４次 裏面磨滅
477	２.熙寧元寶	神宗熙寧元年	1068	黒灰土	1	23.0	21.0	2.2	順・５次
478・479	３.元豊通寶	神宗元豊元年	1078	Ⅰ層	2	23.0	18.0～18.5	2.1～2.8	順・５次 裏面磨滅
	中国明朝銭								
480	４.洪武通寶	太宗洪武元年	1368	――	1	22.5	18.0	2.5	対・５次鐚銭
481	５.無名銭			暗褐色土	1	21.0		1.2	剝離著しい
	計				6				
表採	中国唐朝銭								
482	１.開元通寶	高祖武徳４年	621		1	24.0	20.0	2.75	対　２次
483	中国北宋銭								
	２.皇宋通寶	仁宗宝元２年	1039		1	24.0	19.0	2.6	対　２次
	計				2				

第10表　出土銭一覧表

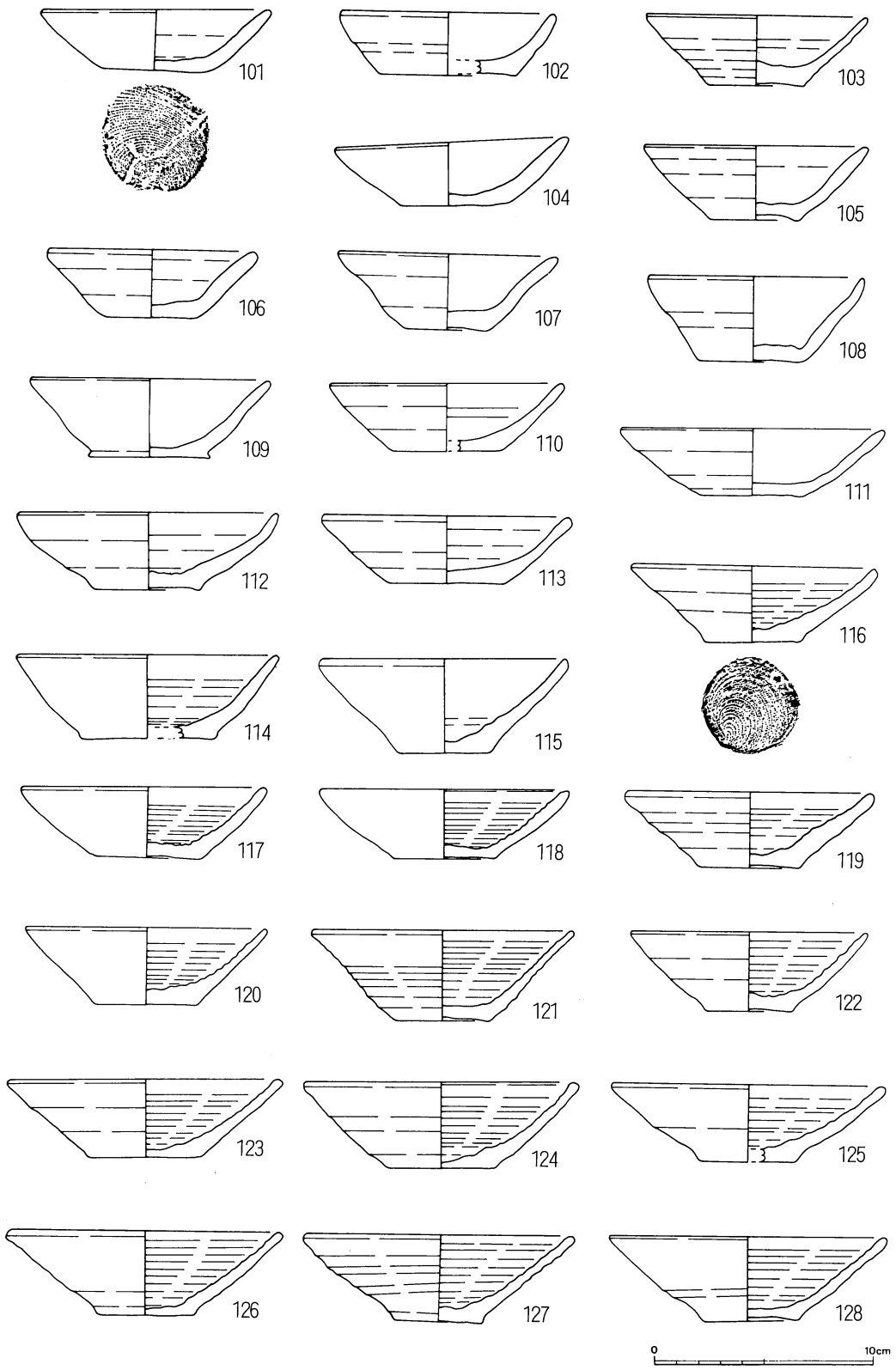
銭貨名	初鋳年		枚数	備　考	銭貨名	初鋳年		枚数	備　考
開元通寶	唐	621	2		元豊通寶	北宋	1078	10	
咸平元寶	北宋	998	3		元祐通寶	〃	1086	12	
景徳元寶	〃	1004	1		紹聖元寶	〃	1094	2	
祥符元寶	〃	1008	6		元符通寶	〃	1098	2	
祥符通寶	〃	1008	1		聖宋元寶	〃	1101	2	
天禧通寶	〃	1017	3		大観通寶	〃	1107	2	
天聖元寶	〃	1023	4		政和通寶	〃	1111	5	
明道元寶	〃	1032	1		宣和通寶	〃	1119	1	
景祐元寶	〃	1034	1		淳熙元寶	南宋	1174	1	
皇宋通寶	〃	1039	10		嘉熙通寶	〃	1237	1	
至和元寶	〃	1054	1		景定元寶	〃	1260	1	
至和通寶	〃	1054	1		洪武通寶	明	1368	11	
嘉祐通寶	〃	1056	2		永楽通寶	〃	1408	16	
治平元寶	〃	1064	2		宣徳通寶	〃	1433	1	
熙寧元寶	〃	1068	9		合計			114	


1
2
4
6
3
5
7
9
10
11
8
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0
10cm

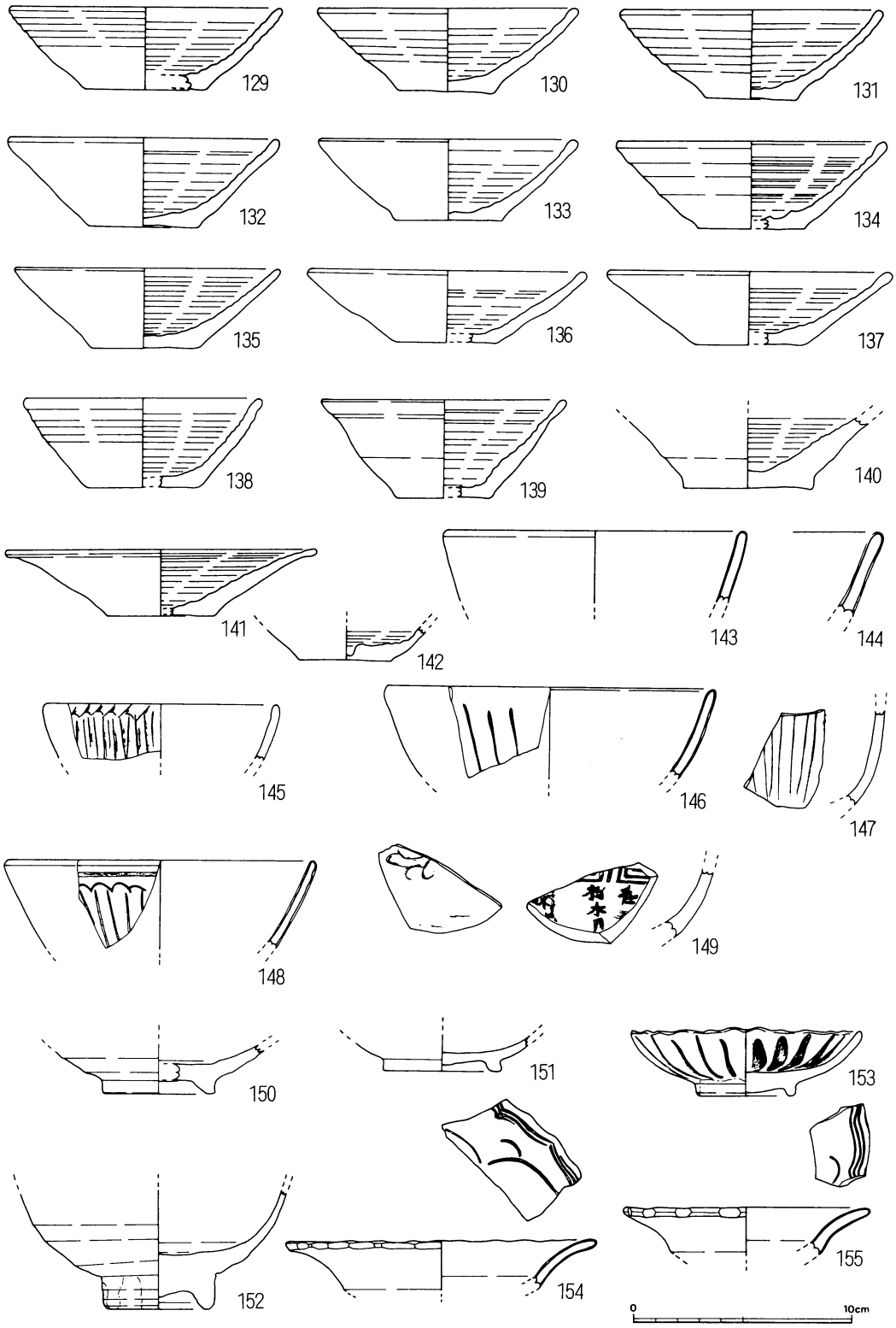
第30図　土師質土器(1)


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
0
10cm

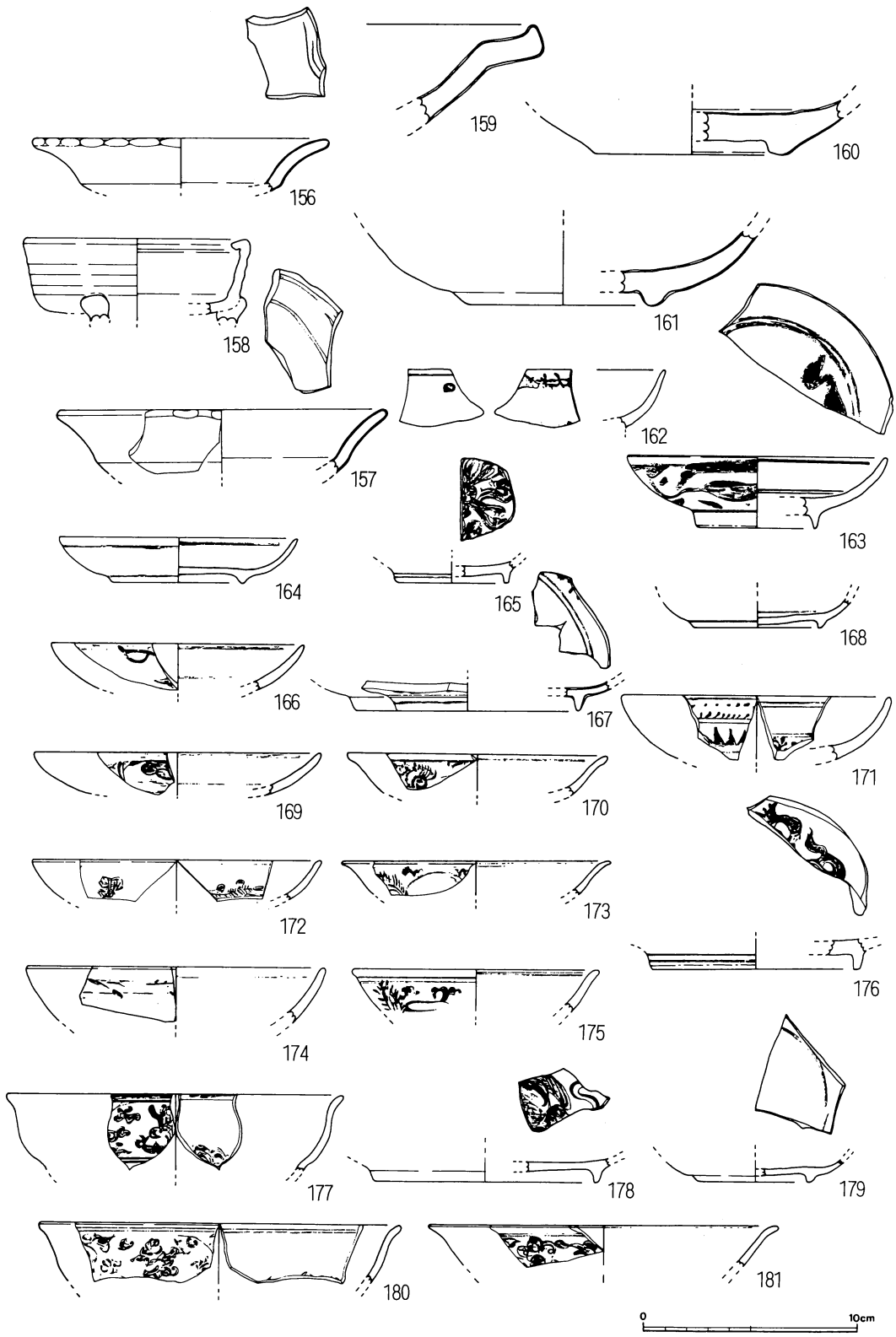
第31図　土師質土器(2)


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
116
114
115
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
0
10cm

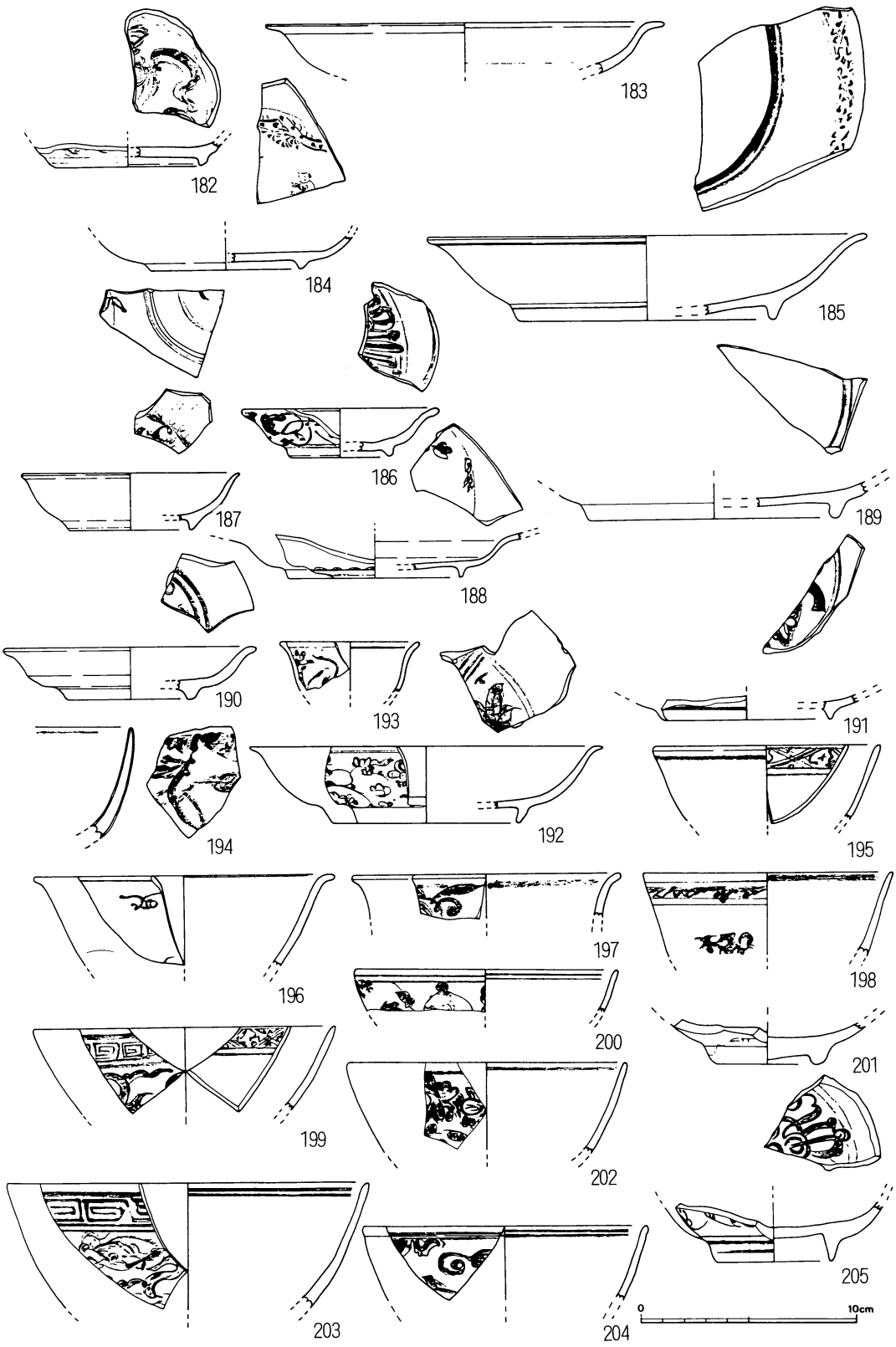
第32図　土師質土器(3)



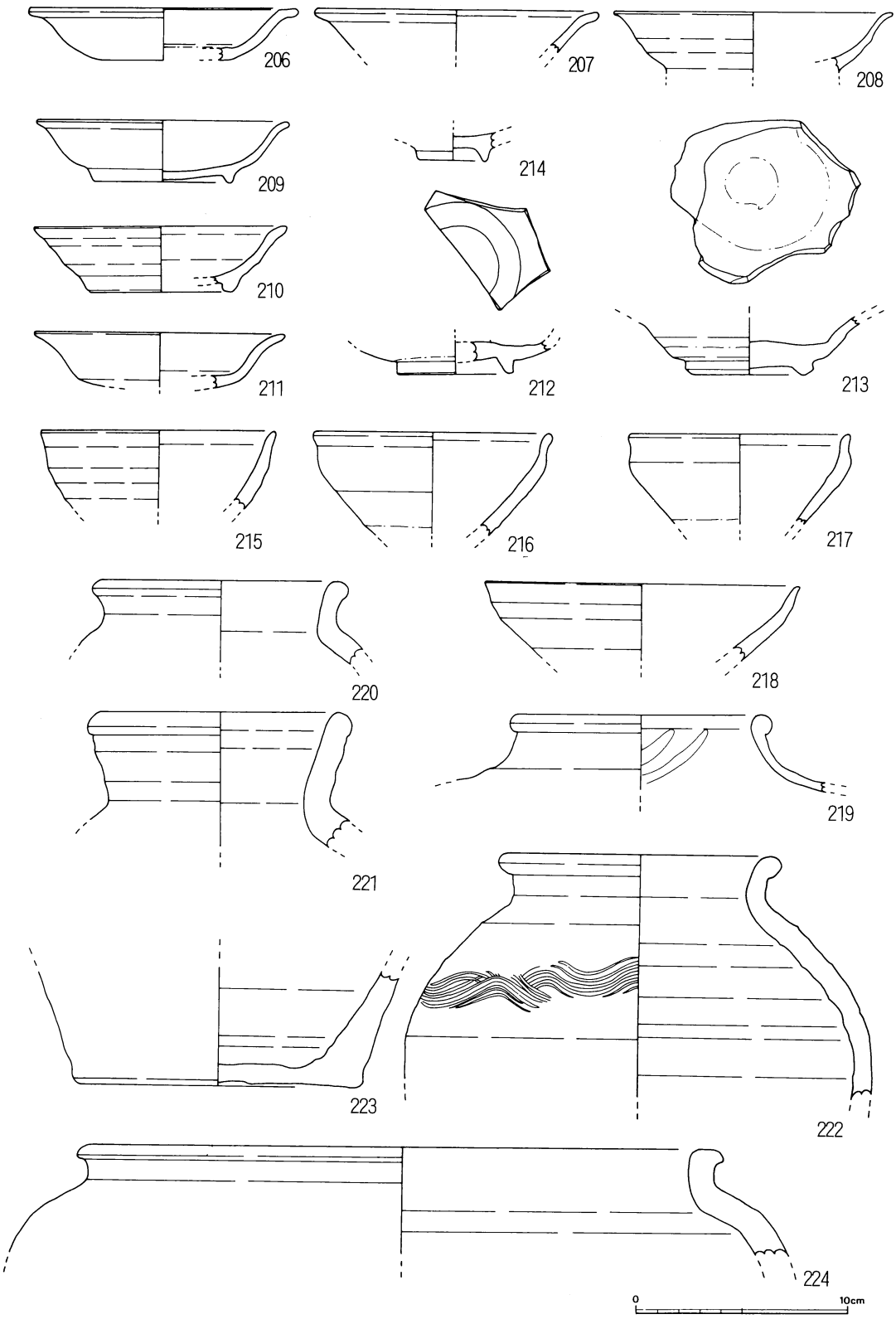
第33図　土師質土器(4), 青磁(1)


159
160
156
158
161
162
157
163
164
165
168
166
167
171
169
170
172
173
176
174
175
177
178
179
180
181
0
10cm

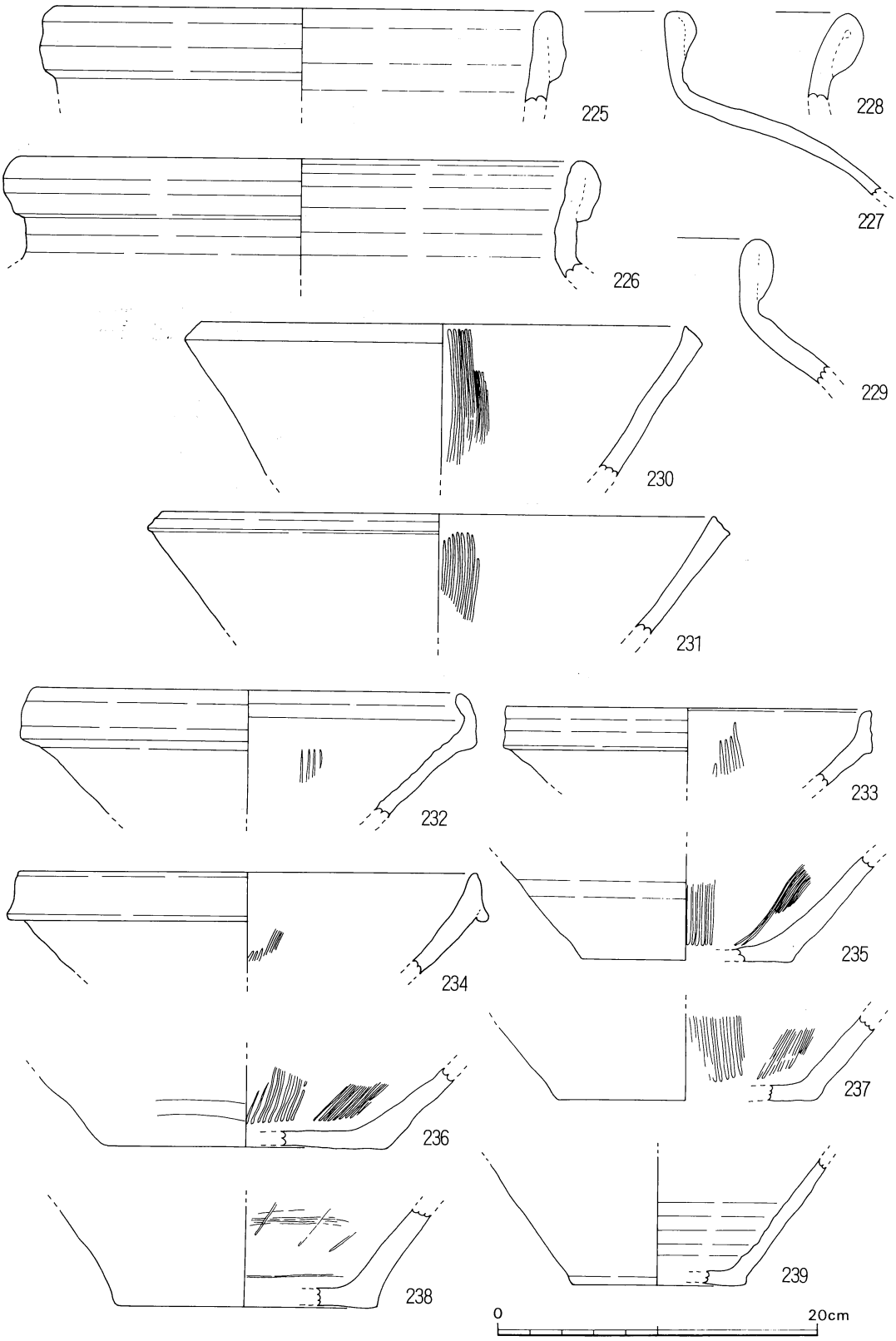
第34図　青磁(2), 染付(1)


182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
0
10cm

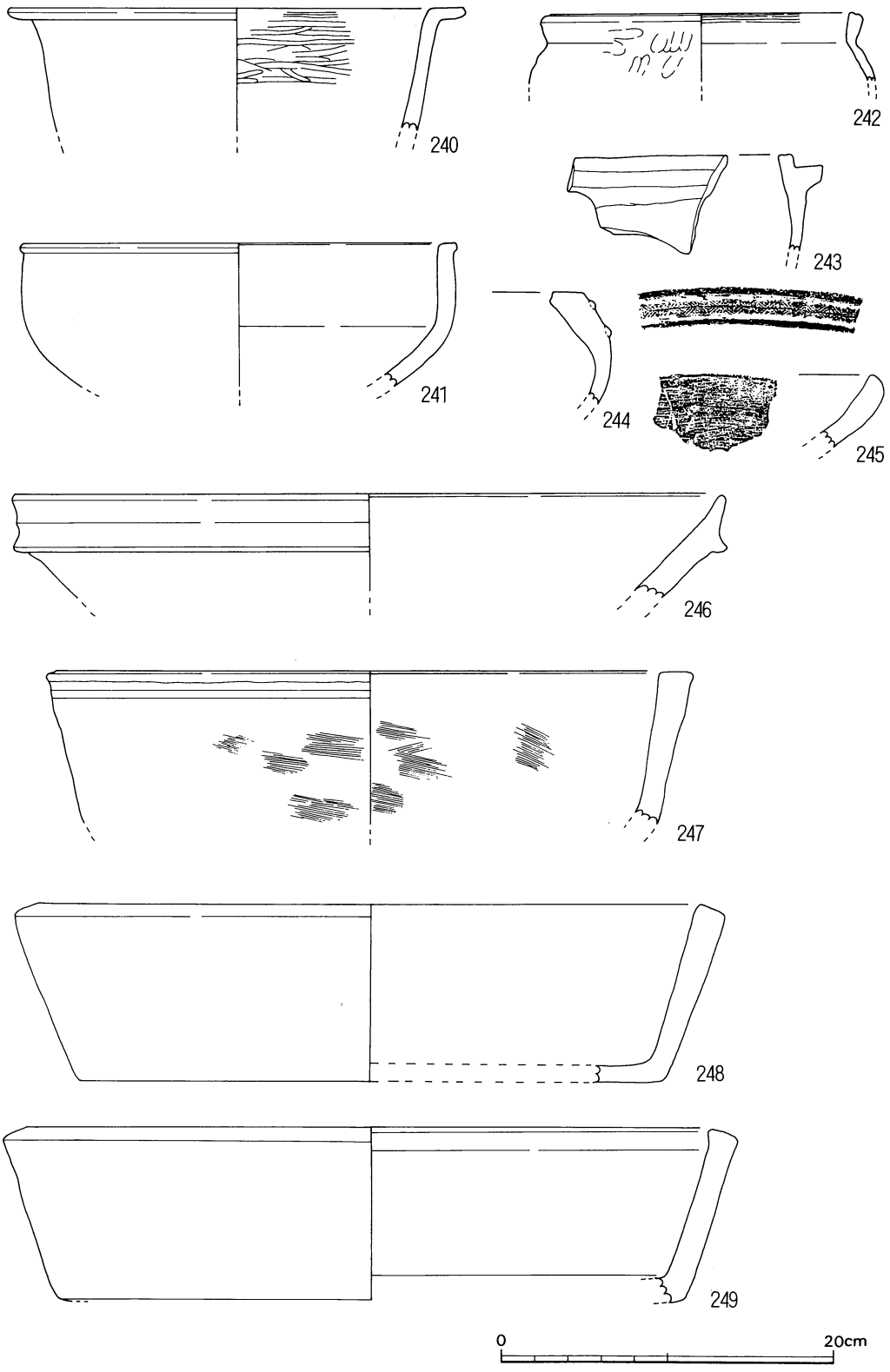
第35図　染付(2)



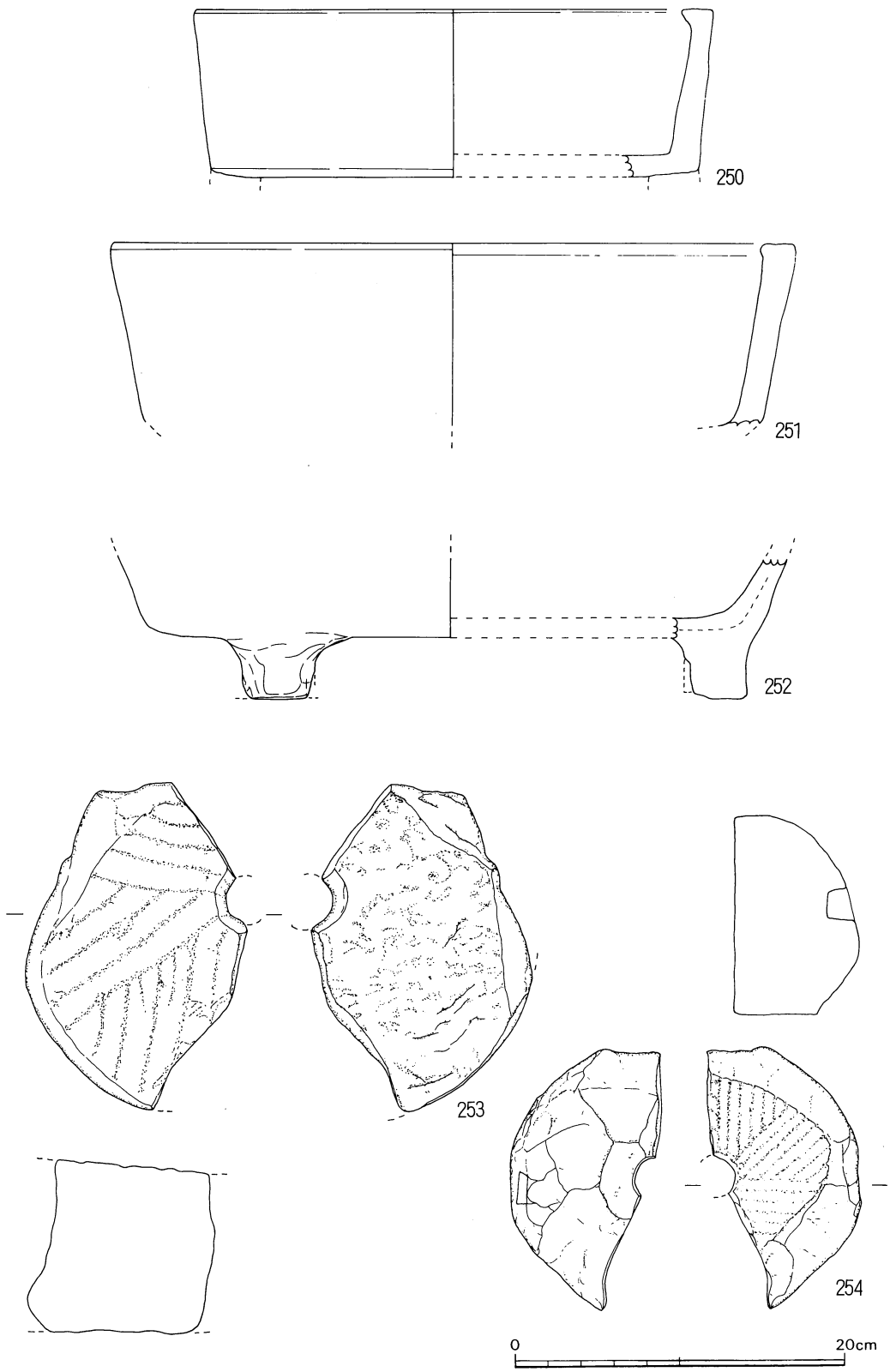
第36図　白磁·瀬戸，美濃系，褐釉陶器，備前



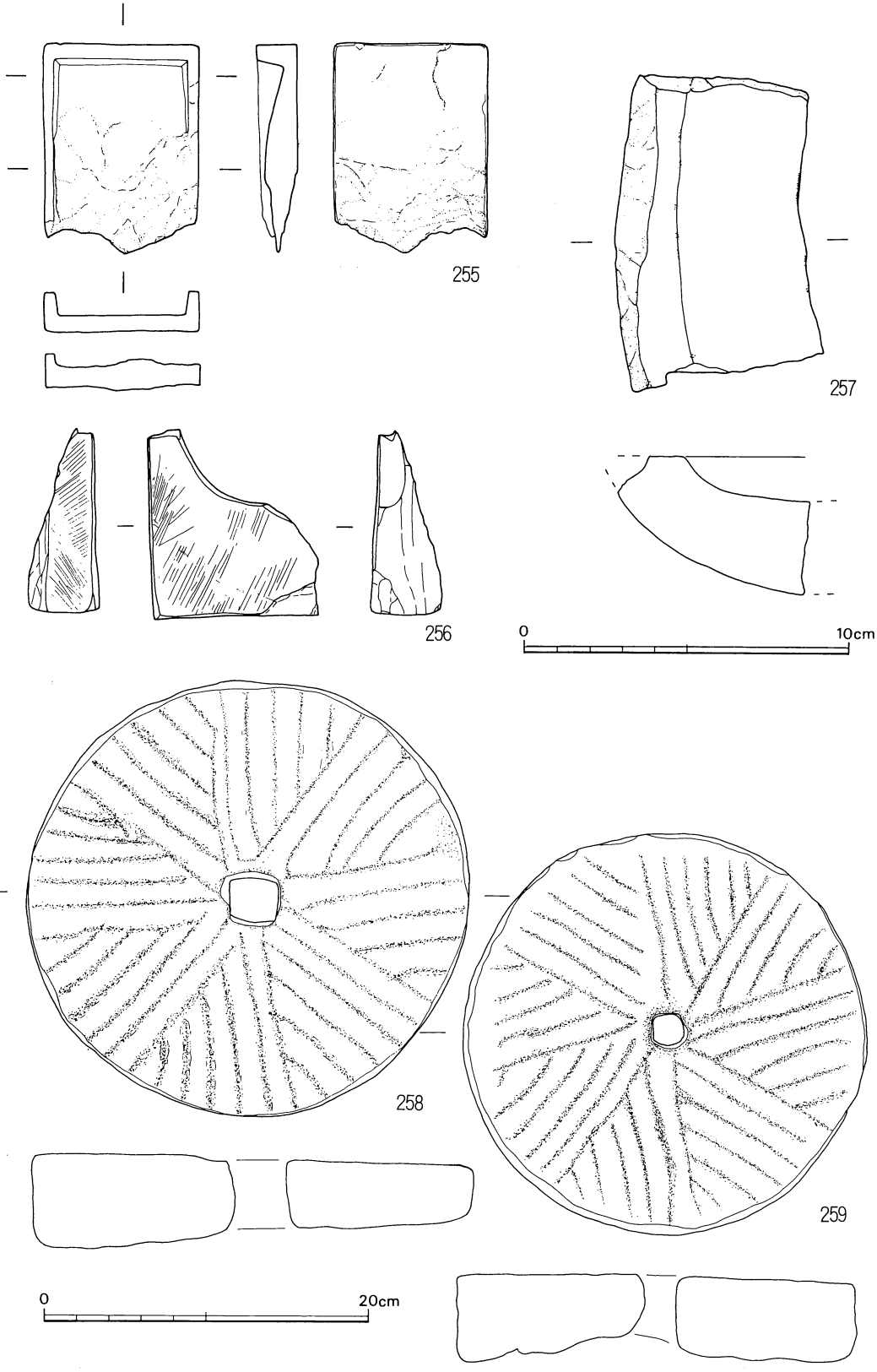
第37図　備前，産地不明陶器，瓦質土器



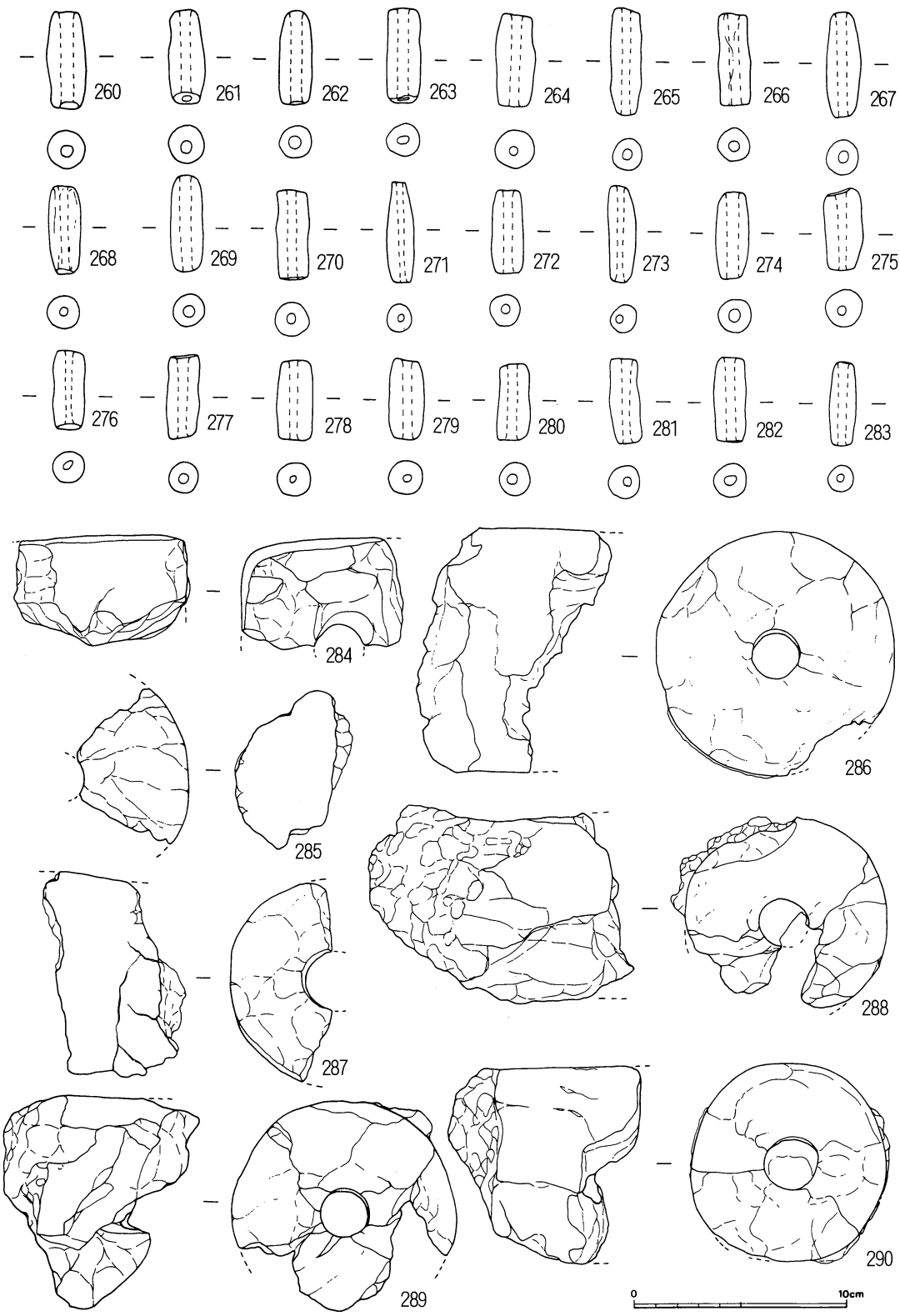
第38図　瓦質土器, 土師質土器



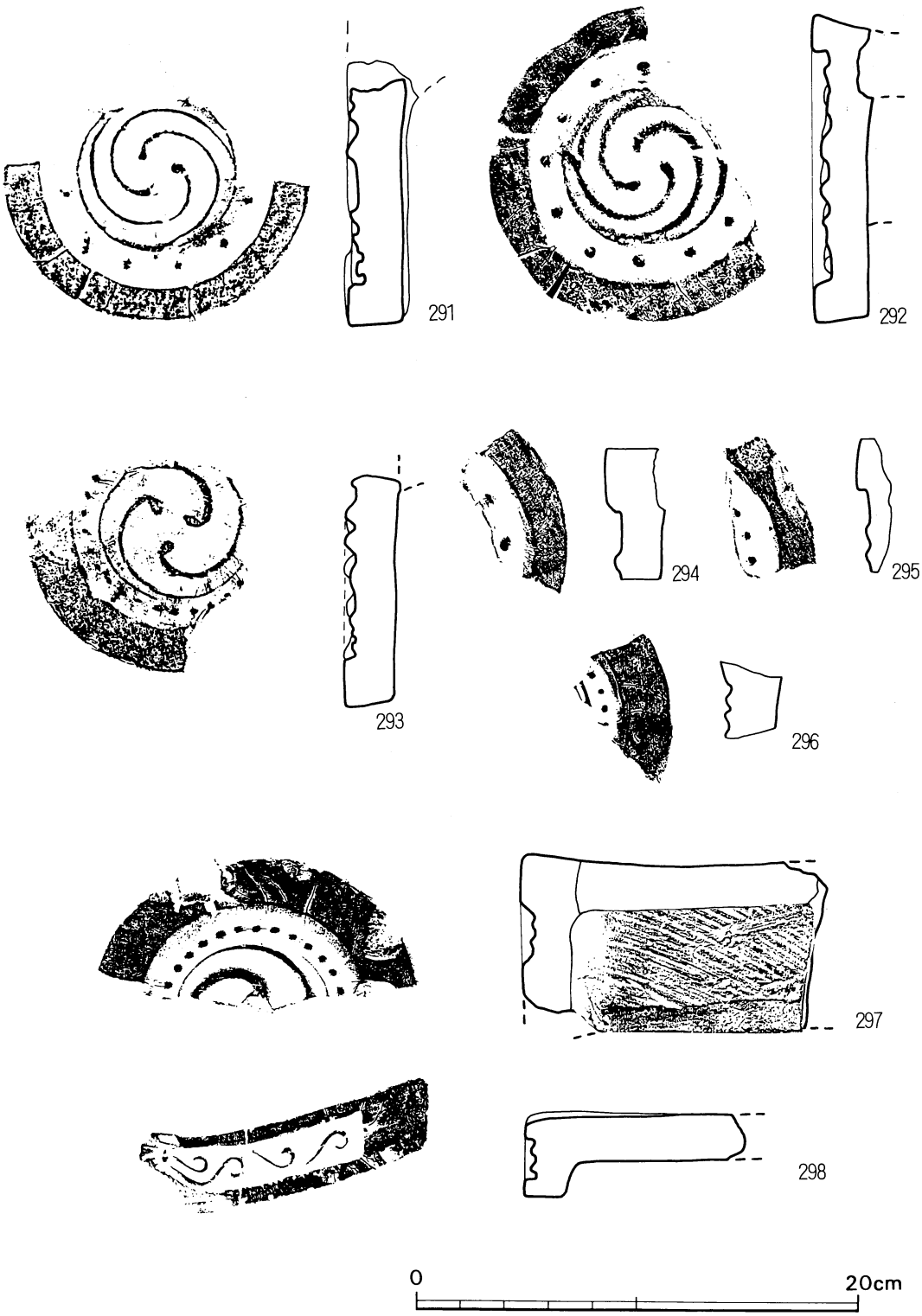
第39図　瓦質土器，土師質土器，石製品(1)



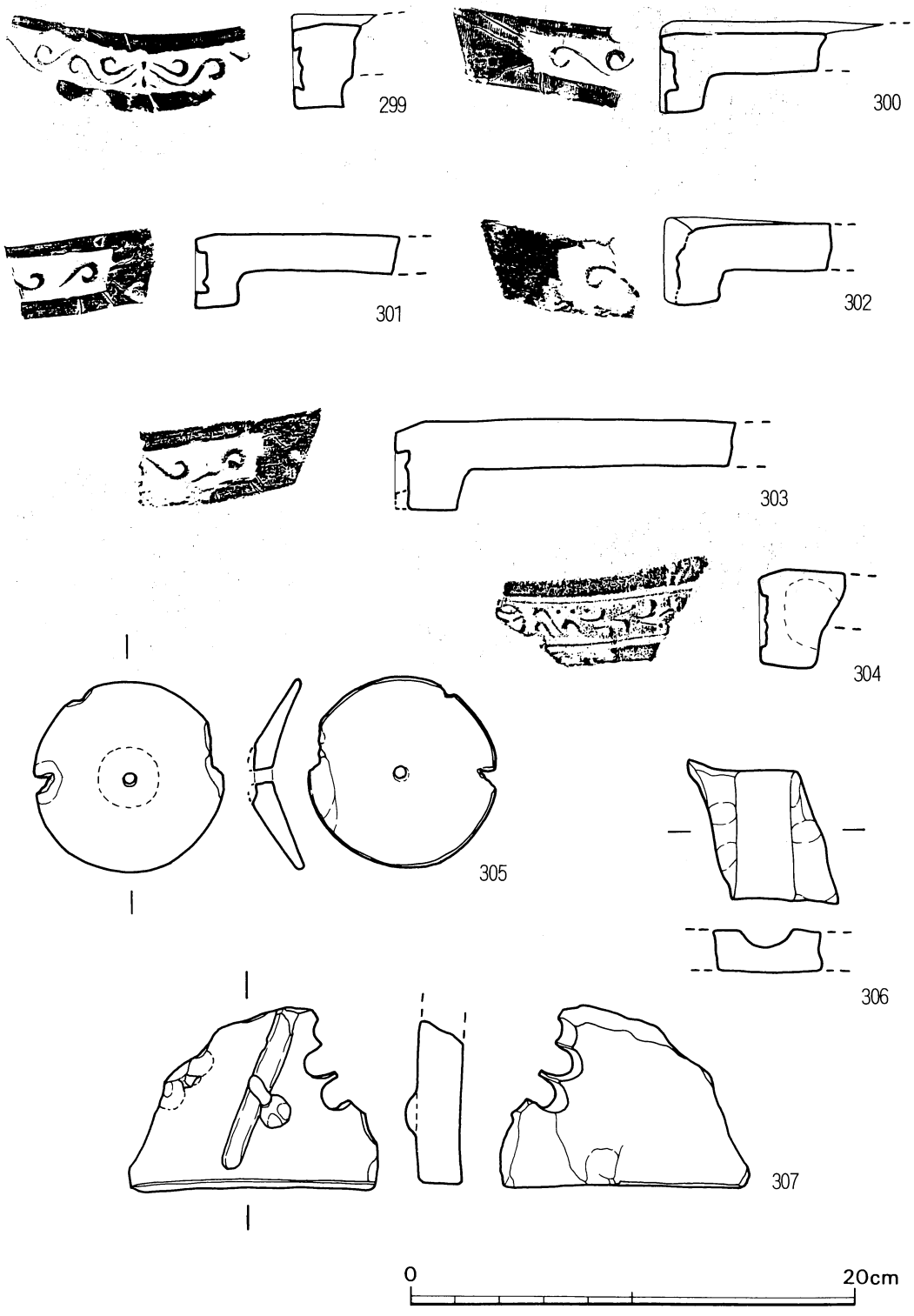
第40図　石製品(2)



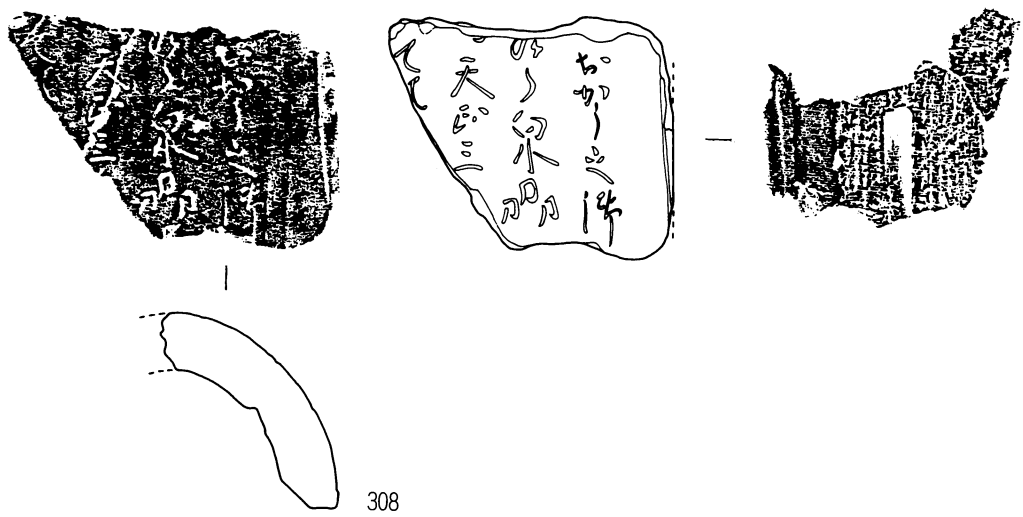
第41図　土製品(土錘・羽口)



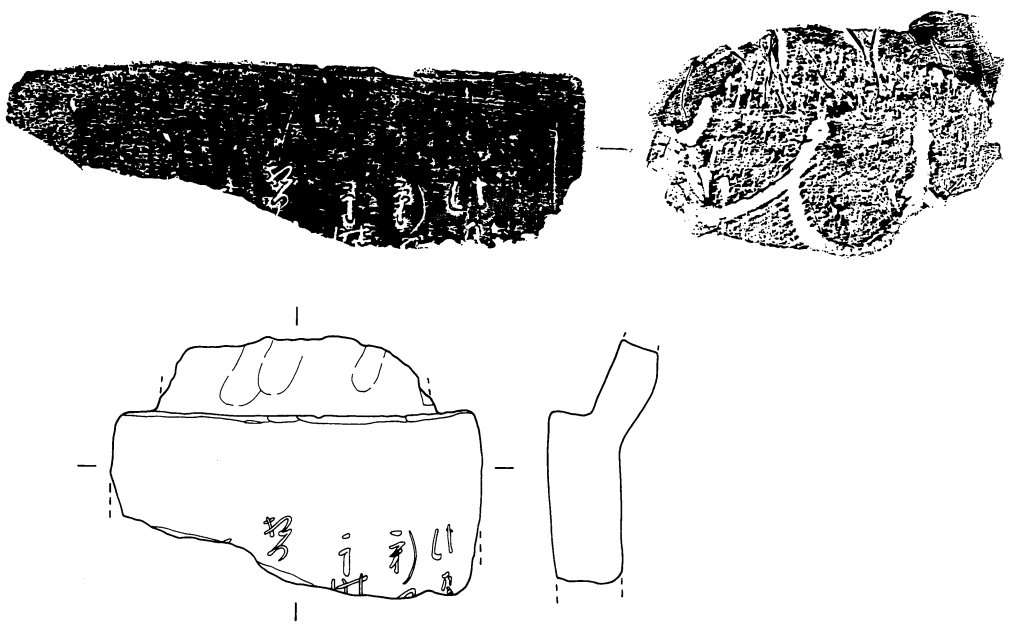
第42図　瓦(1)



第43図　瓦(2)



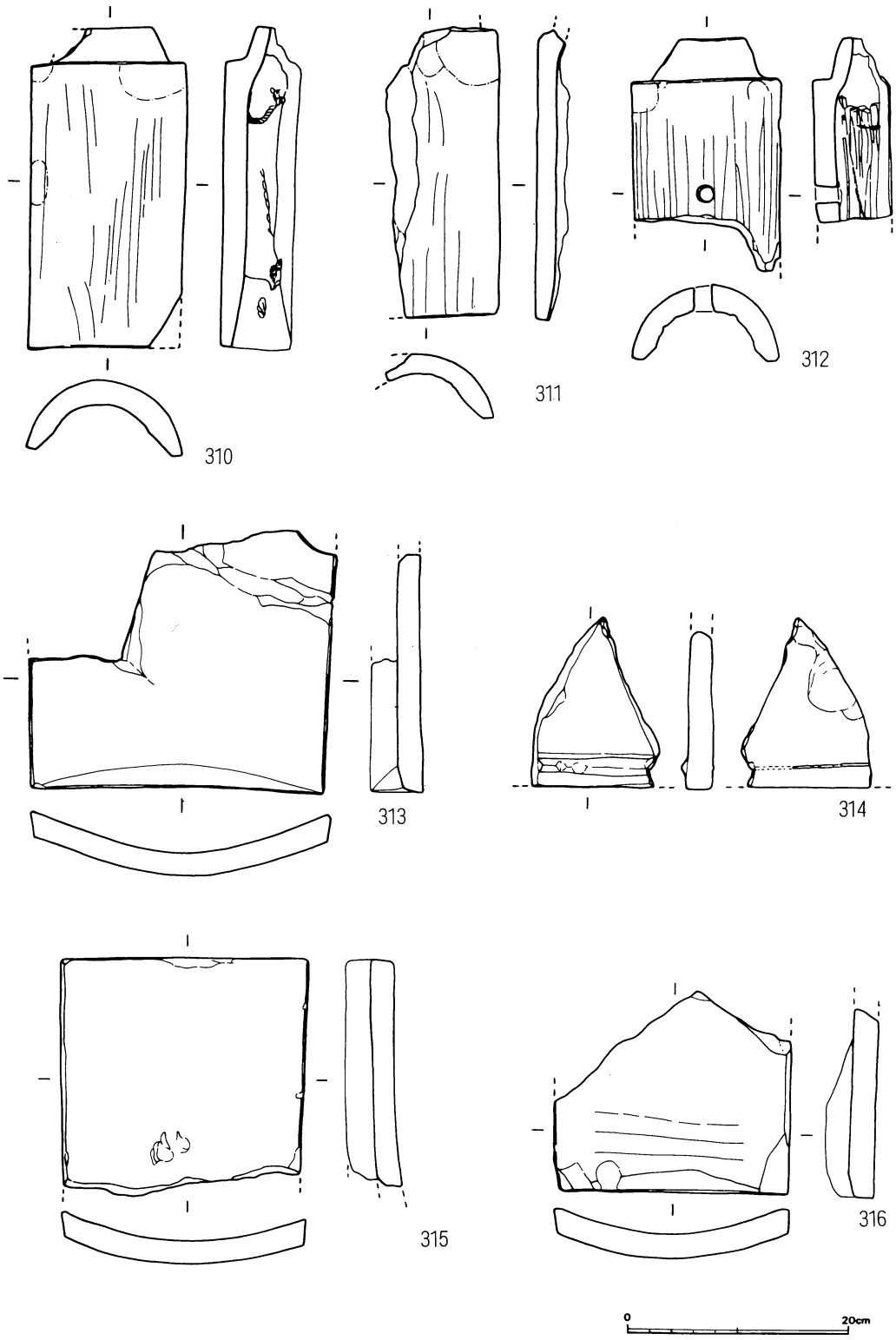
308



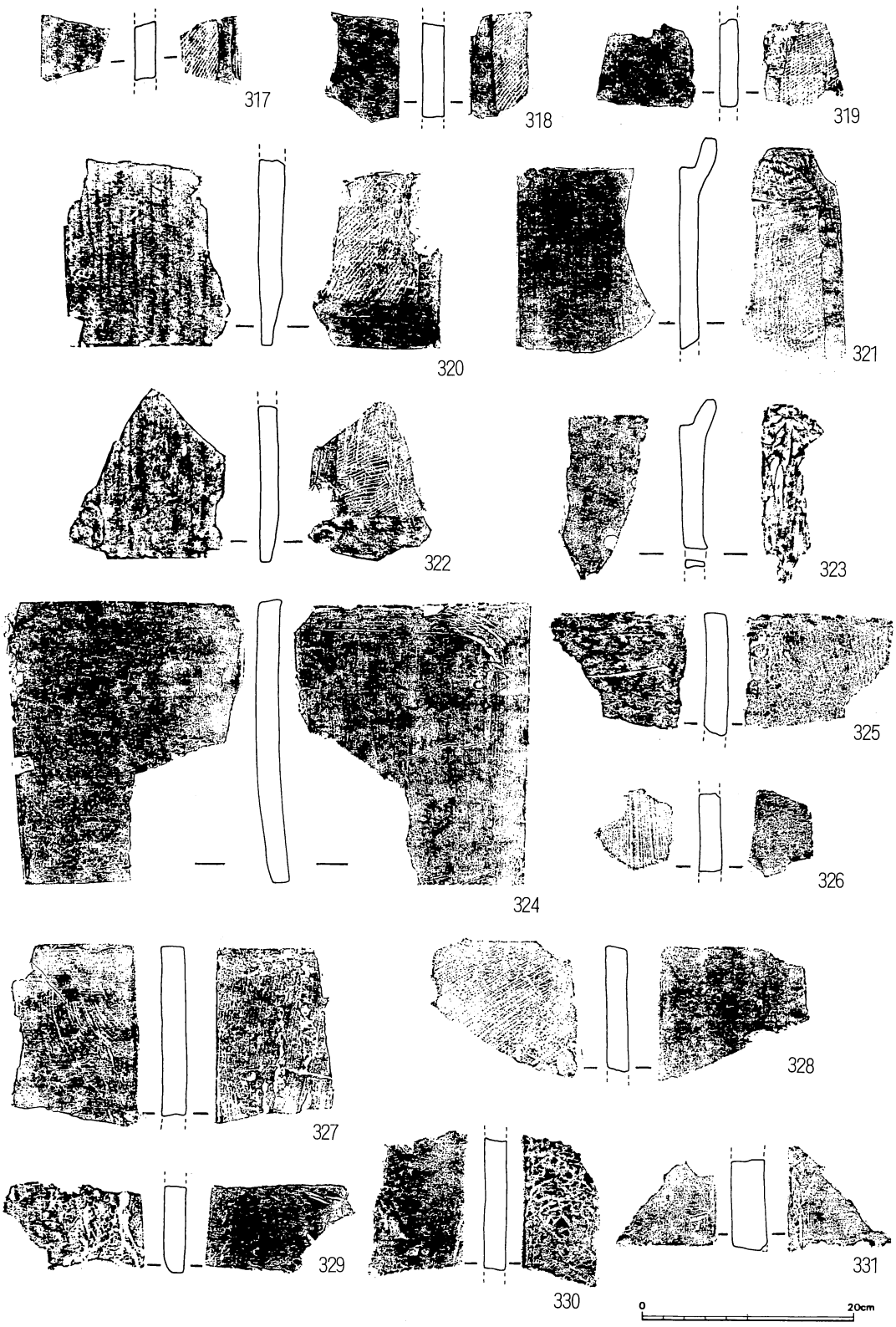
309

0 10cm

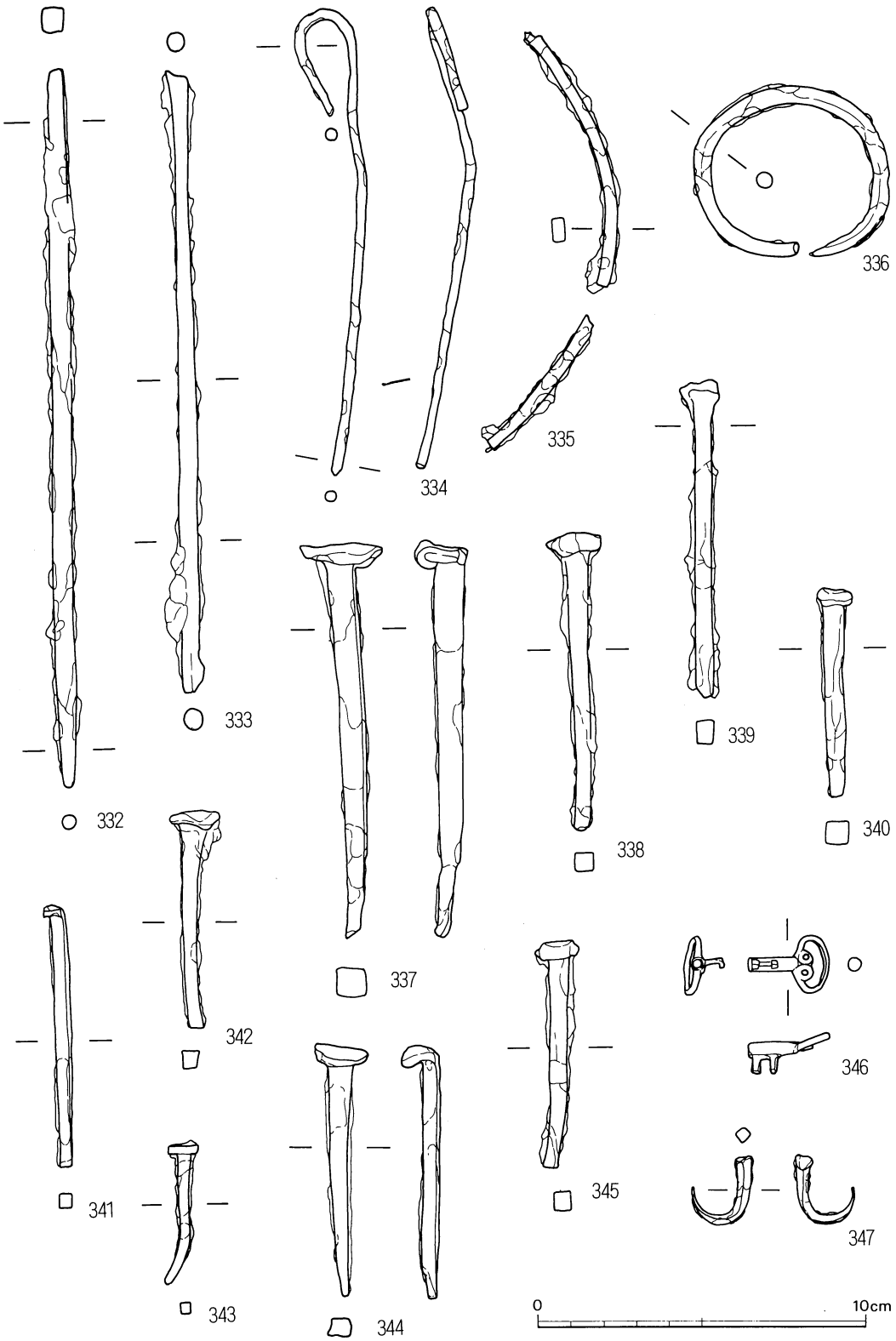
第44図　瓦(3)



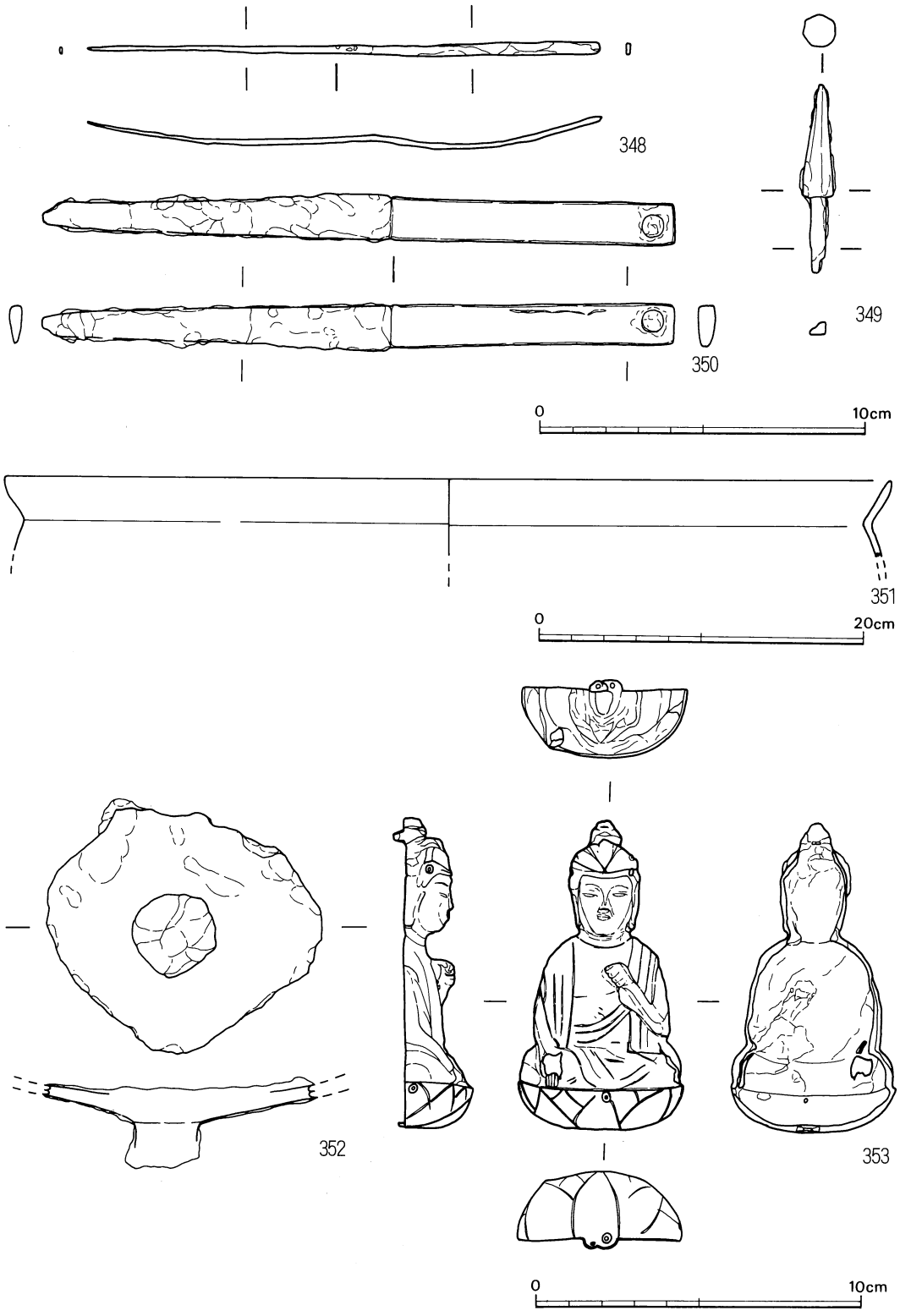
第45図　瓦(4)


317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
0
20cm

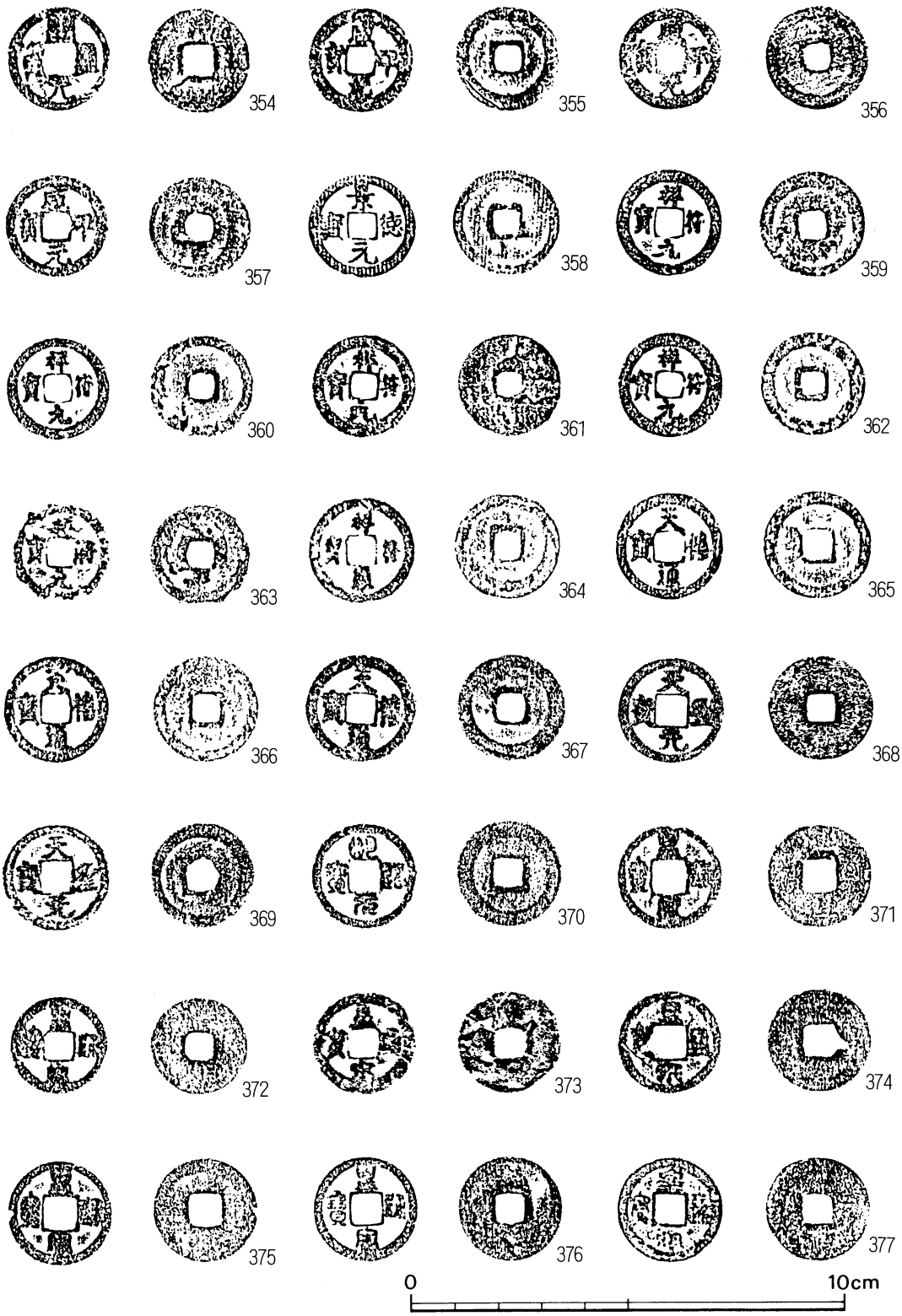
第46図　瓦(5)


332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
0
10cm

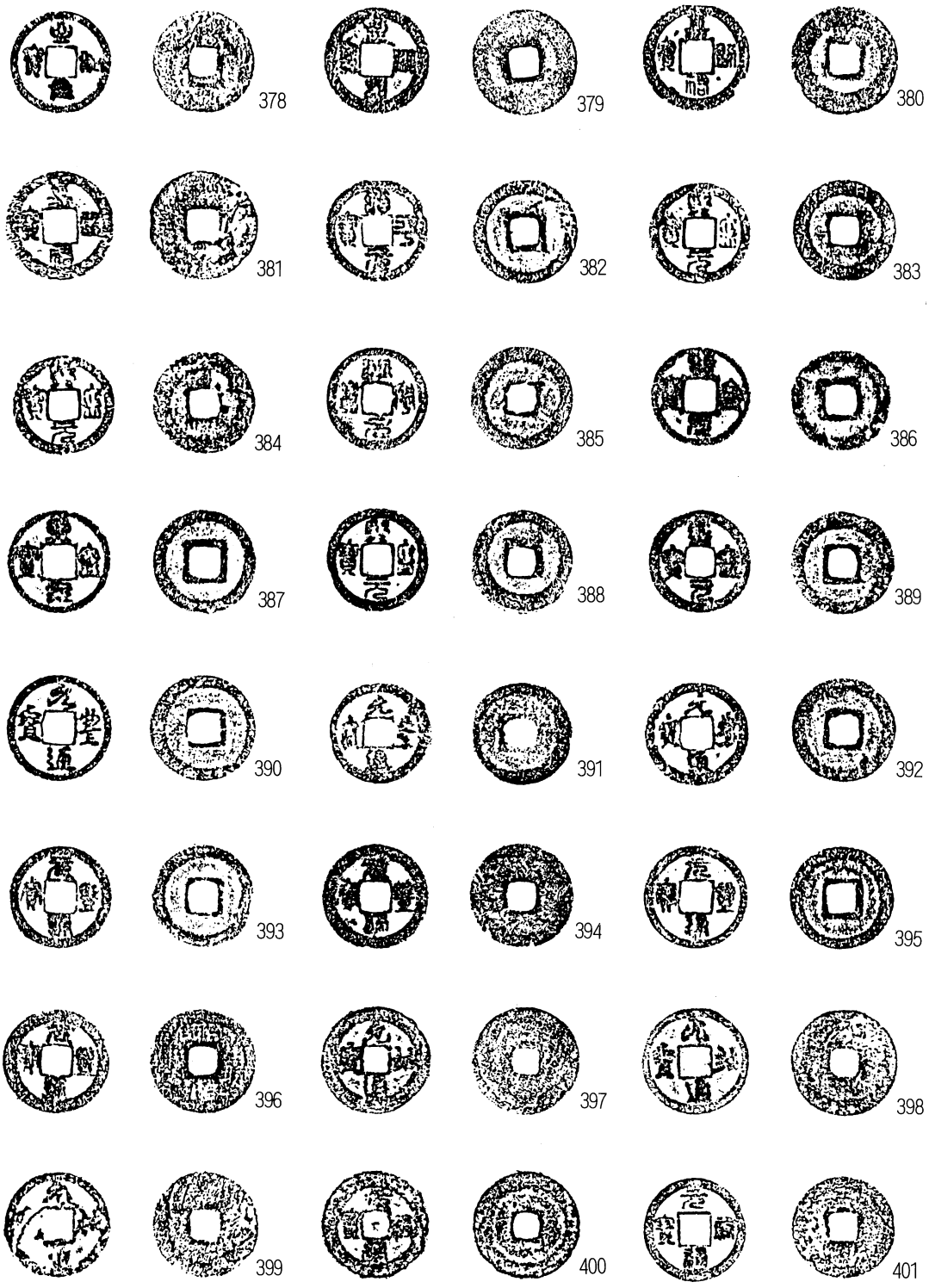
第47図　鉄製品(1)



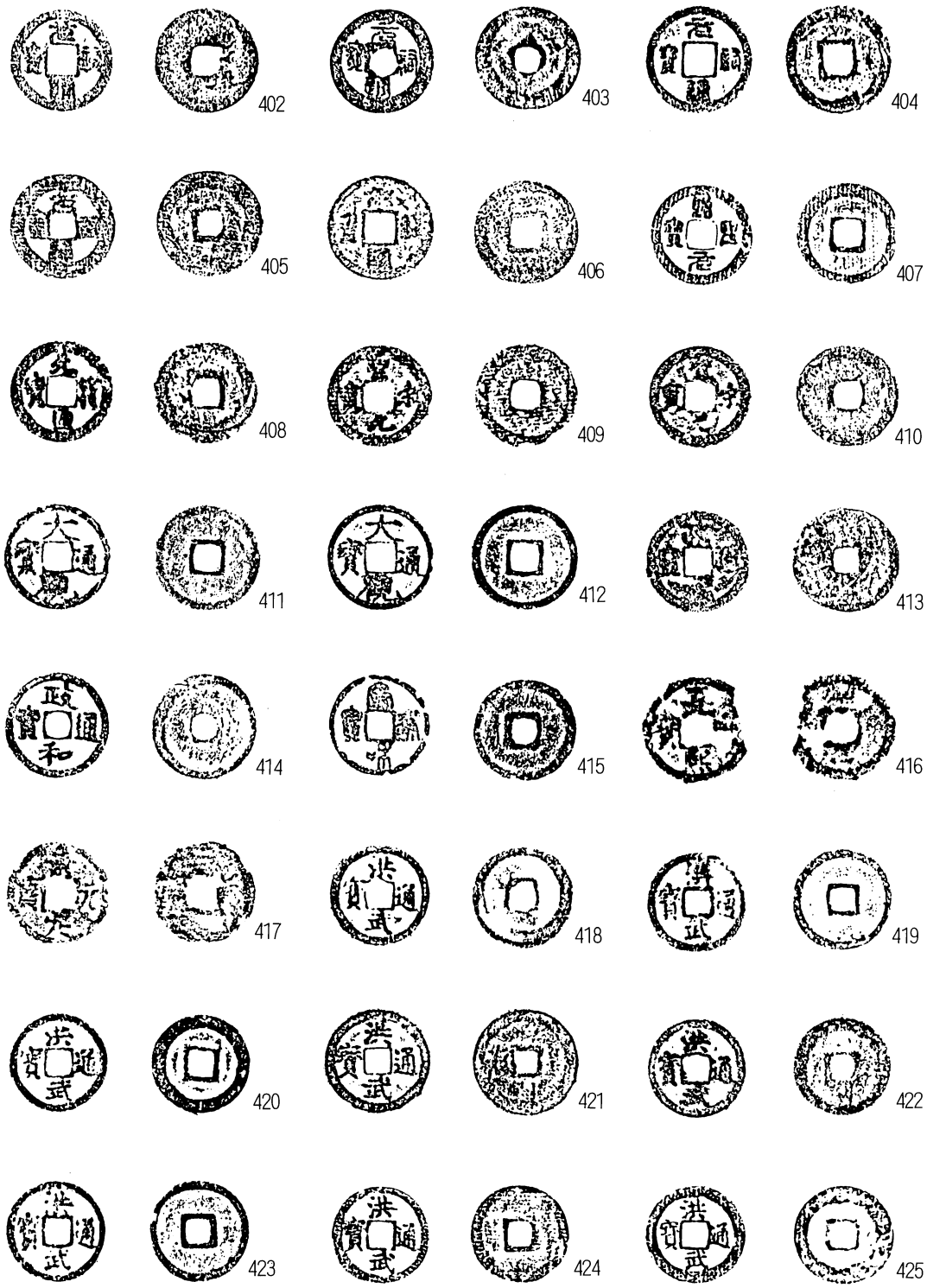
第48図　金属製品(2), 青銅製品



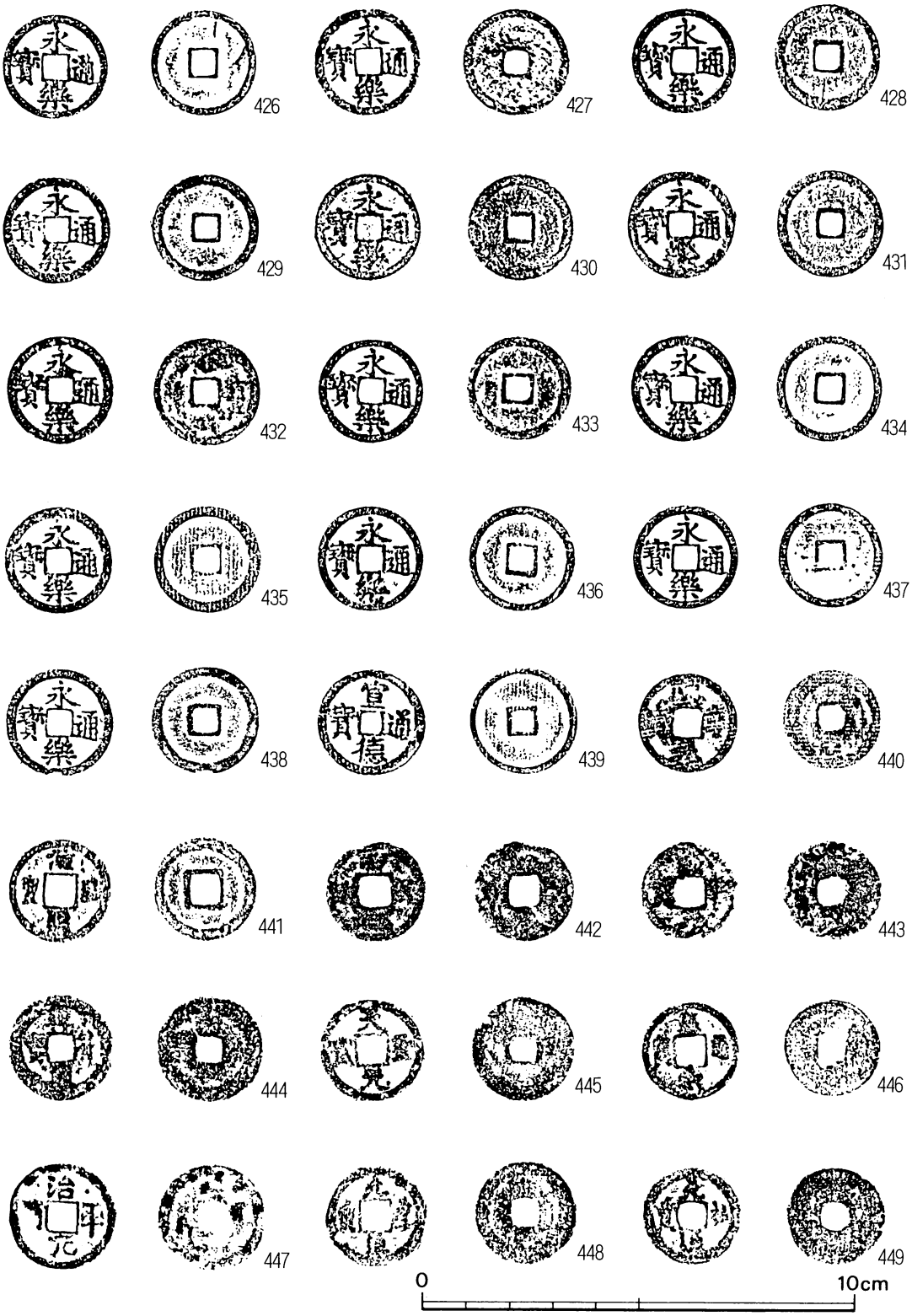
第49図　詰 pit 1 出土銭(1)



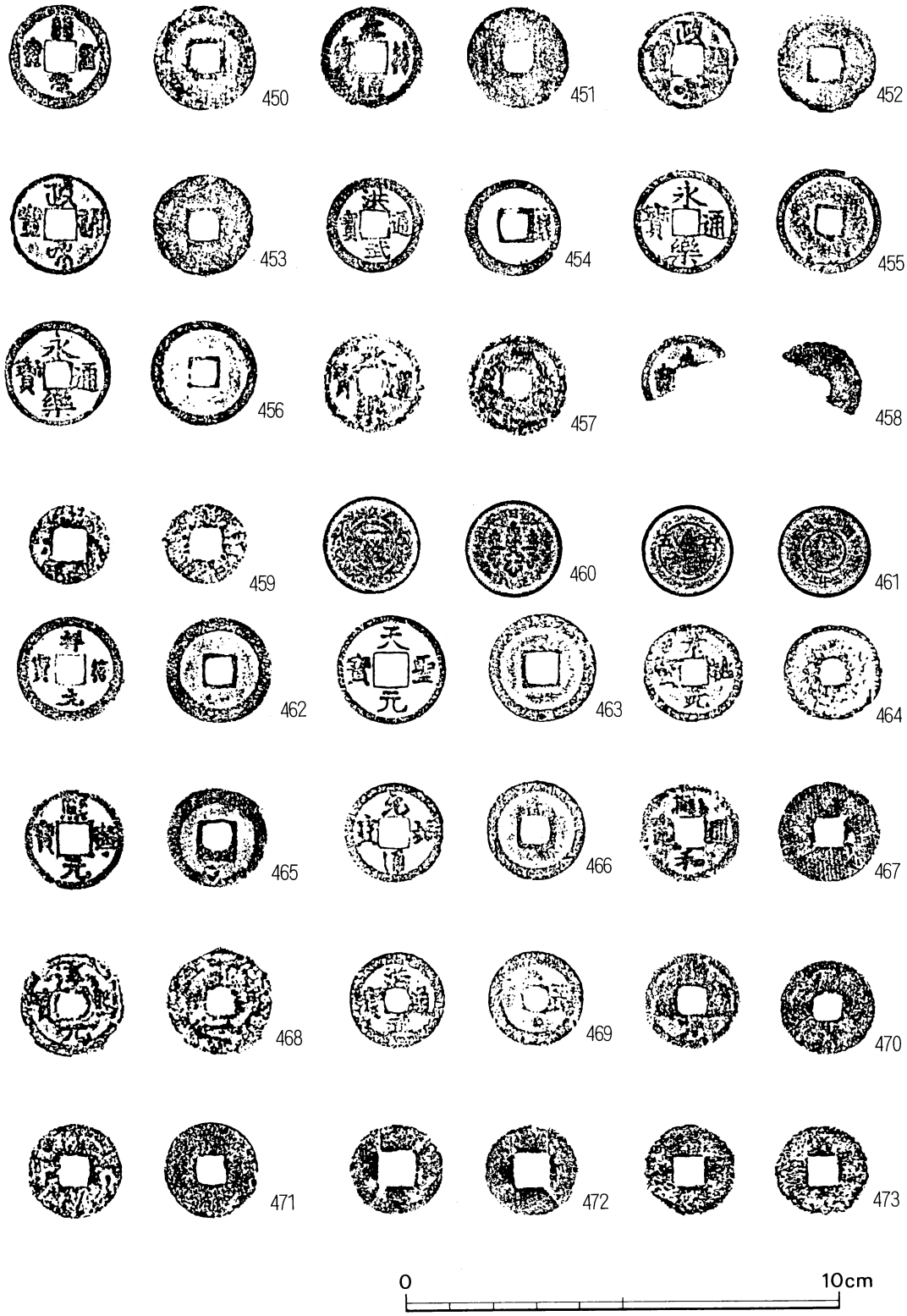
第50図　詰 pit 1 出土銭(2)



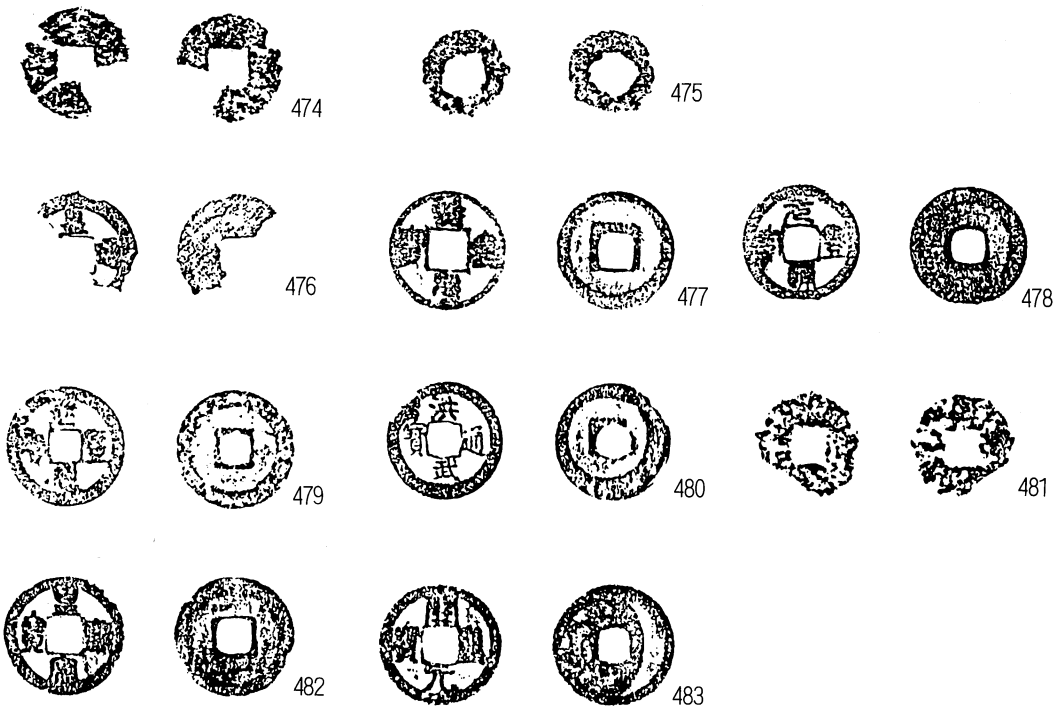
第51図　詰 pit 1 出土銭(3)



第52図　詰 pit 1 出土銭(4)〔426～444〕，詰遺構外出土銭〔445～449〕



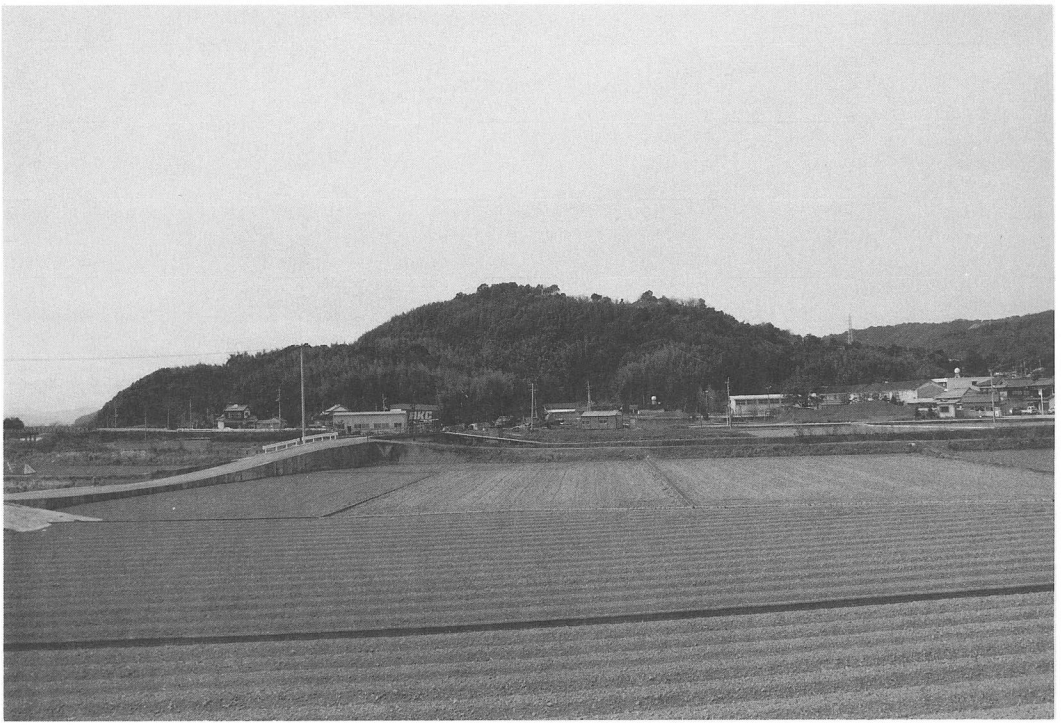
第53図　詰遺構外出土銭〔450～461〕，二ノ段〔462～473〕



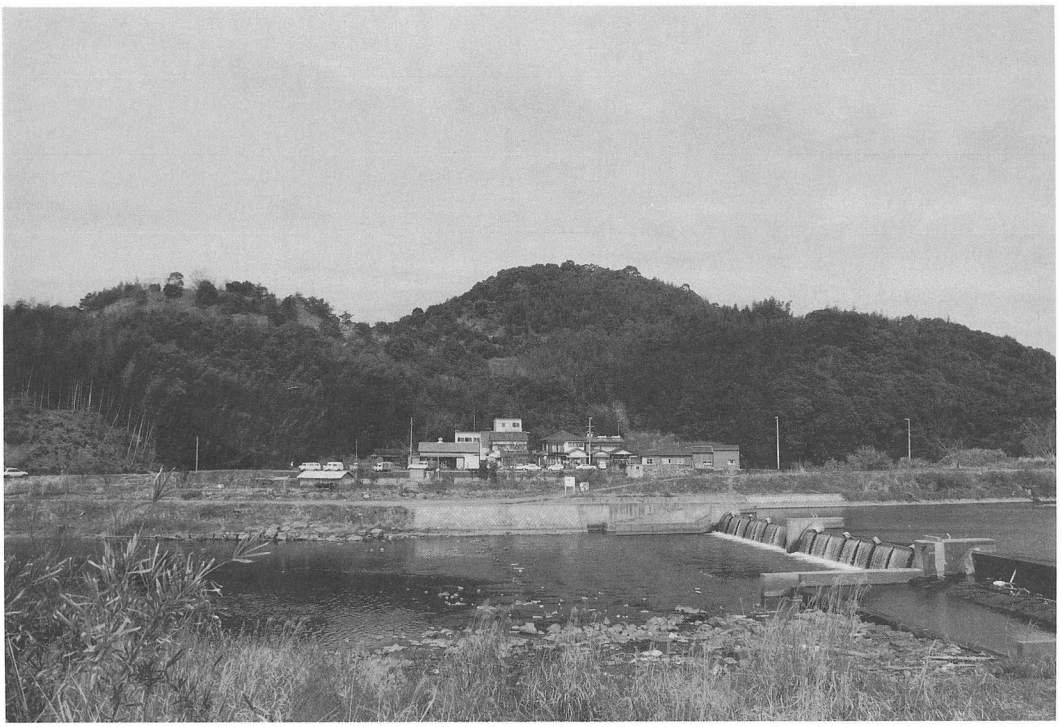
第54図　二ノ段〔474·475〕，三ノ段〔476～481〕出土銭，表採〔482·483〕

写真図版

（図版 1 ～49）

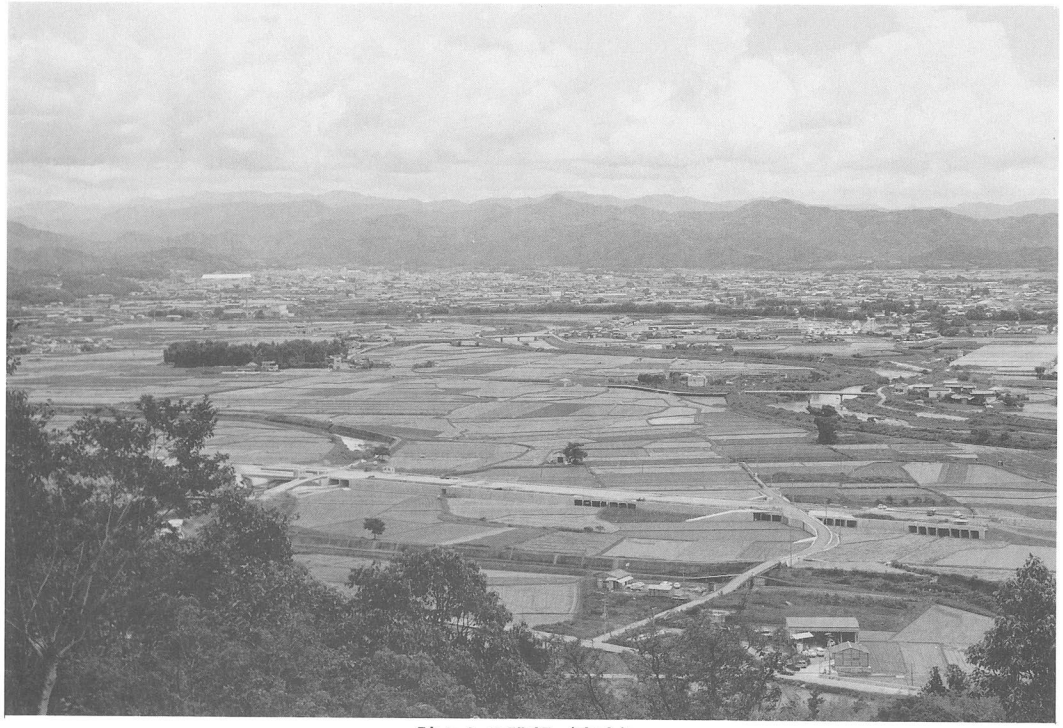


遠　　景（東より）



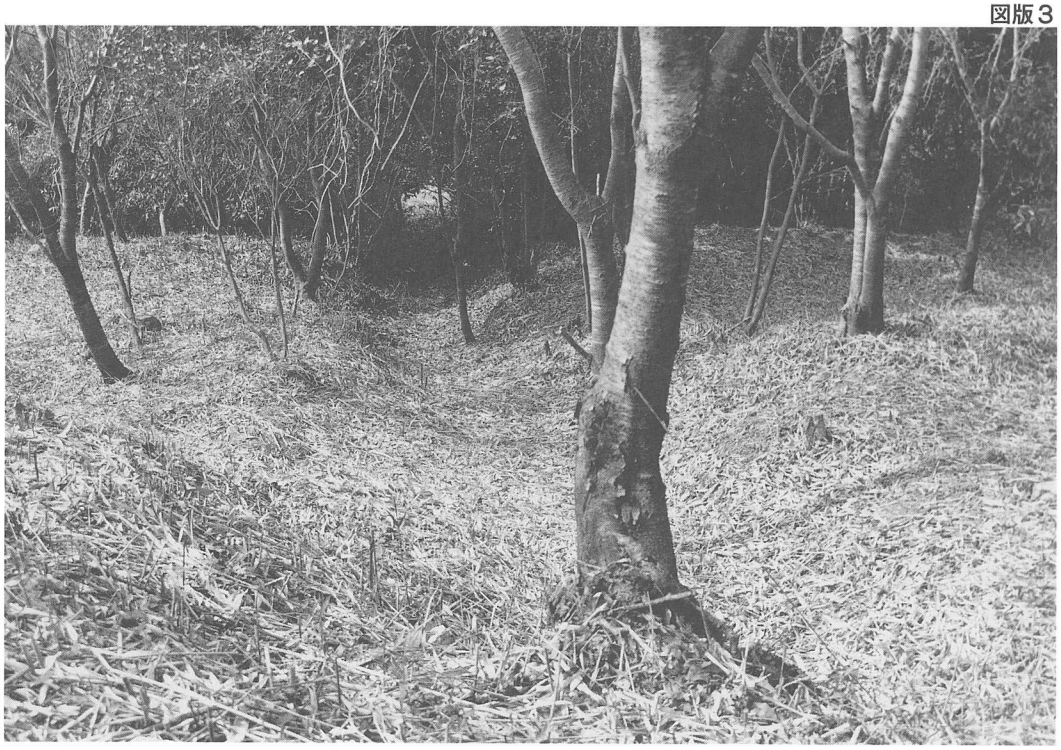
遠　　景（南より）

図版２



詰からの眺望（東方）

北部堀切

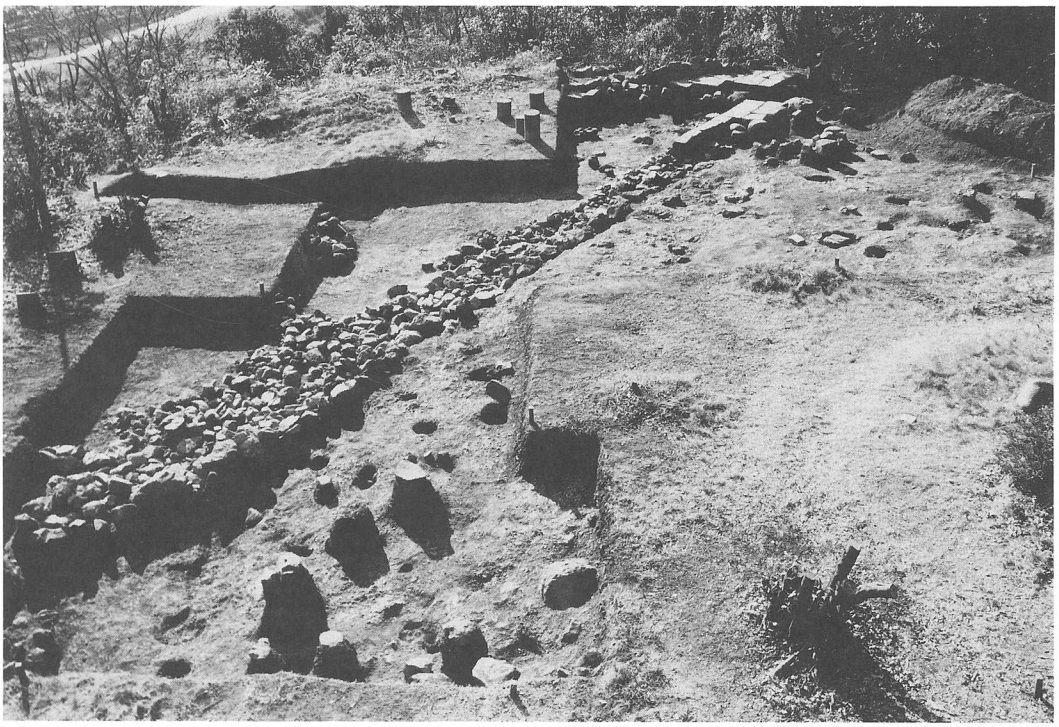


詰西斜面竪堀

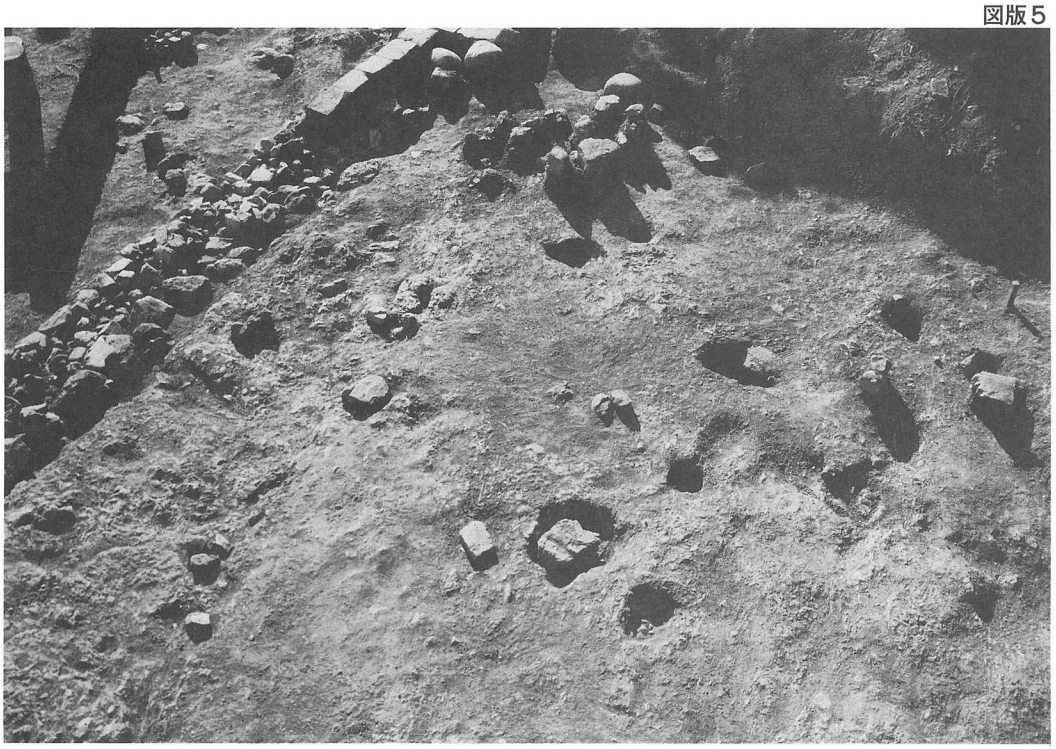
詰西斜面竪堀

図版４

詰　Ａ区　調査前



詰　Ａ区　ＳＢ1･2･ＳＸ1(北東より)



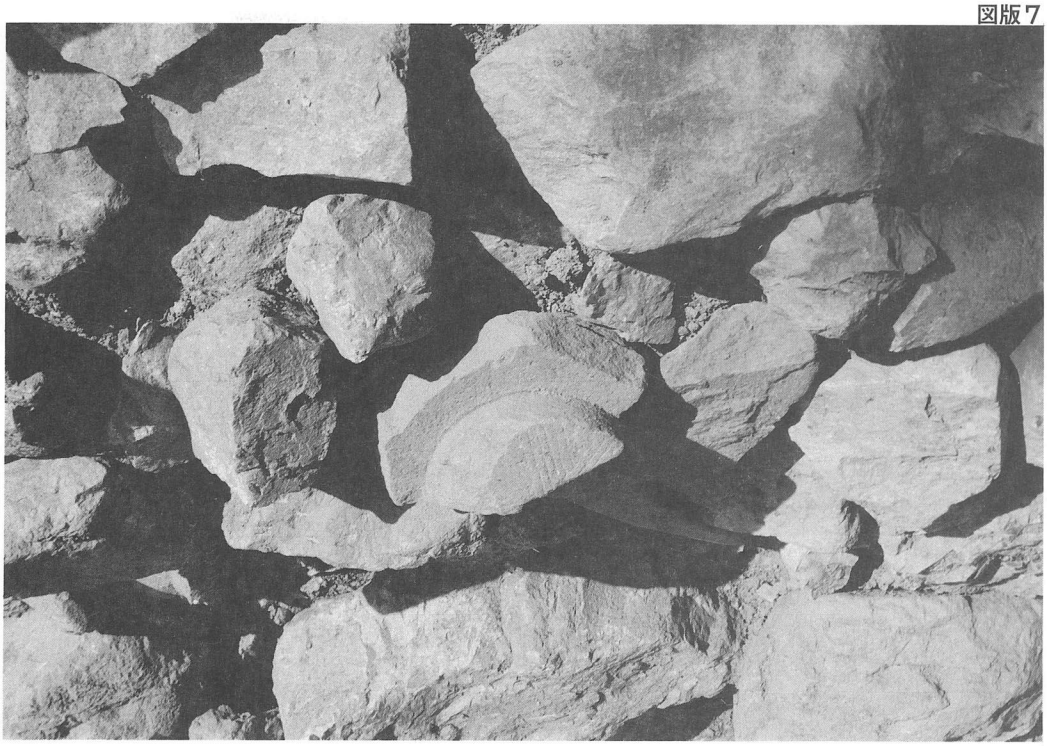
詰　A区　SB２・SX１・P１

詰　A区　SX１検出状態

図版６

詰　Ａ区　Ｐ１　検出状態

詰　Ａ区　Ｐ１　古銭出土状態

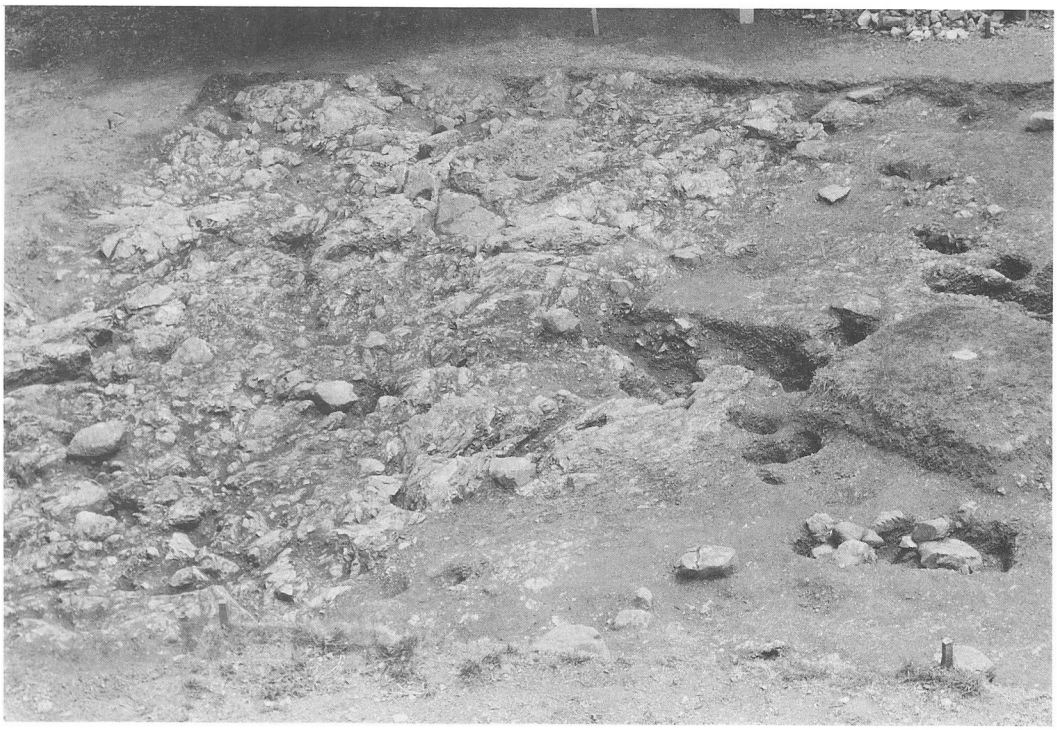


詰　A区　ＳＸ１　茶臼出土状態

詰　A区　刻銘瓦出土状態

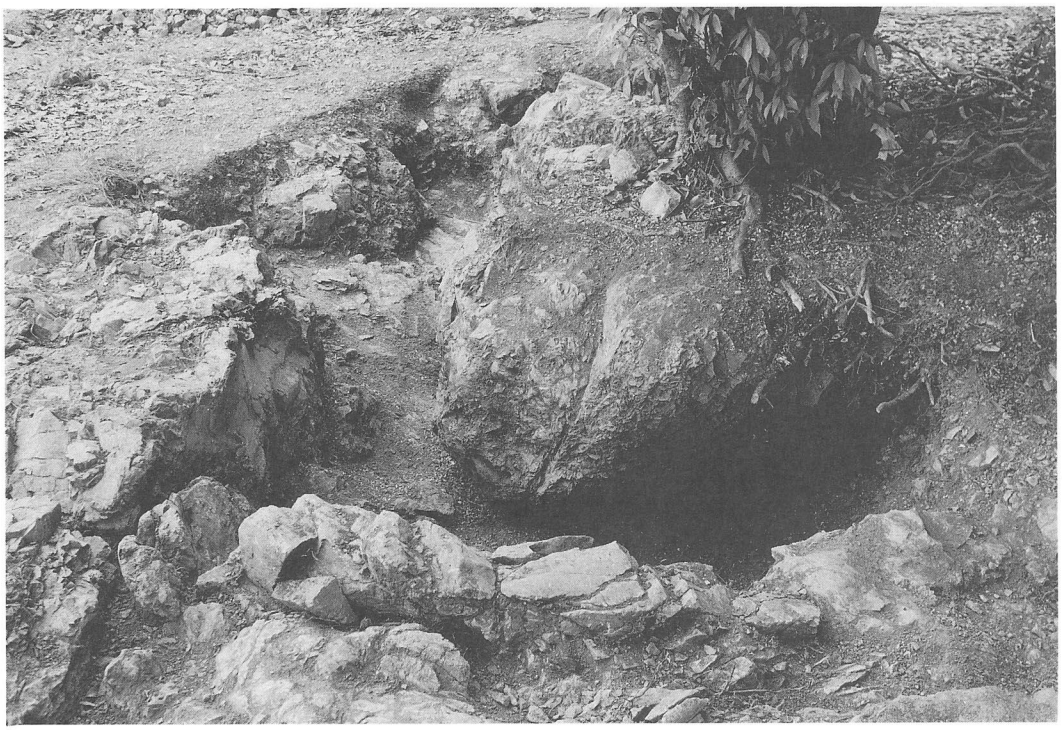
図版８

詰 Ｄ区 ＳＢ１（南西より）



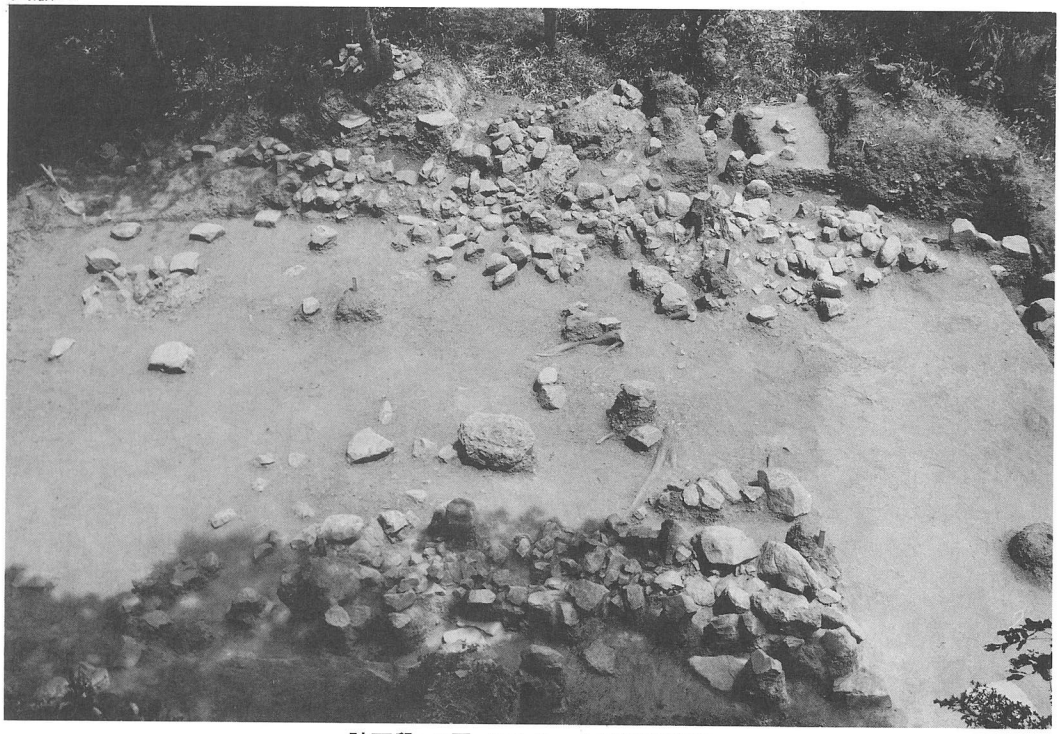
詰 Ｄ区 ＳＢ１ 礎石

詰　Ｈ区　全景（北西より）



詰　Ｈ区　ＳＫ１

図版10



詰下段 G区 ＳＢ３・土塁検出状態

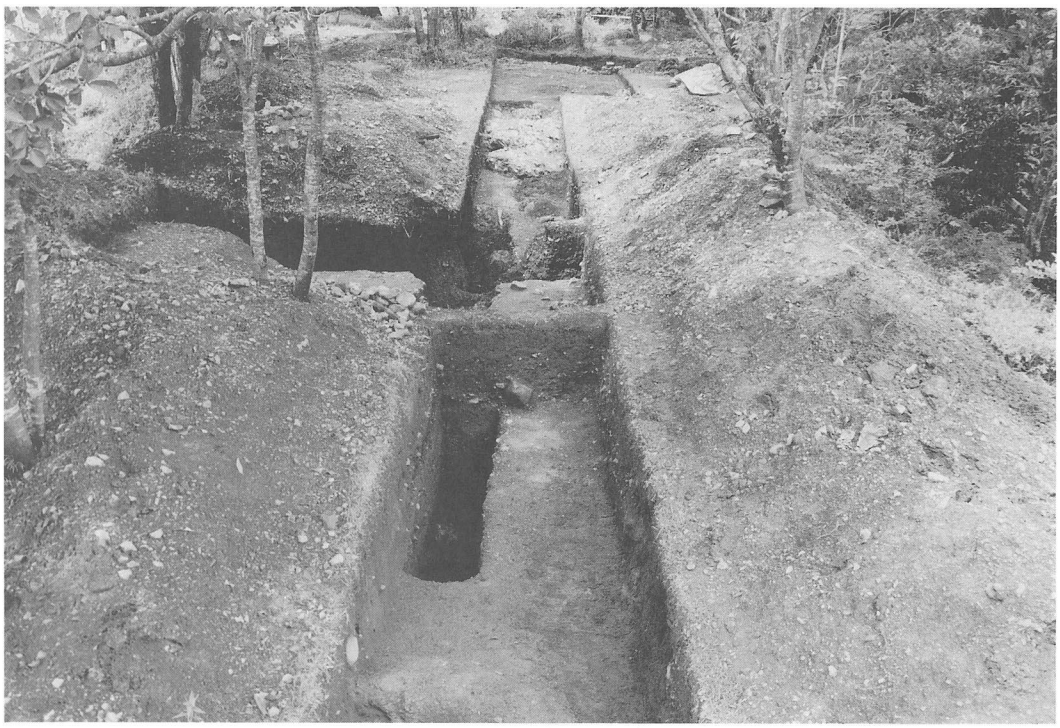
詰下段 G区 ＳＢ３・土塁（南西より）

詰下段 G区 ＳＫ２ 検出状態

詰下段 G区 ＳＫ２（南西より）

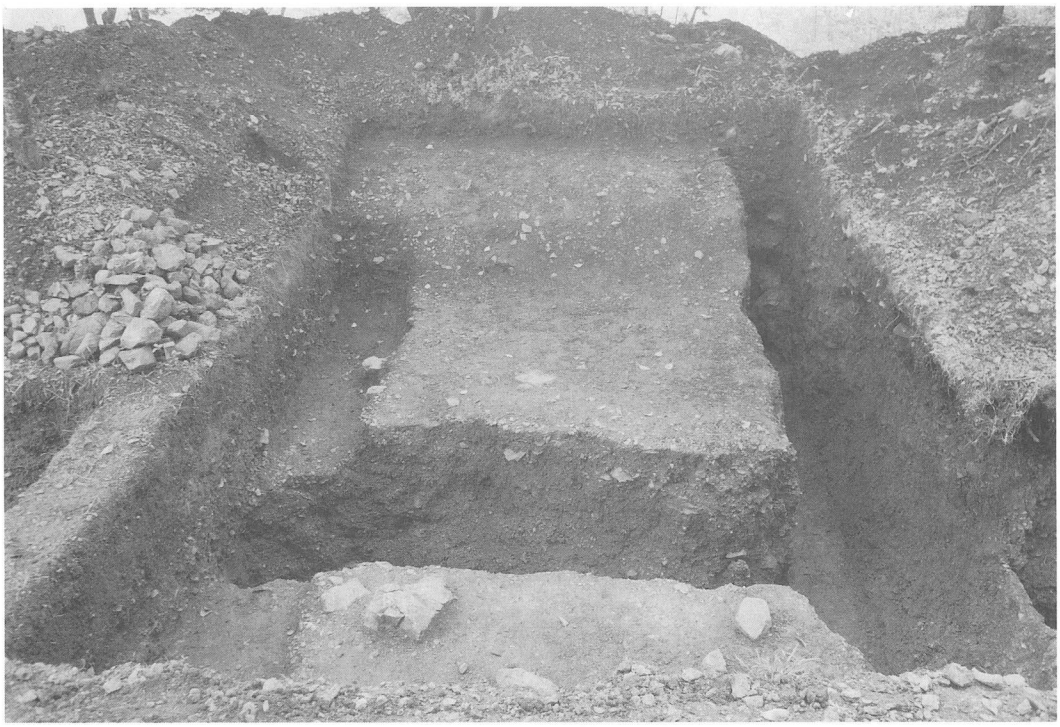
図版12

二ノ段　N区（南西より）



二ノ段　N区（北東より）

二ノ段　N区　南土塁検出状態（北西より）



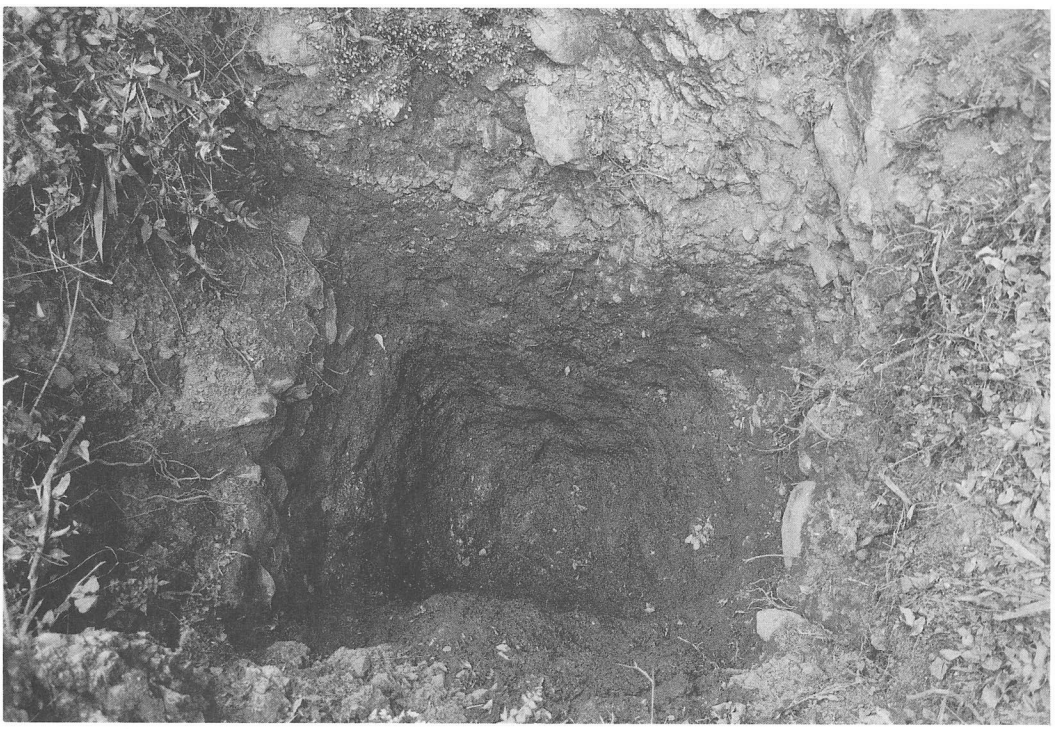
二ノ段　N区　土塁確認トレンチ

図版14

〔二ノ段側〕　堀切全景（北西より）　〔詰側〕

〔詰側〕　堀切全景（南東より）　〔二ノ段側〕

M区 井戸南側石積み



M区 井戸全景

図版16

三ノ段 K区 割石出土状態

三ノ段 K区 ピット検出状態